熊本県文化財調査報告　第146集

鞠智城跡

―第15次調査報告―

平成6年3月

熊本県教育委員会

序　　文

県内で唯一の古代山城であります「鞠智城跡」は、律令時代に編纂された『六国史』にも記載されている非常に貴重な遺跡であります。

熊本県教育委員会では遺跡の重要性を考慮し、これまでも、昭和42年以来、国庫補助事業や県の自主事業により、継続的な調査を行ってきました。

通算で15次調査にあたります平成５年度は、特に町道から東側の上原地区を重点的に発掘調査いたしました。

調査の実施にあたりましては、文化庁、専門調査員の先生方から適切な御指導をいただき、菊鹿町教育委員会、地元の米原地区の皆様など、多くの方々から御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

この報告書が、鞠智城跡の今後の保存・活用に向けての基本資料となれば幸いです。

平成６年３月３１日

熊本県教育長　道越　温

例　言

1．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県鹿本郡菊鹿町字長者原を中心に米原台地とその周辺地に展開する古代山城の「鞠智城跡」である。
　調査は、熊本県教育庁文化課が行った。
2．調査は文化庁の国庫補助事業で行なった。
3．本報告書には、第15次(平成５年度)の調査結果を収録した。
4．整理・報告書作成は、平成５年度に発掘調査と平行して行った。
　出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。
5．発掘調査は、大田幸博(文化課参事)・坂口圭太郎(同課文化財保護主事)がその任にあたった。
6．出土遺物の実測は大田が担当した。
7．本書の執筆・編集は大田が行った。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第１節　調査の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の進展 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　近年の調査の変遷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第Ⅱ章　遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第１節　遺跡の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第２節　鞠智城の歴史 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第３節　鞠智城の城域について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第４節　古代朝鮮式山城の状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第Ⅲ章　調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第１節　第15次調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第２節　遺構の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第３節　鞠智城時代の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第４節　鞠智城時代以前の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

第Ⅳ章　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

第Ⅴ章　ま　と　め ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88

挿 図 目 次

第１図　鞠智城跡より検出の建物跡配置図３
第２図　菊鹿町位置図・・・・・・・・・・６
第３図　菊鹿町地形図・・・・・・・・・・６
第４図　鞠智城跡城域図・・・・・・・・・８
第５図　西日本の古代朝鮮式山城分布図・９
第６図　第15次調査遺構配置図・・・・・12
第７図　21調査区実測図・・・・・・・・・13
第８図　22調査区実測図・・・・・・・・・15
第９図　24調査区実測図・・・・・・・・・15
第10図　23調査区実測図・・・・・・・・・16
第11図　25調査区実測図・・・・・・・・・17
第12図　26調査区実測図・・・・・・・・・17
第13図　29調査区トレンチ実測図・・・・17
第14図　27調査区実測図・・・・・・・・・19
第15図　28調査区実測図・・・・・・・・・19
第16図　30調査区実測図・・・・・・・・・21
第17図　31調査区実測図・・・・・・・・・23
第18図　34－Ａ調査区実測図・・・・・・25
第19図　34－Ｂ調査区実測図・・・・・・25
第20図　36調査区実測図・・・・・・・・・25
第21図　22調査区実測図(51号建物跡)・・27
第22図　52号建物跡実測図・・・・・・・・28
第23図　53号建物跡実測図・・・・・・・・29
第24図　54号建物跡実測図・・・・・・・・30
第25図　55号建物跡実測図・・・・・・・・30
第26図　23調査区１号土坑実測図・・・・32
第27図　23調査区２号土坑断面図・・・・32
第28図　23調査区土坑(炭化物を伴う)実測図・・33
第29図　24調査区土坑(備前焼を伴う)実測図・・34
第30図　25調査区土坑断面図・・・・・・35
第31図　28調査区集石実測図・・・・・・36
第32図　30調査区１号甕棺検出状況・・・37
第33図　30調査区甕棺散在状況・・・・・38
第34図　31調査区土坑実測図・・・・・・39
第35図　31調査区３号土坑実測図・・・・39
第36図　出土遺物実測図（1）・・・・・・43
第37図　出土遺物実測図（2）・・・・・・44
第38図　出土遺物実測図（3）・・・・・・46
第39図　出土遺物実測図（4）・・・・・・48
第40図　出土遺物実測図（5）・・・・・・50
第41図　出土遺物実測図（6）・・・・・・52
第42図　出土遺物実測図（7）・・・・・・53
第43図　出土遺物実測図（8）・・・・・・56
第44図　出土遺物実測図（9）・・・・・・58
第45図　出土遺物実測図(10)・・・・・・59
第46図　出土遺物実測図(11)・・・・・・60
第47図　出土遺物実測図　瓦（1）・・・・61
第48図　出土遺物実測図　瓦（2）・・・・62
第49図　出土遺物実測図　瓦（3）・・・・63
第50図　出土遺物実測図　瓦（4）・・・・64
第51図　出土遺物実測図　瓦（5）・・・・65
第52図　出土遺物実測図　瓦（6）・・・・66
第53図　出土遺物実測図　瓦（7）・・・・68
第54図　出土遺物実測図　瓦（8）・・・・69
第55図　出土遺物実測図　瓦（9）・・・・70
第56図　出土遺物実測図　瓦(10)・・・・71
第57図　出土遺物実測図　瓦(11)・・・・72
第58図　出土遺物実測図　瓦(12)・・・・73
第59図　出土遺物実測図　瓦(13)・・・・75
第60図　出土遺物実測図　瓦(14)・・・・76
第61図　出土遺物実測図　瓦(15)・・・・77
第62図　出土遺物実測図　瓦(16)・・・・78

第63図　出土遺物実測図　瓦(17)・・・・79
第64図　出土遺物実測図　瓦(18)・・・・80
第65図　出土遺物実測図　瓦(19)・・・・81
第66図　出土遺物実測図　瓦(20)・・・・83
第67図　出土遺物実測図　瓦(21)・・・・84
第68図　出土遺物実測図　瓦(22)・・・・85

表　目　次

第１表　近年の調査の変遷一覧①・・・・２
第２表　近年の調査の変遷一覧②・・・・３
第３表　西日本の古代朝鮮式山城一覧・・９
第４表　各調査区の概要①・・・・・・・10
第５表　各調査区の概要②・・・・・・・11
第６表　51号建物跡掘形観察表・・・・・28
第７表　52号建物跡掘形観察表・・・・・29
第８表　53号建物跡掘形観察表・・・・・29
第９表　54号建物跡掘形観察表・・・・・30
第10表　55号建物跡掘形観察表・・・・・31
第11表　21調査区柱穴計測表・・・・・・31
第12表　23調査区土坑観察表①・・・・・32
第13表　23調査区土坑観察表②・・・・・33
第14表　24調査区土坑観察表・・・・・・34
第15表　25調査区土坑観察表・・・・・・35
第16表　28調査区集石観察表・・・・・・36
第17表　30調査区土坑観察表・・・・・・37
第18表　31調査区土坑観察表・・・・・・39
第19表　出土遺物観察表（1）・・・・・・42
第20表　出土遺物観察表（2）・・・・・・44
第21表　出土遺物観察表（3）・・・・・・45
第22表　出土遺物観察表（4）・・・・・・47
第23表　出土遺物観察表（5）・・・・・・49
第24表　出土遺物観察表（6）・・・・・・51
第25表　出土遺物観察表（7）・・・・・・54
第26表　出土遺物観察表（8）・・・・・・55
第27表　出土遺物観察表（9）・・・・・・57
第28表　出土遺物観察表(10)・・・・・・59
第29表　出土遺物観察表(11)・・・・・・59
第30表　出土遺物観察表　瓦（1）・・・・67
第31表　出土遺物観察表　瓦（2）・・・・74
第32表　出土遺物観察表　瓦（3）・・・・82
第33表　出土遺物観察表　瓦（4）・・・・84
第34表　出土遺物観察表　瓦（5）・・・・86
第35表　第15次調査出土布目瓦分類表・・87

写 真 図 版

図版１　航空写真①　米原台地（南東側上空より）
図版２　航空写真②　米原台地西縁域
図版３　航空写真③　米原台地南域
図版４　航空写真④　米原台地（南西側上空より）
図版５　航空写真⑤　米原台地遠望（東側上空より）
図版６　23調査区南側調査区
図版７　23調査区土坑
図版８　24調査区
図版９　24調査区から出土した備前甕
図版10　25調査区
図版11　27調査区53号建物跡と弥生住居址（１号）
図版12　28調査区集石
図版13　31調査区（北側土坑）
図版14　21調査区航空写真
図版15　出土遺物(1)
図版16　出土遺物(2)
図版17　出土遺物(3)
図版18　出土遺物(4)
図版19　出土遺物(5)
図版20　出土遺物　瓦(1)
図版21　出土遺物　瓦(2)
図版22　出土遺物　瓦(3)

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　大塚正信（文化課長）

調査・整理総括　平野芳久（教育審議員）

松本健郎（文化財調査第2係長）　島津義昭（文化財調査第1係長）

発掘調査　大田幸博（参事）　坂口圭太郎（文化財保護主事）　岡本勇人（嘱託）

報告書作成　大田幸博（参事）

調査事務局　松崎厚生（課長補佐）　木下英治（経理係長）　高浜保子（参事）

中村幸宏（主事）　相馬治久（主事）

調査指導　岡田茂弘〔千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館考古研究部長〕

河原純一〔文化庁記念物課主任調査官〕

坪井清足〔(財)大阪文化財センター理事長〕

牛川喜幸〔奈良国立文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部長〕

小田富士雄〔福岡大学人文学部教授〕　武末純一〔福岡大学人文学部助教授〕

甲元真之〔熊本大学文学部助教授〕　田辺哲夫〔熊本大学講師〕

出宮徳尚〔岡山市教育委員会文化課長補佐〕　乗岡　実〔岡山市教育委員会主事〕

原口長之〔熊本県文化財審議員〕　三島　格〔元福岡市立歴史資料館長〕

杉村彰一〔熊本県立熊本北高校教諭〕

協力者　古閑三博〔熊本県議会議員〕

吉里哲也〔菊鹿町教育長〕

〔菊鹿町教育委員会〕　早田明徳（課長）　岩井賢太（係長）　早田弘隆（主事）

〔米原地区〕　本田啓介　木庭春生（菊鹿町文化財保護委員長）

第2節　調査の進展

〔1〕　熊本県で唯一の古代山城である鞠智城（くくちじょう）の調査は、平成5年度で第15次調査を数えた。

第1次は昭和42年度の緊急調査（農業構造改善事業と長者山の山林開墾に伴う調査）であり、第8次の昭和61年度以降は文化庁国庫補助事業として、6年連続の継続調査になっている。特に平成2年度からは県の自主事業による重要遺跡確認調査も加わって、調査費は増大し、調査は大きく進展した。さらには平成5年の3月に県が発表した新計画（21世紀に向けて県が取り組む総合計画）の中に「鞠智城の調査と整備」という一項目が折り込まれ、鞠智城調査は新た

な局面を迎える事になった。調査の面では第15次調査から文化庁国庫補助事業に一本化された。

〔2〕 米原台地の上面域は町道によって東西に二分される格好となっている。地形的に見ても、東側が上原(うえばる)と称される様に一段高く(ちなみに町道に接する部分では北端で2.0m、南端で2.5mの比高差がある)、対する西側は通称「下原(したばる)」で「長者原(ちょうじゃばる)」という字名が残っている。

第15次調査は上原地区に主力を注ぎ、ほぼ全域に調査区を設定した。なお、今回は調査対象地が広範囲に及ぶ事もあって試掘程度の遺構の確認調査にとどめた。

〔3〕 調査が大きく進展した平成2年度の第12次調査以降は、主に下原地区で発掘調査を行ってきたので、第15次調査は調査対象地でも新しい局面を迎えた。

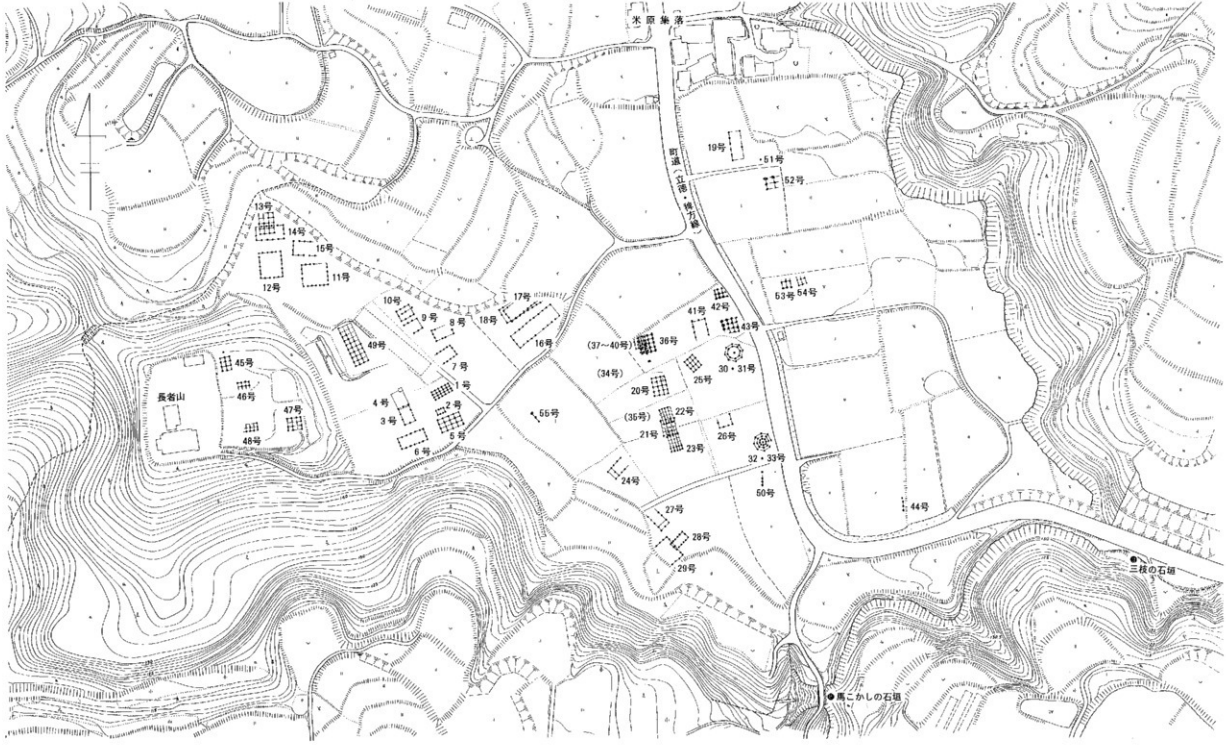
この上原地区については、昭和55年度の第6次調査と平成4年度の第14次調査で調査区を設けているが、いずれも鞠智城時代の確たる遺構は検出されていない。地山のローム層土には弥生終末期の竪穴住居址や中世の柱穴が遺存している事から、鞠智城時代の遺構が後世、削平されて消滅したとは考えられず、上原地区には遺構の空白部分がある事を示唆していた。

町道より西側の下原地区では、ほとんどのすべての調査区から鞠智城時代の遺構が検出されている。

第3節　近年の調査の変遷

年　度	調　査	調　査　主　体	調査内容・その他
昭和42年度	第1・2次	鞠智城調査団 調査指導：鏡山　猛 調査団長：乙益重隆	米原台地の水田化工事(農業構造改善事業)、及び長者山の山林開墾に伴う緊急調査。
昭和43年度	第3次	〃	〃
昭和44年度	第4次	〃	宮野礎石の露出、長者原礎石群の全面露出。長者山の測量を行なう。
昭和51年度		熊本県教育委員会	8月24日付けで、名称を「鞠智城跡」と改称。
昭和54年度	第5次	菊鹿町教育委員会	町道(神方～立徳線)拡幅工事に伴う事前調査。軒丸瓦片が出土。 ＊昭和42・43・54年度調査概要『鞠智城跡調査報告書』
昭和55年度	第6・7次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 第6次では上原地区の発掘。 第7次では宮野礎石群の全面露出。 (昭和56年11月11日付けで県史跡に追加指定) ＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』
昭和61～62年度	第8・9次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 第8次では航空撮影による米原地区の地形図作成作業。 第9次では長者山礎石群調査。多量の炭化米と瓦が出土した。
昭和63年度 平成元年度	第10・11次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 宮野礎石群周辺及び少監ドン地域の調査。

第1表　近年の調査の変遷一覧①



第1図　鞠智城跡より検出の建物跡配置図

年　度	調　査	調　査　主　体	調査内容　・　その他
昭和63年度 平成元年度	第10・11次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 宮野礎石群周辺及び少監ドン地域の調査。
平成２年度	第 12 次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 県の自主事業による重要遺跡確認調査も加わって、調査面積は大幅に増大した。 長者山東側裾部一帯（宮野礎石建築址を含む）の調査。 ＊鞠智城跡調査概報 ＊熊本県文化財調査報告第116集『鞠智城跡』
平成３年度	第 13 次	熊本県教育委員会	継続して文化庁国庫補助事業と県の自主事業による重要遺跡確認調査を行う。 町道西側一帯の調査。13年ぶりに軒丸瓦が出土する。八角形建築址２棟を検出。 ＊熊本県文化財調査報告第124集『鞠智城跡』
平成４年度	第 14 次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業と県の自主事業による重要遺跡確認調査を行う。 鞠智城の終末期にあたる九世紀代の礎石建物を初めて検出。 上原地区から遺構の空白地帯が見つかる。 「内城」の土塁線を測量し、一部について試掘を行う。 ＊熊本県文化財調査報告第130集『鞠智城跡』
平成５年度	第 15 次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業として、重要遺跡確認調査を行う。 町道東側一帯（上原地区）の調査。 結果として、上原地区は遺構の空白地帯である事が判明。 ＊熊本県文化財調査報告第146集『鞠智城跡』

＊：調査結果収録報告書名

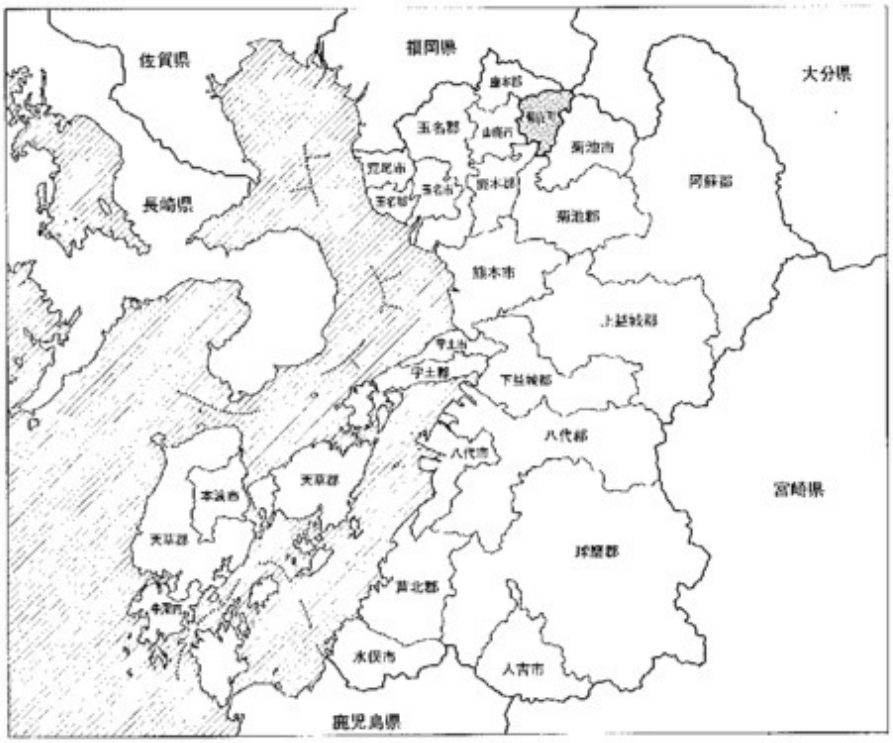
第２表　近年の調査の変遷一覧②

第Ⅱ章　遺跡の概要

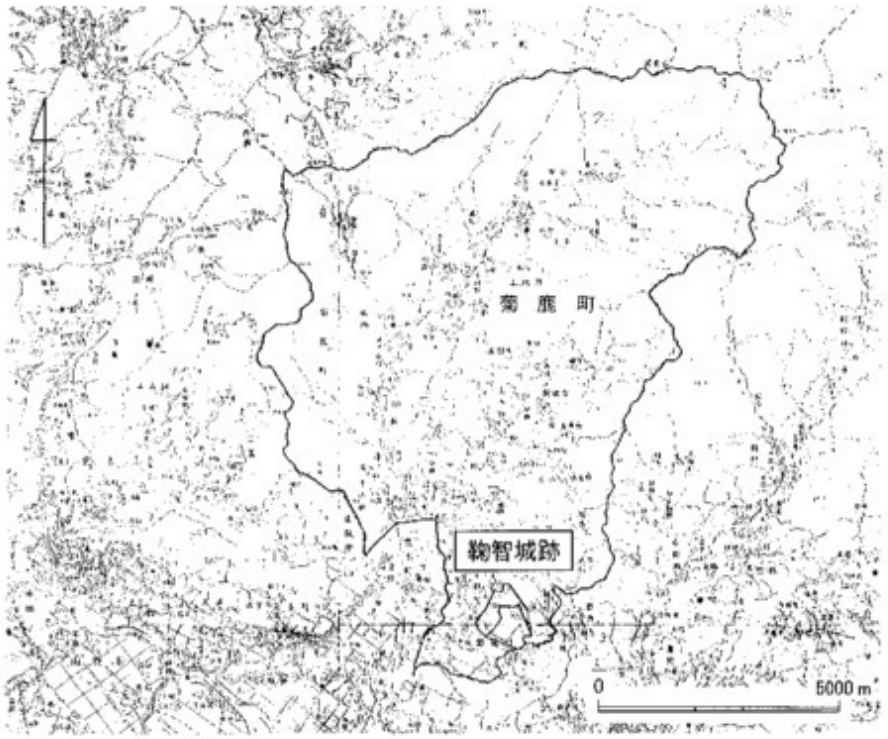
第１節　遺跡の位置

(1) 鞠智城は熊本県鹿本郡菊鹿町に所在する米原台地を利用して築城された古代山城である。国土地理院発行の２万５千分の１地形図『菊池』によると、城内の一隅を占める長者山の位置は図幅北から0.5cm、西から14.1cmの所にある。

(2) 福岡県の太宰府とは地図上の直線距離にして76km離れており、有明海へ注ぐ菊池川の河口からは20km程、内陸部へ遡った所にある。



第２図　菊鹿町位置図



第３図　菊鹿町地形図

第２節　鞠智城の歴史

鞠智城のことが初めて史上の記事に見えるのは『続日本紀』で文武天皇２年５月の条で、その後、160年間の空白期間があって、『文徳実録』天安２年の条に菊池城院としての記載がある。最後は『三代実録』元慶３年の条をもって、鞠智城は歴史の舞台から姿を消している。

六国史に見る鞠智城

甲申。令三太宰府上繕二治大野基肄鞠智三城一。

『続日本紀』文武天皇二年（六九八年）五月二十五日

丙辰。肥後國言。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。

『文徳実録』天安二年（八五八年）二月廿四・廿五日

肥後國菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。

『文徳実録』天安二年（八五八年）六月廿日

肥後國菊池郡城境兵庫戸自鳴。

『三代実録』元慶三年（八七九年）三月十六日

〔参考例〕

群烏數百。噉二抜菊池郡倉舎茸草一。

『三代実録』貞観十七年（八七五年）六月廿日

＊『国史大系』吉川弘文館

西暦年号は報告書執筆者が挿入

第３節　鞠智城の城域について

(1) 築城に際しては、かなりの選地がなされている事がわかる。城が築かれた米原台地が独立地形で、南側を除く三方は巨視的に八方ヶ岳山系の山塊と支脈尾根に囲繞される格好となっており、完全な防禦地形の中にある事がわかる。

地形的に開口にある南側も、最南端部の菊池平野とは標高にして100m近い比高差があり、さらには城と平野の間に台(うてな)台地がワンクッションとして挟まる事に絶妙の選地がある。

(2) 城域は米原台地の上面域を中心に土塁線－崖線－３つの城門によって囲繞される「内城」が真の城域である。これに加えて、西側の「大門」口と南側の屏風岩の土塁ライン、さらには米原台地を取り巻く迫地や深谷を加えた広い城域としての「外城」を考える必要がある。これらの城域が鞠智城の内郭である。

(3) さらに、この内郭を補うものとして、人工の手が加わったと見られる自然地形の範囲が外郭である。土塁線は西側(外郭①)と東側(外郭②)に推定される。

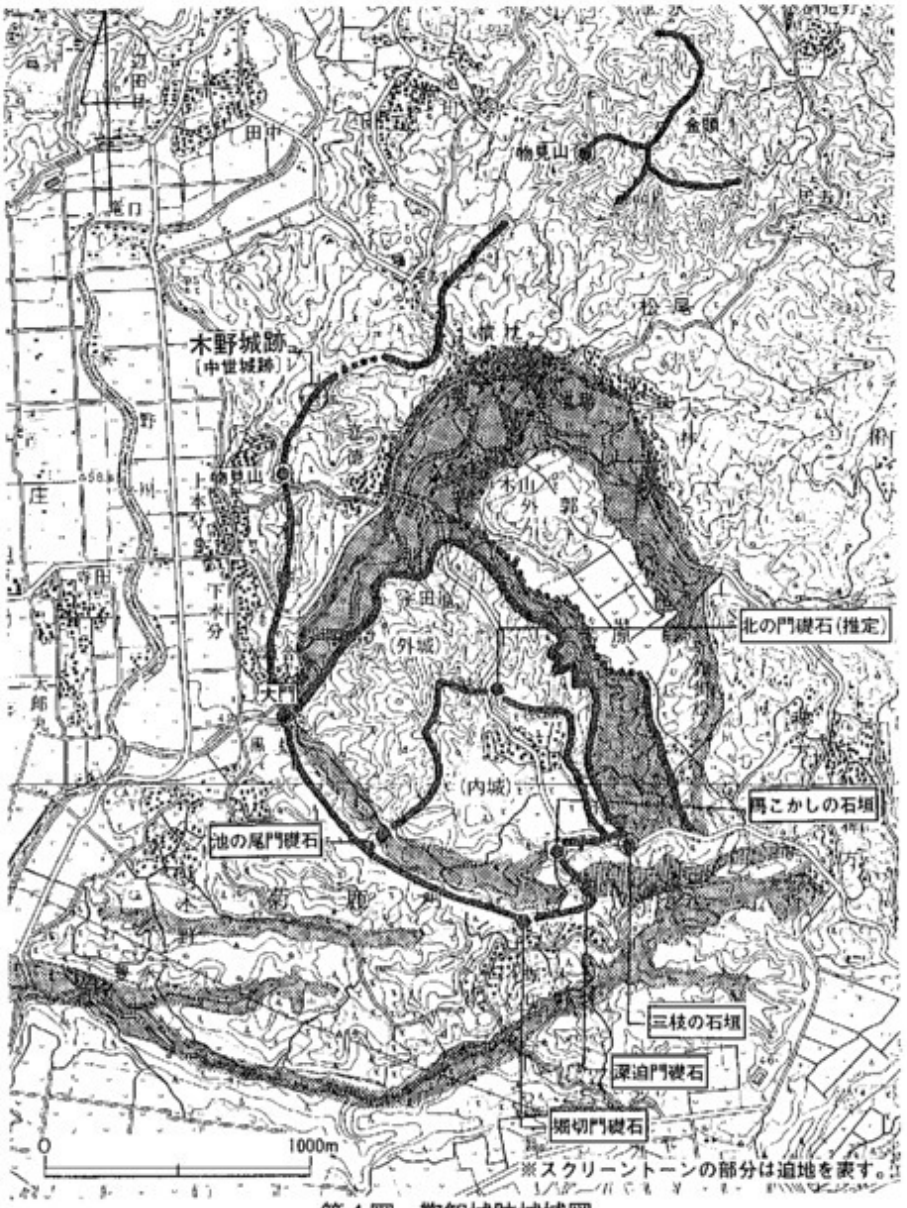
外郭①は「大門」口に端を発し、尾根を加工した土塁線と丘陵の崖線を加えた防禦ラインである。一方、外郭②は城の搦手にあたる鐘掛松の土塁線である。

(4)規模については、次の通りである。

〔内郭〕 内城：最大幅(東西)866m、最長(南北)982m、全周3.7km、面積約55ha

外城：最大幅(東西)1.55km、最長(南北)1.13km、全周約5.82km、面積約65ha

〔外郭〕 外郭①は全長2.4km、外郭②は全長0.9km



第4図 鞠智城跡城域図

第４節　古代朝鮮式山城の状況

文献にみられる西日本の古代朝鮮式山城(水城を含む)指定・整備状況等。

名　称	所　在　地	指定状況等	整　備　状　況　等
水　城	福岡県太宰府市 大野城市 春日市	国史跡指定 (大正10年3月3日) 特別史跡指定 (昭和28年3月31日) 指定面積：140,347㎡	整備：土塁平坦部と木樋復原模型設置、説明板、遊歩道整備。 整備主体：各管理自治体(市)。 今後の整備：現在までは部分的な整備しかなされていないが、今後大規模整備を行う場合は県が事業主体になることもありうる。
長門城	(所在不明) 山口県下関市周辺	――	――
大野城	福岡県大野城市 太宰府市 宇美町	国史跡指定 (昭和7年7月23日) 特別史跡史跡 (昭和28年3月31日) 指定面積：7,698,842㎡	整備：土塁、石塁、門跡等保全整備。 礎石建物跡整備(礎石露出展示等)。 園路、説明板等設置。 整備主体：一部宇美町、大部分は県が県民の森として整備。
基肄城 (椽)	佐賀県基山町 福岡県筑紫野市	国史跡指定 (昭和12年2月21日) 特別史跡指定 (昭和29年3月20日) 指定面積：721,658㎡	礎石建物の一部を露出。園路。 現在、保全整備計画立案中。 整備主体は某山町になる予定。
高安城	奈良県三郷町 大阪府八尾市	未指定	未整備。 (「高安城を探る会」が調査、部分的遺構発見)
屋島城	香川県高松市	国史跡指定 (昭和9年11月10日) 指定面積：約100,000㎡	整備：解説板、名称標のみ。 指定地内のごく一部で遺構(土塁の一部、推定物見台跡、推定水門跡等)が確認されたのみ。
金田城	長崎県美津島町	国特別史跡指定 (昭和57年3月27日) 指定面積：2,417,702㎡	整備：案内板、標識、説明板のみ。 整備主体：美津島町 平成４年度整備計画立案。
鞠智城	熊本県菊鹿町 菊池市	県史跡(伝鞠智城跡)指定(昭和33年12月8日) 名称変更(鞠智城跡) (昭和51年8月24日)	一部を仮整備。 保存整備の基本構想策定。
三野城	(所在不明)	――	――
稲積城	(所在不明)	――	――
茨城城	(所在不明)	――	――
常　城	(所在不明)	――	――

第３表　西日本の古代朝鮮式山城一覧

第５図　西日本の古代朝鮮式山城分布図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　第15次調査の概要

① 平成４年度の第14次調査までは、主に町道から西側一帯の「下原(したばる)」地区を広範囲にわたって発掘調査してきた。結果として、長者山の４棟分を含め、総数48棟分の建物跡が検出された事は報告済みである。

② 対して、町道から東側部分の「上原(うえばる)」地区では二筆分の水田を全掘し(第10・14次)、一筆分の畑をトレンチ調査した程度にとどまっていた。

③ 平成５年度の第15次調査では上原地区の調査に主力を注いだ。最終的に、上原地区では14筆分、三枝地区では一筆分、下原地区では二筆分を調査した。

特に上原地区では、最終的にこれまでの調査分を含めると、計15筆分の土地を調べた事になる。

④ 15次調査に際しては、調査区域が広範囲に及ぶため、試掘程度の調査にとどめた。

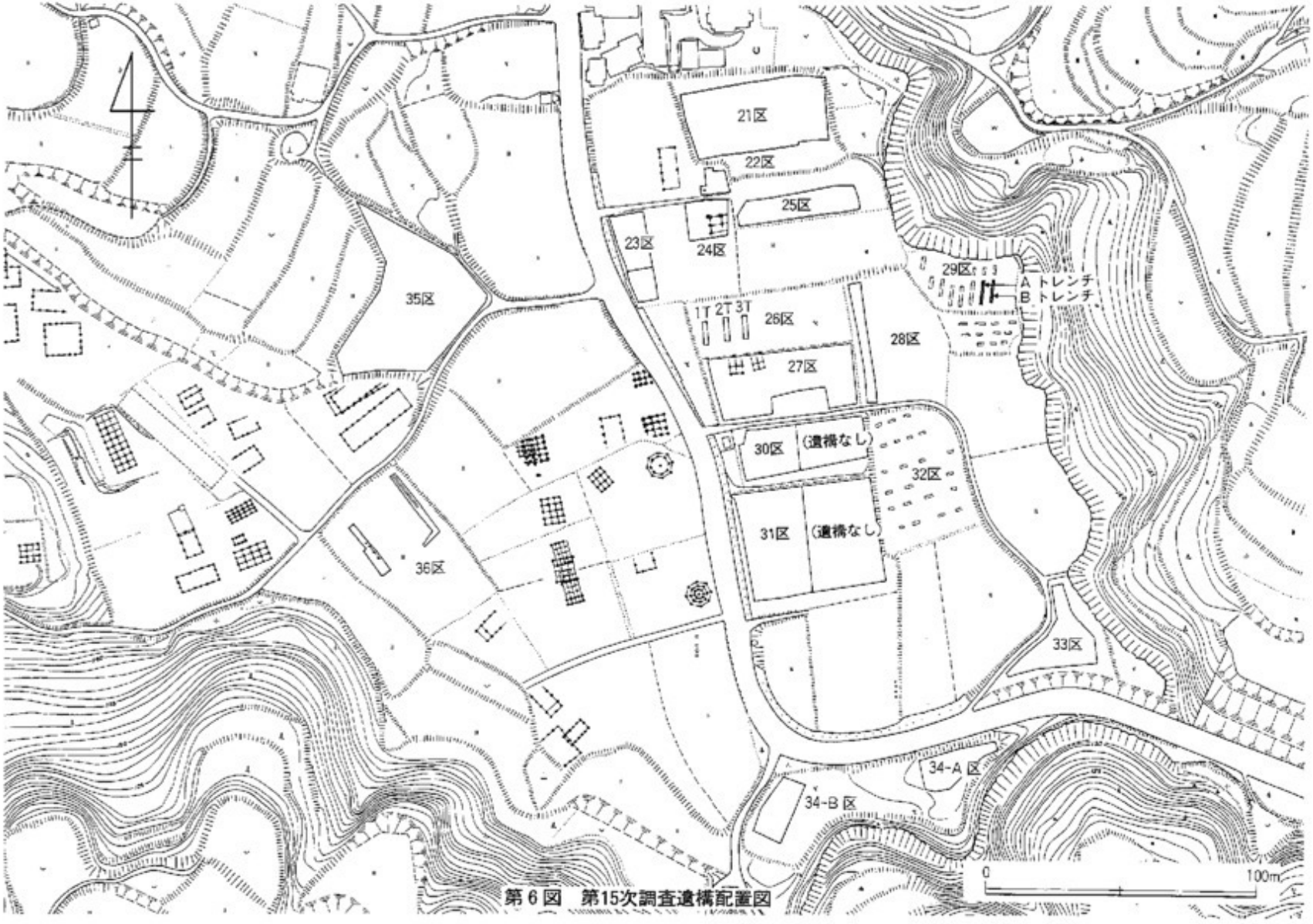
第２節　遺構の概要

調査区	地　番	面積(㎡)	調査方法	発掘調査結果	鞘堀時代の遺構の有無
21	上原 448	2,000	全　掘	数多くの柱穴を検出したが、建物の復元には至らなかった。 柱穴については、大部分を掘削したが、出土遺物は少なく、数点の中世遺物のが出土を見た。	×
22	上原 486-1	90	全　掘	柱痕を伴う１個の確たる掘形を検出。 その他、土坑１基、弥生住居址１基。 (第10次調査の残り部分にあたる)	○
23	上原 495-1	597	全　掘	〔北側区域〕 土坑５基、弥生住居址２基、柱穴(多数)。 〔南側区域〕 中世の大型土坑を検出。埋土には多量の炭化物が混入していた。土坑からは中世遺物に混じって鞘智城時代の遺物も出土した。特に布目瓦の出土が目立った。	×
24	上原 494	858	面的な部分調査	一棟分の掘立柱建物を検出。 備前ガメを伴う中世土坑を含め、計６基の土坑。	○
25	上原 492-1	1,139	全　掘	弥生住居址９基(2号は3.0×4.1mの大きさ)。 土坑11基、柱穴(多数)。	×

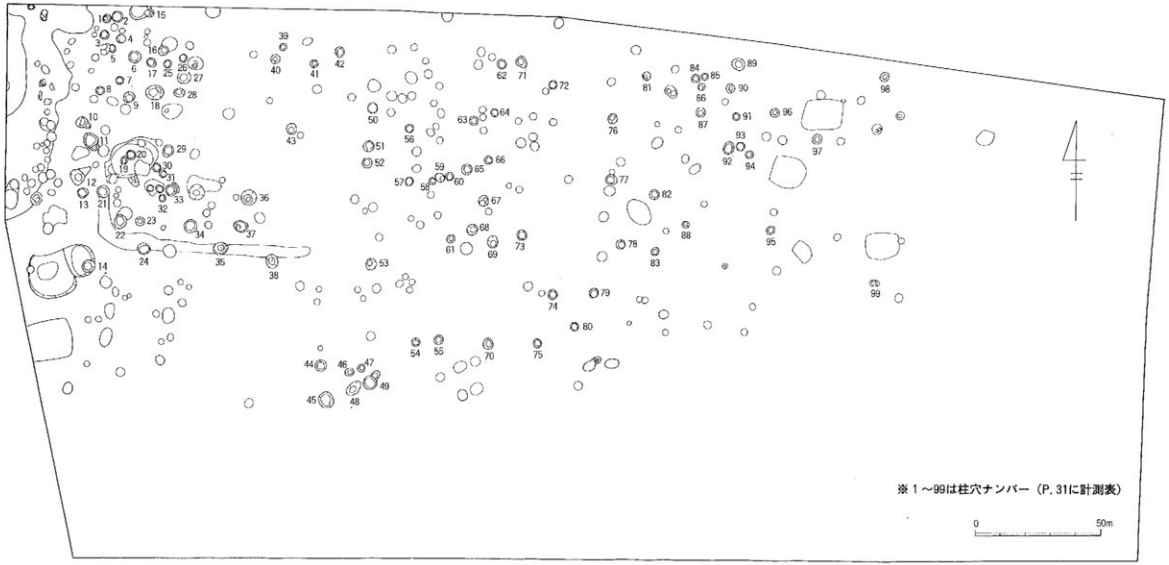
第４表　各調査区の概要①

調査区	地　番	面積(㎡)	調査方法	発掘調査結果	縄文時代の遺構の有無
26	上原 452	1,292	トレンチ（3箇所）	〔1T〕 弥生住居址1基、溝状遺構1基。 〔2T〕 弥生住居址3基、土坑4基。 〔3T〕 溝状遺構1基、土坑1基。 弥生住居址3基。	×
27	上原 451	1,394	全　掘	〔東側区域〕 古墳時代（6世紀代）住居址6基。 弥生住居址4基。柱穴（多数）。土坑2基。 〔西側区域〕 2棟分の掘立柱建物を検出。弥生住居址8基。土坑1基。	○
28	上原 453-1	1,602	トレンチ	弥生住居址5基（5号は1.9×2.0mの大きさ）、集石1基、土坑4基（2基分には埋土に多量のカーボンが混じる）。	×
29	上原 465	1,526	トレンチ	角礫出土。柱穴状の落ち込み。 現地形は、後世、北側斜面へ押し広げられている事が判明。	×
30	上原 449-1	1,132	全　掘	昭和55年度の第6次調査でトレンチ調査が行なわれている。 土坑6基。	×
31	上原 447-1	2,422	全　掘	調査区の北西端で14個の土坑を検出。内、4個分については、並びも1.5mの等間隔で、掘形状を呈した。しかし、建物の復元には至らなかった。 弥生住居址5基。	×
32	上原 453-2	1,602	トレンチ	遺構は皆無。表土の下は褐色ローム土。	×
33	上原 458-1	738	全　掘	遺構は皆無。表土の下は褐色ローム土。	×
34	三枝 443-1	2,172	トレンチ（2箇所）	調査区は丘陵の南縁にあたる所で、予想された土塁跡や柵列等は検出できなかった。地表は水平面を保つが、地山の褐色ローム上は南側へ大きく傾斜していた。	×
35	長者原521	2,163	全　掘	谷頭にあたる所で、表土の下は褐色ローム上。遺構は皆無。 （近世の排水路のみ検出）	×
36	長者原512	2,307	トレンチ（2箇所）	〔西側〕 4個の掘形を検出。柱穴、土坑。 〔東側〕 遺構は皆無。表土は浅く、地山は褐色ローム土。	×

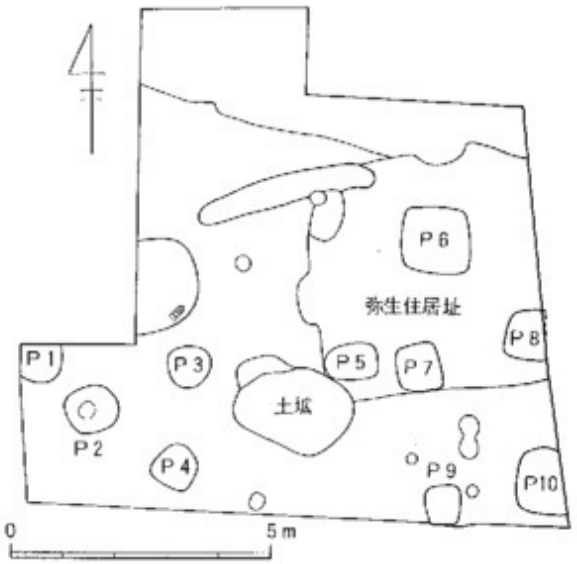
第7表　各調査区の概要②



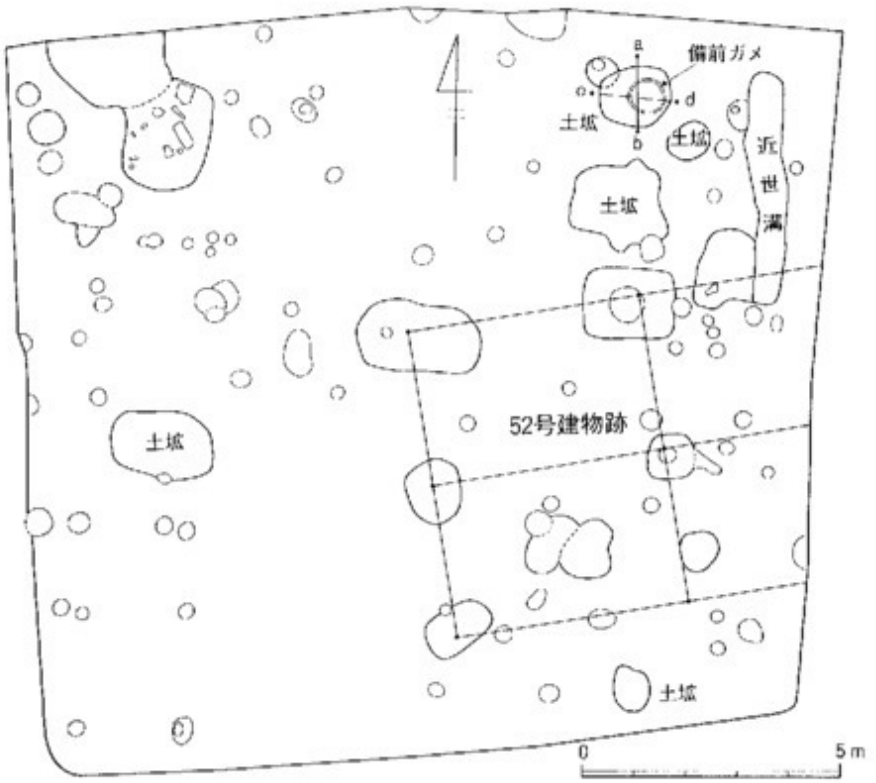
第６図　第15次調査遺構配置図



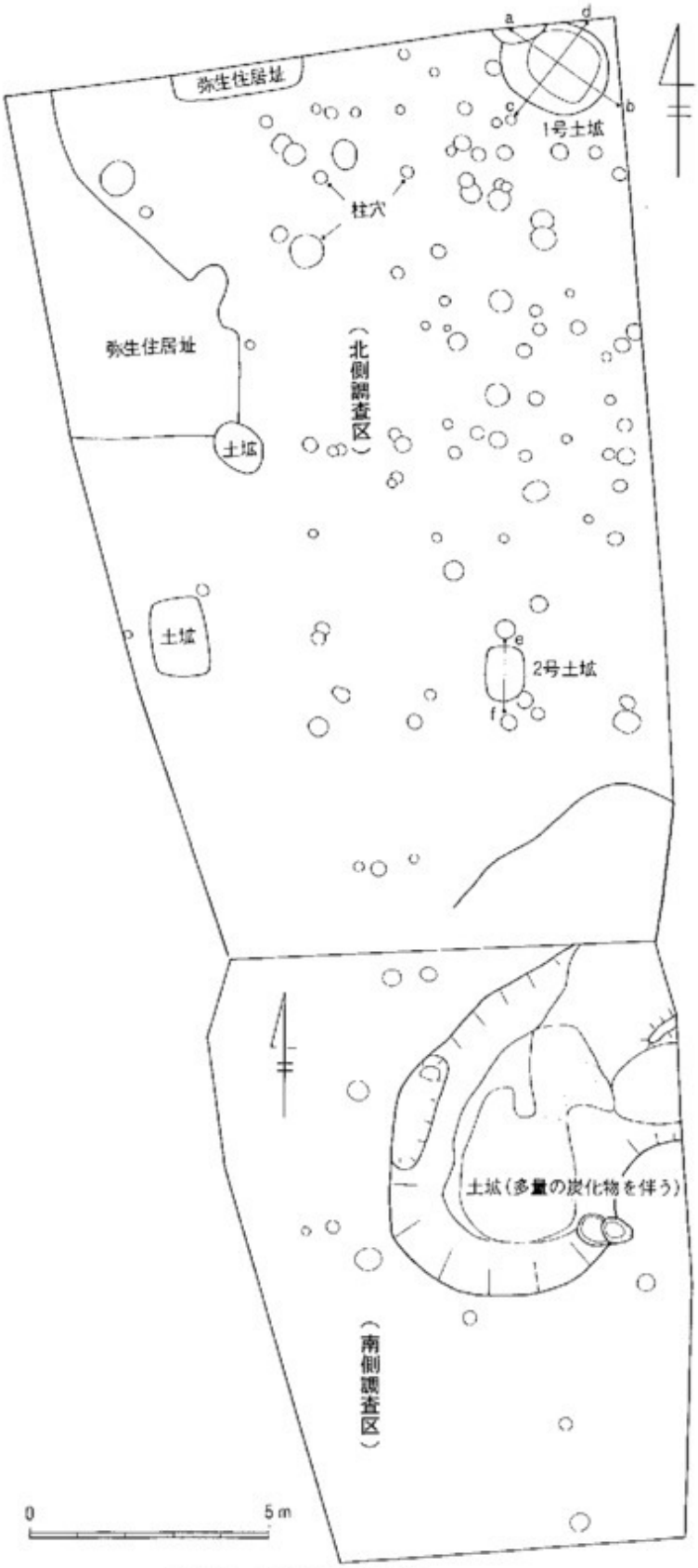
第7図　21調査区実測図



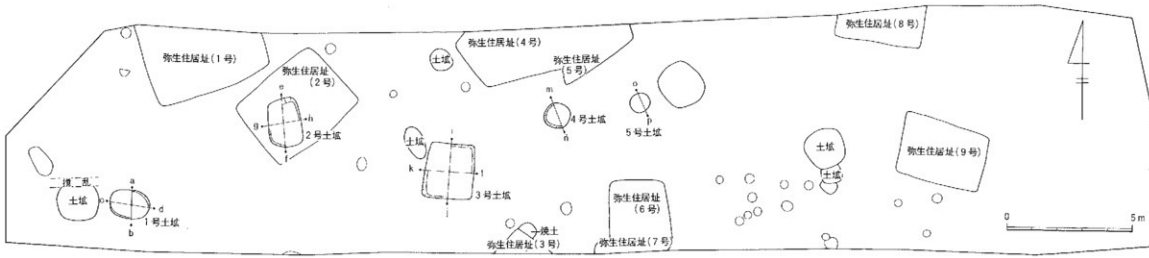
第8図　22調査区実測図



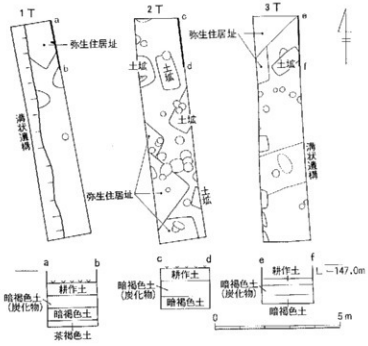
第9図　24調査区実測図



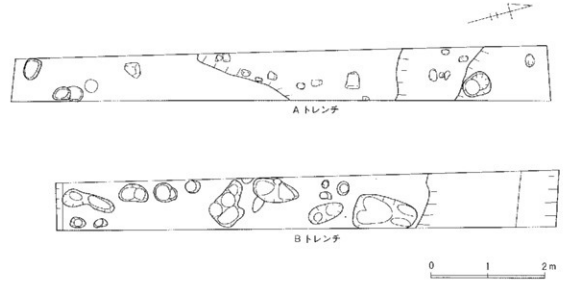
第10図　23調査区実測図



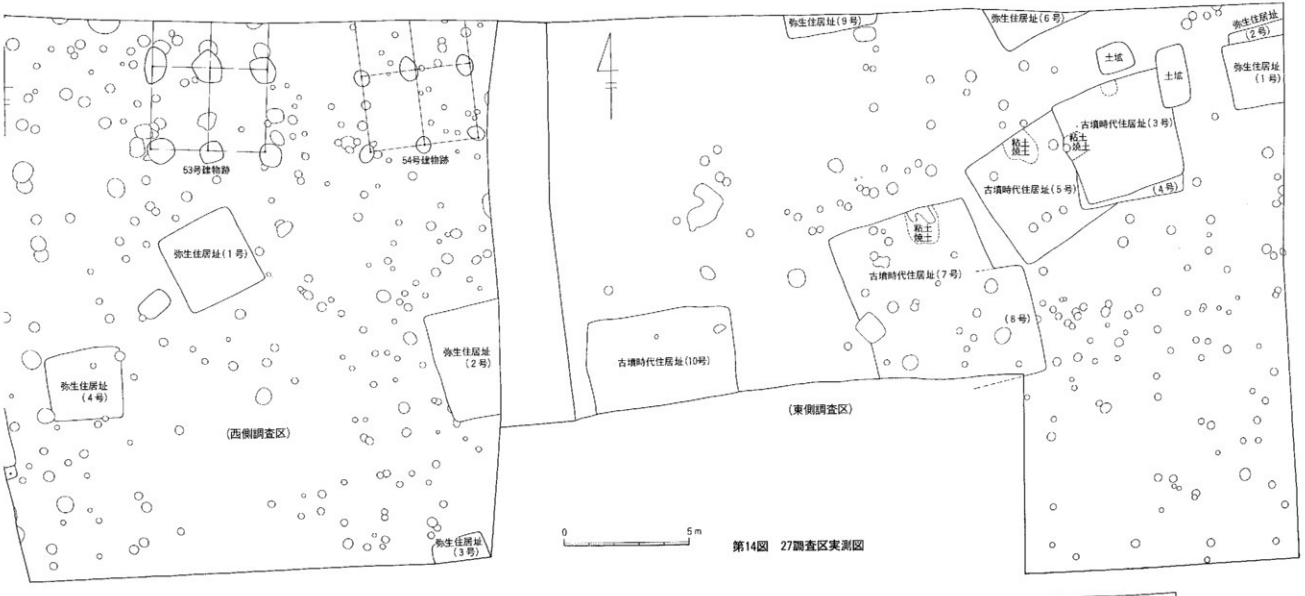
第11図　25調査区実測図



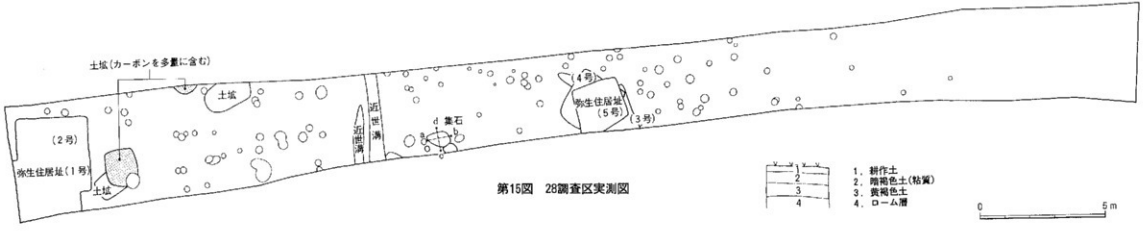
第12図　26調査区実測図



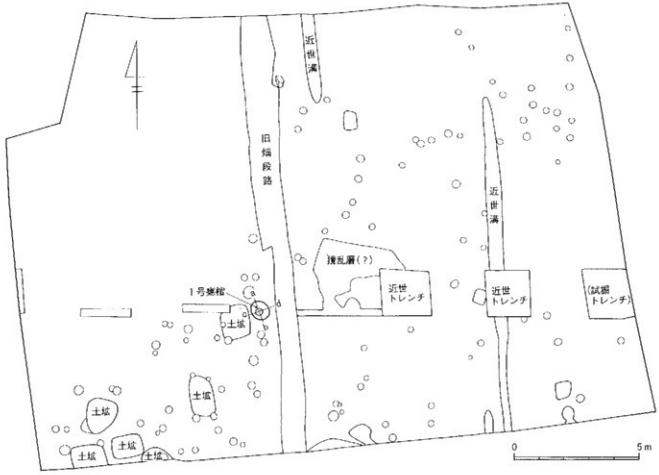
第13図　29調査区トレンチ実測図



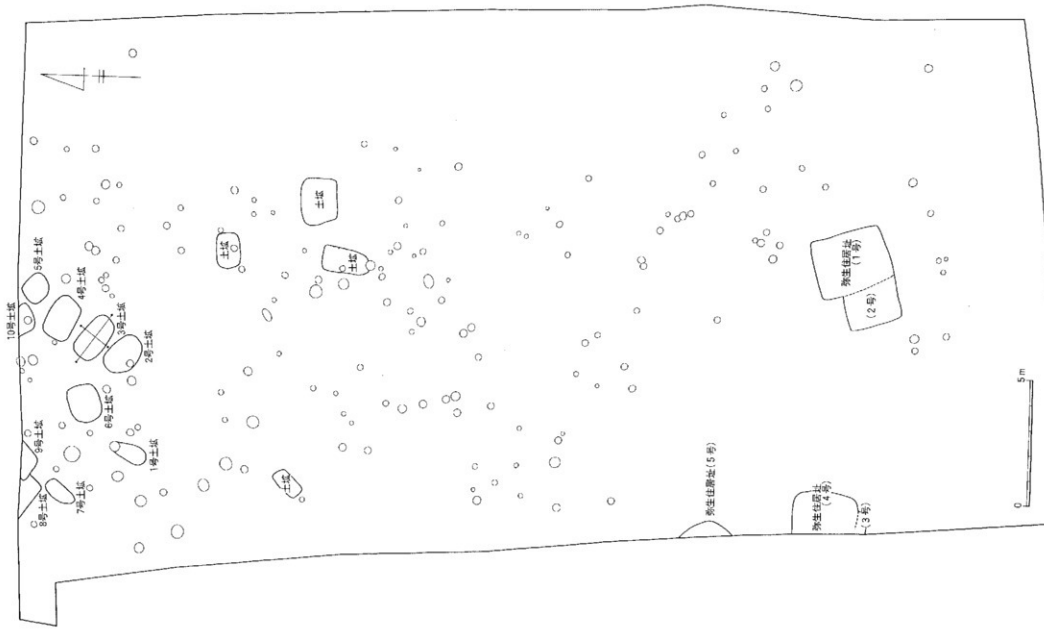
第14図　27調査区実測図



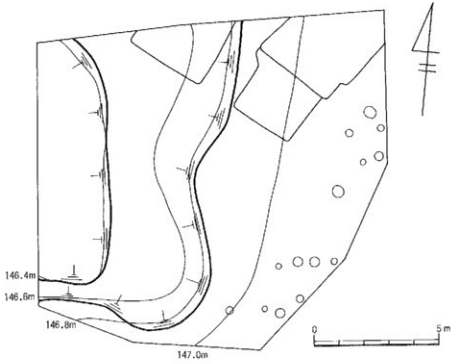
第15図　28調査区実測図



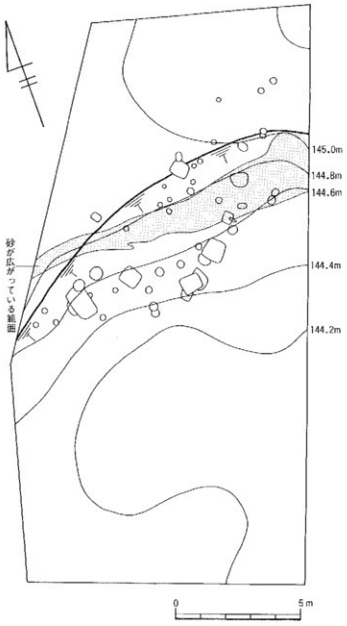
第16図　30調査区実測図



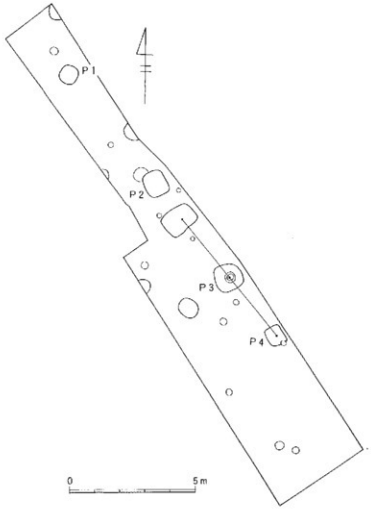
第17図　31調査区実測図



第18図　34－A調査区実測図



第19図　34－B調査区実測図



第20図　36調査区実測図

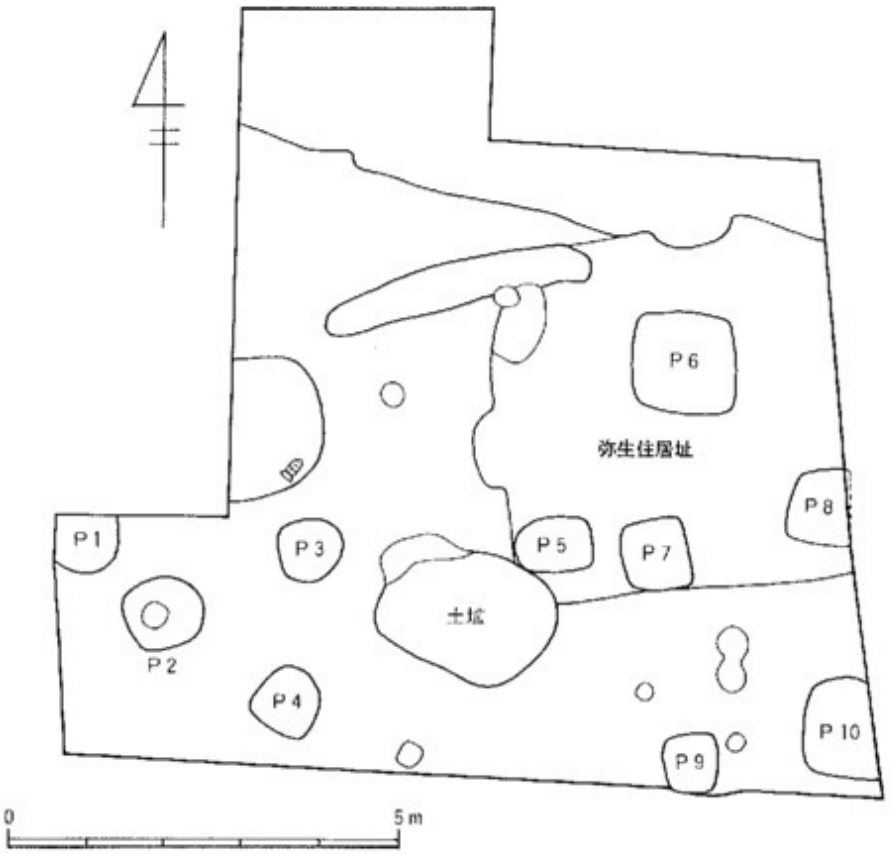
第３節　鞠智城時代の遺構

〔1〕 51号建物跡

① 通称「少監ドン」調査区の東側残地から検出された建物跡である。調査区の本体は、第10次調査で大部分が発掘されているが、今回はその際、未掘であった南側隅の張り出し部分を調査した。

② 掘形らしき遺構が全部で10個検出された。中でもＰ２の柱穴は鮮明で、はっきりと線引きができた。計測値は直径30㎝で、この遺構を見る限り、まぎれもなく掘立柱建物の掘形である。しかし、残りの９個については柱穴も無く、並びも極めて不規則なものでＰ２との関連性は伺えない。平面形状もバラバラである。従って、これら10個の遺構を元にした建物の復元はできなかった。

③ 結果として、Ｐ２の存在は無視できないので、これを軸とする51号建物跡の存在を想定した。この場合、Ｐ２とＰ４の間隔が2.1ｍで、これらの並びを軸として調査区の南西側へ延びる建物が想定できる。



第21図　22調査区実測図（51号建物跡）

〔単位：cm〕

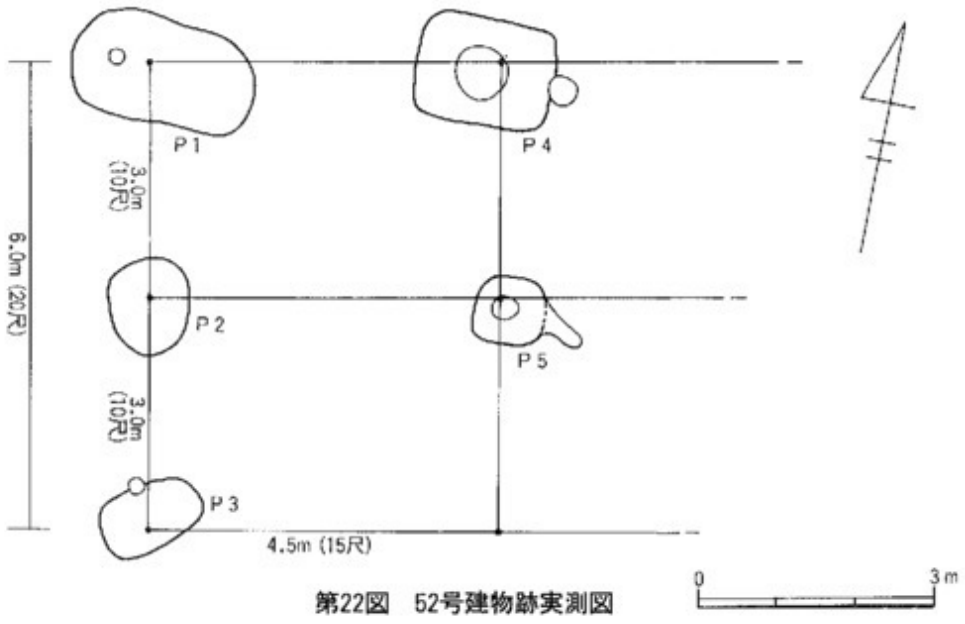
掘形No.	平面形	長軸	短軸	柱穴	備考
P 1	−	−	−	−	北西側部分が未掘。
P 2	隅丸方形	102	90	30	まぎれもない柱穴が残る。
P 3	隅丸方形(やや歪)	82	80	−	
P 4	隅丸方形(歪)	85	82	−	
P 5	長方形(やや隅丸)	100	72	−	
P 6	方形	85	82	−	
P 7	方形	92	84	−	
P 8	方形 (?)	98	−	−	東側半分が未掘。
P 9	方形	74	67	−	
P 10	方形 (?)	76	−	−	東側半分が未掘。

第6表　51号建物跡掘形観察表

〔2〕 52号建物跡

① 建物自体の復元は困難であるが、掘形に見合う遺構が5個検出された。その内、P5には柱穴が確認され、P4にも柱抜き取り痕らしきものが線引きできた。ただし、各々の平面形状はバラバラで、特にP1に至っては極端に歪である。埋土の状態から、これだけが大きく掘り込まれた柱抜き取り穴とも思えない。さらに、個々の形状にも差異がありすぎて疑問である。

② 建物の復元を試みると、桁行方向N80° Wで、梁行2間以上の建物となる。計測値は、梁行の長さが6.0m(20尺)、柱間は3.0m(10尺)、桁行の柱間は4.5m(15尺)となる。ちなみに、桁行部分の柱間間隔は大きく、15次にわたるこれまでの調査に検出例がない。もし、これが正



第22図　52号建物跡実測図

しいとすれば、最大数値を示す事になる。桁行部分については、P6に見合う掘形が検出できなかった。

③ 復元を試みた建物より3m離れた北側から備前甕を伴う土壙が検出されている。

〔単位：cm〕

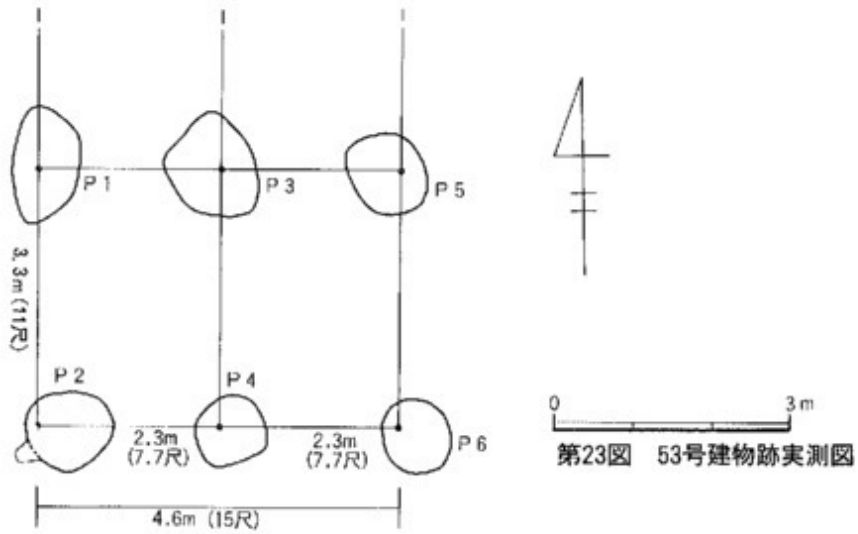
掘形No.	平面形	長軸	短軸	柱穴	備考
P 1	楕円形	224	125～140	—	掘形と別の土壙が切り合っている事も考えられる。
P 2	楕円形	124	97	—	
P 3	楕円形	136	84	—	
P 4	長方形	176	136	—	直径70cmの柱抜き取り痕。
P 5	正方形(隅丸)	90	90	30	
P 6	—	—	—	—	(欠)

第7表　52号建物跡掘形観察表

〔3〕 53号建物跡

桁行方向N3°Eで、梁行2間の掘立柱建物である。桁行の全体規模については、北側が未掘のため不明。梁行は長さ4.6m(15尺)、柱間2.3m(7.7尺)を測り、桁行は柱間3.3m(11尺)測る。掘形の形状はバラついて、柱穴は一つも確認できなかった。

東側3.3～4.0mの所に隣接する54号建物跡は桁行方向に違いがあり、並列する感じではない。



第23図　53号建物跡実測図

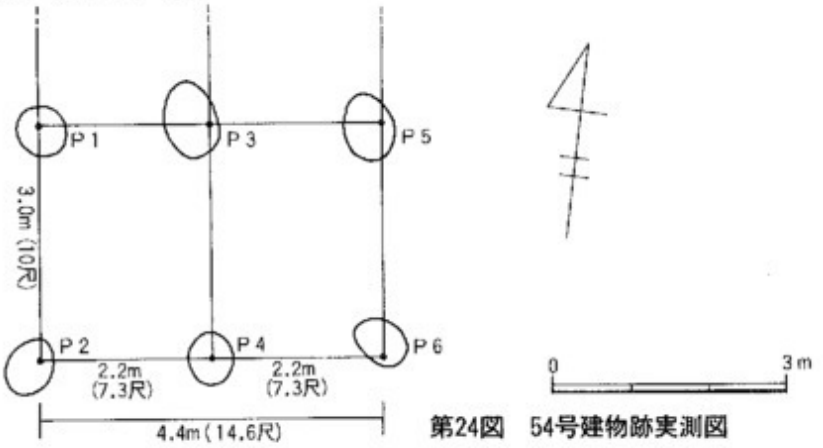
〔単位：cm〕

掘形No.	平面形	長軸	短軸	柱穴	備考
P 1	長方形(歪)	147	86	—	
P 2	楕円形	107	102	—	
P 3	不定形	131	100	—	
P 4	方形	92	83	—	
P 5	方形(やや歪)	107	91	—	
P 6	隅丸方形	91	85	—	

第8表　53号建物跡掘形観察表

〔4〕 54号建物跡

掘立柱建物跡の一部を検出。桁行方向N10° Wで、柱間は東西方向で2.2m(7.3尺)、南北方向で3.0m(10尺)を測る。全体的に小振りの掘形で、柱穴は一つも確認できなかった。建物は北側と東側へ延びている。



第24図　54号建物跡実測図

〔単位：cm〕

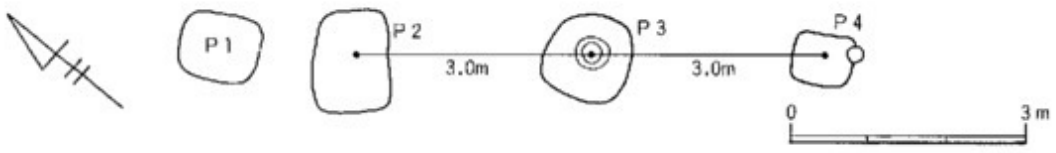
掘形No.	平面形	長軸	短軸	柱穴	備考
P 1	楕円形	69	60	—	
P 2	楕円形	74	54	—	
P 3	楕円形	98	69	—	
P 4	楕円形	68	60	—	
P 5	楕円形	86	68	—	
P 6	楕円形	71	52	—	

第9表　54号建物跡掘形観察表

〔5〕 55号建物跡

調査区は平城宮跡の大極殿を思わせる様な長方形状の高台（長軸60m、短軸30～37m、裾部との比高は2～3m）である。ここに設定した2つのトレンチの内、西側部分から掘形状の遺構を4個検出した。その内、P3については51号建物跡のものと同一で、はっきりとした柱痕が確認できた。柱痕は直径22cmで、埋土には焼土の小ブロックが混じる。さらに10cm幅の灰白褐色土が柱痕を環状に取り巻いている。

P2～P4については、大きさにバラつきがあるものの、3mの間隔である事から、55号建物跡の存在を想定した。



第25図　55号建物跡実測図

〔単位：cm〕

掘形No.	平面形	長軸	短軸	柱穴	備考
P 1	方形	103	87	−	
P 2	方形	131	91～103	−	
P 3	隅丸方形	111	100	42(外径)	柱穴は二重の輪になっている。(内径22cm)
P 4	方形	80	68	−	東側部分が未掘である。

第10表　55号建物跡掘形観察表

第4節　鞠智城時代以前の遺構

〔1〕 21調査区

① 柱穴

数多くの柱穴が検出されたが、建物の復元には至らなかった。しかし、柱穴は深掘り窪められており、何かの意味を持っているものと思われる。下表に抽出した99個の柱穴は、これに該当するものである。

〔単位：cm〕

柱穴No.	長径	短径	深さ
1	36	32	34.7
2	45	−	47.7
3	38	36	71.4
4	38	36	39.2
5	34	30	44.7
6	54	46	74.0
7	34	32	44.1
8	36	−	68.1
9	48	42	77.0
10	60	44	31.2
11	60	52	68.0
12	60	50	62.6
13	44	40	53.8
14	54	50	68.0
15	40	32	42.2
16	44	38	46.7
17	40	36	49.4
18	72	56	65.2
19	36	30	53.0
20	40	36	32.7
21	54	50	43.6
22	56	50	56.3
23	38	36	30.8
24	50	48	63.4
25	34	32	34.5
26	34	30	52.5
27	54	48	53.1
28	44	34	27.4
29	50	42	53.3
30	36	32	42.1
31	34	30	27.3
32	32	28	37.2
33	48	44	59.4
34	56	52	73.6
35	62	50	51.5
36	62	60	67.0
37	58	48	24.6
38	58	48	47.2
39	32	28	51.5
40	40	38	55.4
41	34	−	37.3
42	44	38	47.5
43	44	42	52.5
44	48	46	42.0
45	66	58	33.0
46	38	30	47.3
47	32	30	39.2
48	70	44	72.2
49	56	54	47.3
50	44	40	61.5
51	44	42	43.5
52	42	40	69.0
53	48	42	53.5
54	34	−	45.5
55	42	36	44.5
56	36	−	51.5
57	36	34	51.4
58	28		30.5
59	40	34	35.7
60	34	−	50.7
61	34	32	27.9
62	38	36	50.6
63	36	−	47.8
64	34	30	46.3
65	44	42	65.6
66	34	−	32.3
67	46	40	93.3
68	46	44	27.3
69	50	40	27.7
70	46	40	46.3
71	48	42	43.0
72	34	−	51.5
73	44	40	36.7
74	40	36	26.0
75	36	32	31.8
76	44	38	66.5
77	48	42	51.6
78	40	38	48.4
79	42	38	47.6
80	34	−	44.7
81	34	−	43.1
82	40	38	44.5
83	36	32	33.2
84	34	−	33.3
85	30	28	36.0
86	32	28	39.2
87	40	38	50.2
88	30	28	37.5
89	54	48	48.5
90	38	36	46.8
91	32	30	41.1
92	52	42	41.9
93	38	34	46.3
94	34	32	40.0
95	40	34	60.7
96	38	36	36.5
97	42	38	51.5
98	42	36	40.3
99	42	26	41.2

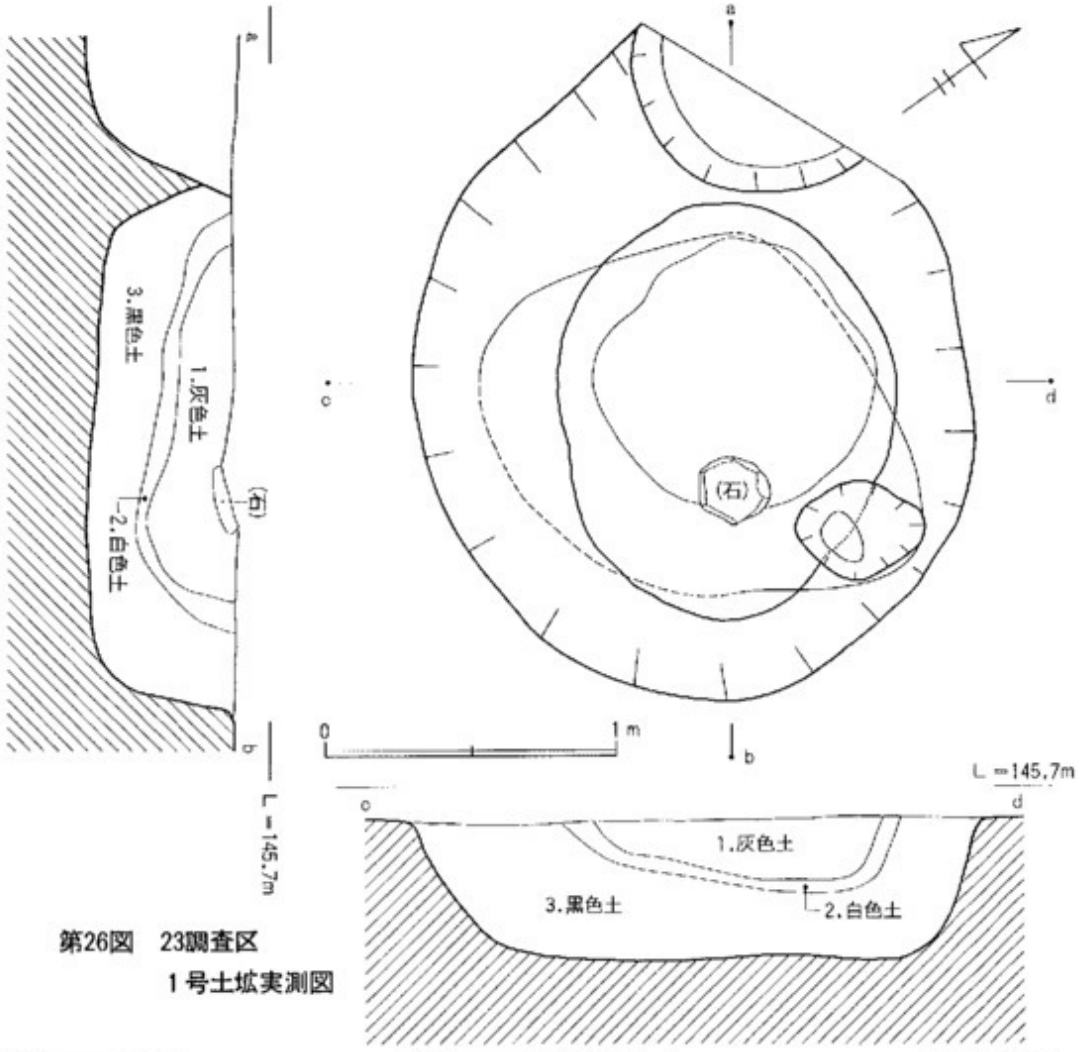
第11表　21調査区　柱穴計測表

〔2〕 23調査区

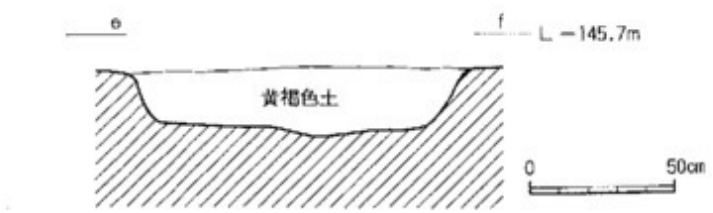
① 主な土壙

土壙No.	形　状	大きさ(m)	深さ(m)	検　出　状　況
1	楕円形	2.35×1.80	0.50	埋土が同心円状に3層に分かれる。北西隅を未掘。 (埋土：1. 灰色土　2. 白色土　3. 黒色土)
2	長方形 (やや隅丸)	1.10×0.80	0.23	埋土は黄褐色土。

第12表　23調査区土壙観察表①



第26図　23調査区
1号土壙実測図



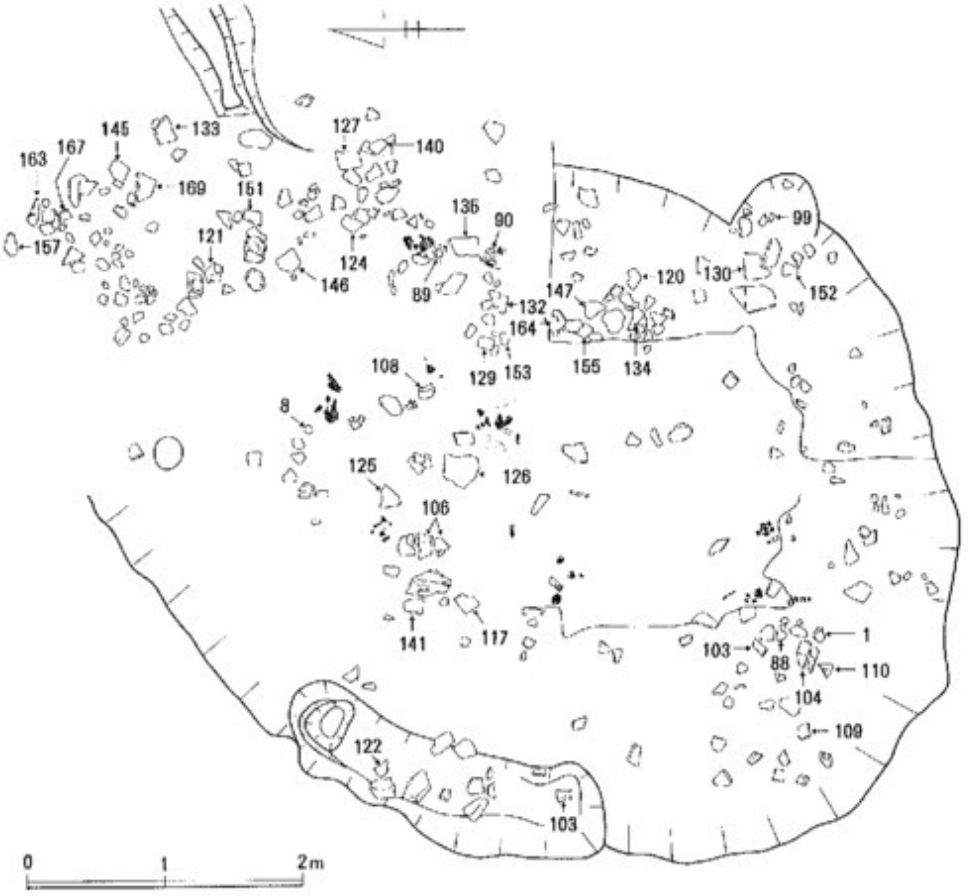
第27図　23調査区
2号土壙断面図

② 多量の炭化物を伴う土坑

調査区は全掘したが、排土の関係で、調査区を南北に二分し、交互に行った。土坑は南側の調査区から検出された。

形　状	大きさ	検出状況
①基本的には長円形であるが、南東隅がえぐれており、やや歪。 ②長軸の向きは、北東側から南西側にある。	北東側が未掘である。 ＊長軸　8.40m ＊短軸　4.90m 皿状を呈する。 ＊深さ　皿状を呈し、　0.35m	①炭化物がびっしりと詰まっていた。 ②炭化物の中には原形を留めるものがあり、竹や藁の燃え滓が確認された。 ③中世の擂鉢や糸切り土師皿が出土した。 ④中世遺物に混じって、鞘智城時代の布目瓦や土師器の出土を見た。 ⑤中世のゴミ焼却穴と思われるが、布目瓦などの混入は不可解である。

第13表　23調査区土坑観察表②



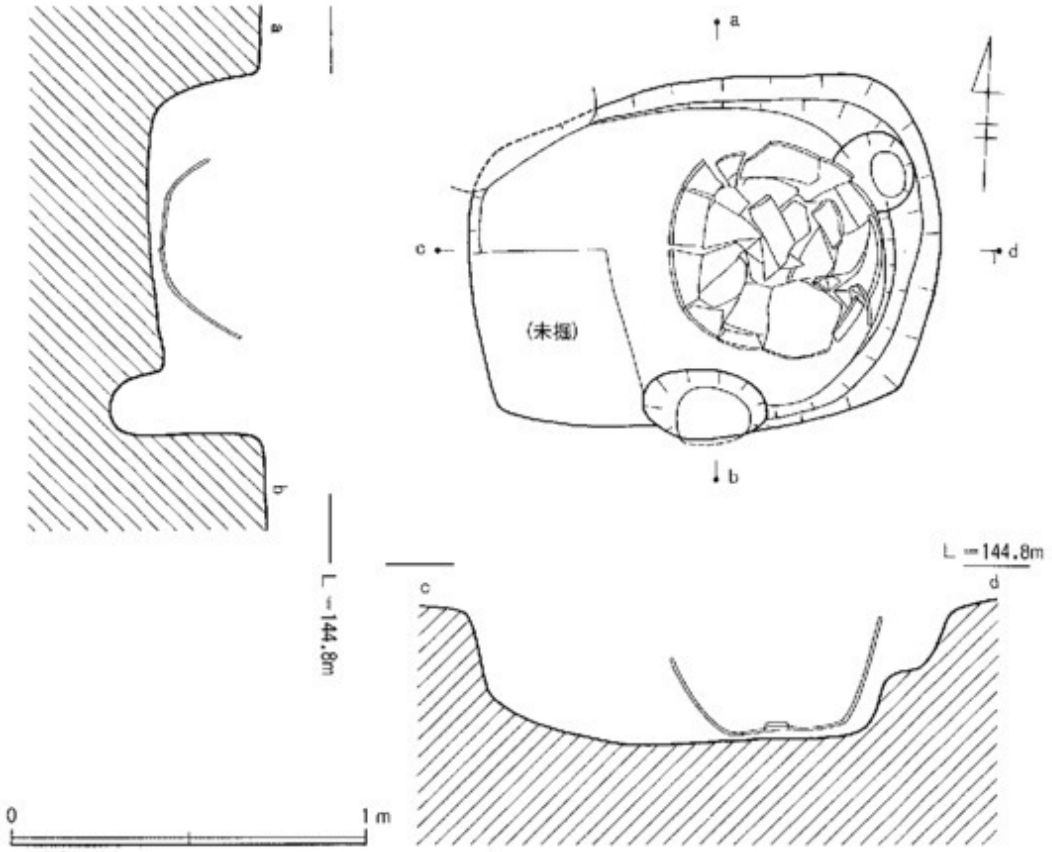
第28図　23調査区土坑（炭化物を伴う）実測図

〔3〕 24調査区

① 備前甕を伴う土壙について

形　状	大　き　さ	検　出　状　況
長方形（やや隅丸）	＊東西　2.70m ＊南北　2.00m ＊深さ　0.65m	①調査区の北東隅から検出。 ②甕を埋め込むために掘った穴である。 ③灰茶色土（褐色ローム上のブロックが斑状に混じる）

第14表　24調査区土壙観察表



第29図　24調査区土壙（備前甕を伴う）実測図

〔備前甕の検出状況〕

1．残存胴部径1.2m。時代は16世紀代。

2．上部を一気に横方向から削り取っている（打ち欠いだ可能性もある）。

3．中世のこの地が農地化された際に水甕として使用されたものと思われる。甕は下部のみが埋め込まれ、上部は露呈していた可能性が高い。

4．甕は土壙の東寄りに座っている。

5．甕と土壙の大きさが一致しない。埋め込みの穴であるならもっと小さくてもいいように思える。

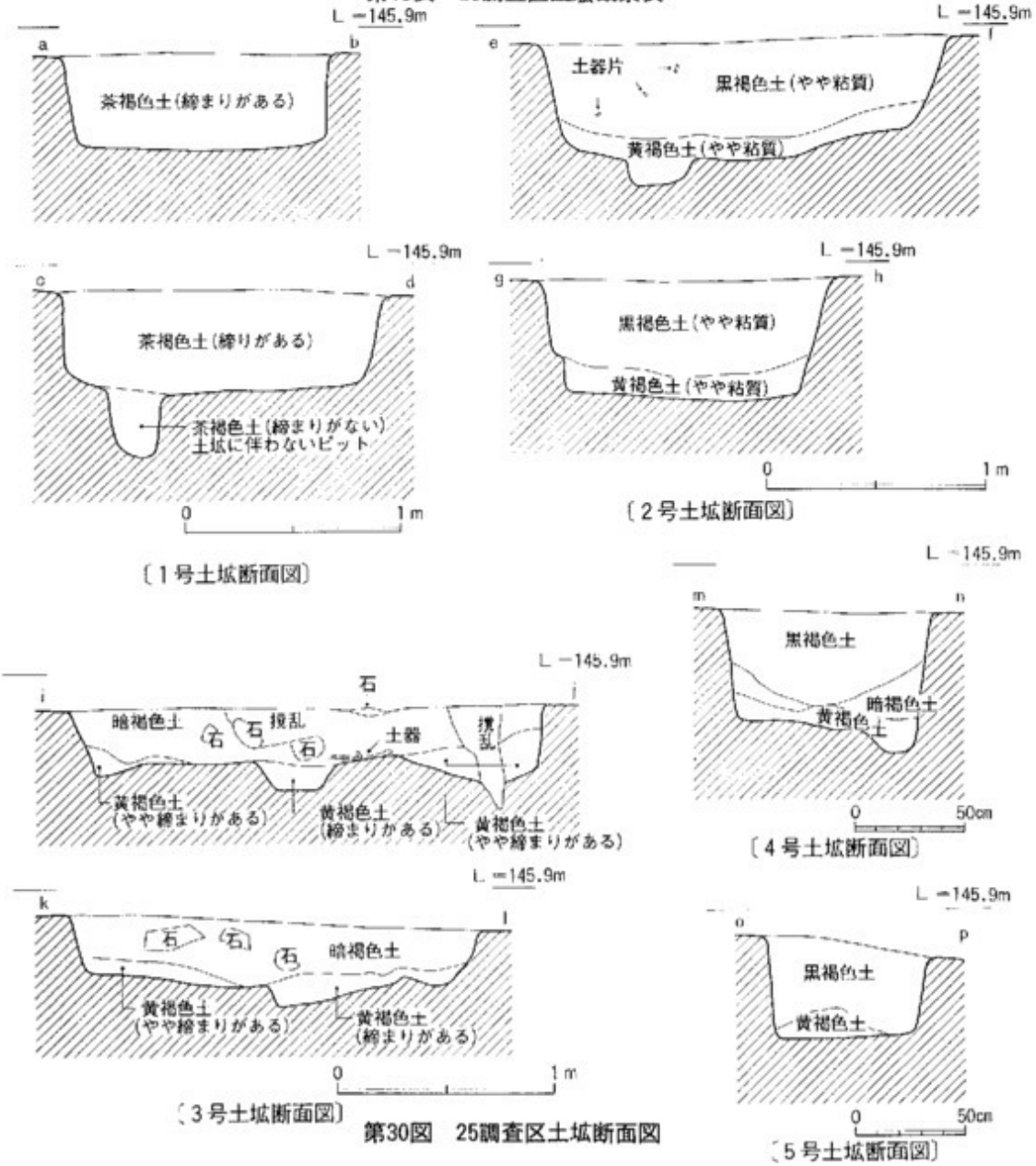
〔4〕 25調査区

① 主な土坑

土坑No.	形　状	大きさ(m)	深さ(m)	検　出　状　況
1	楕円形	1.1×1.6	0.48	茶褐色土
2	方形(やや隅丸)	1.3×1.9	0.54	1. 黒褐色土　2. 黄褐色土
3	方　形	2.2×1.9	0.25	1. 暗褐色土　2. 黄褐色土
4	円　形	1.0(直径)	0.54	1. 黒褐色土　2. 暗褐色土　3. 黄褐色土
5	楕円形	0.7×0.85	0.48	1. 黒褐色土　2. 黄褐色土

＊1号の柱穴は土坑以前のもの。

第15表　25調査区土坑観察表



第30図　25調査区土坑断面図

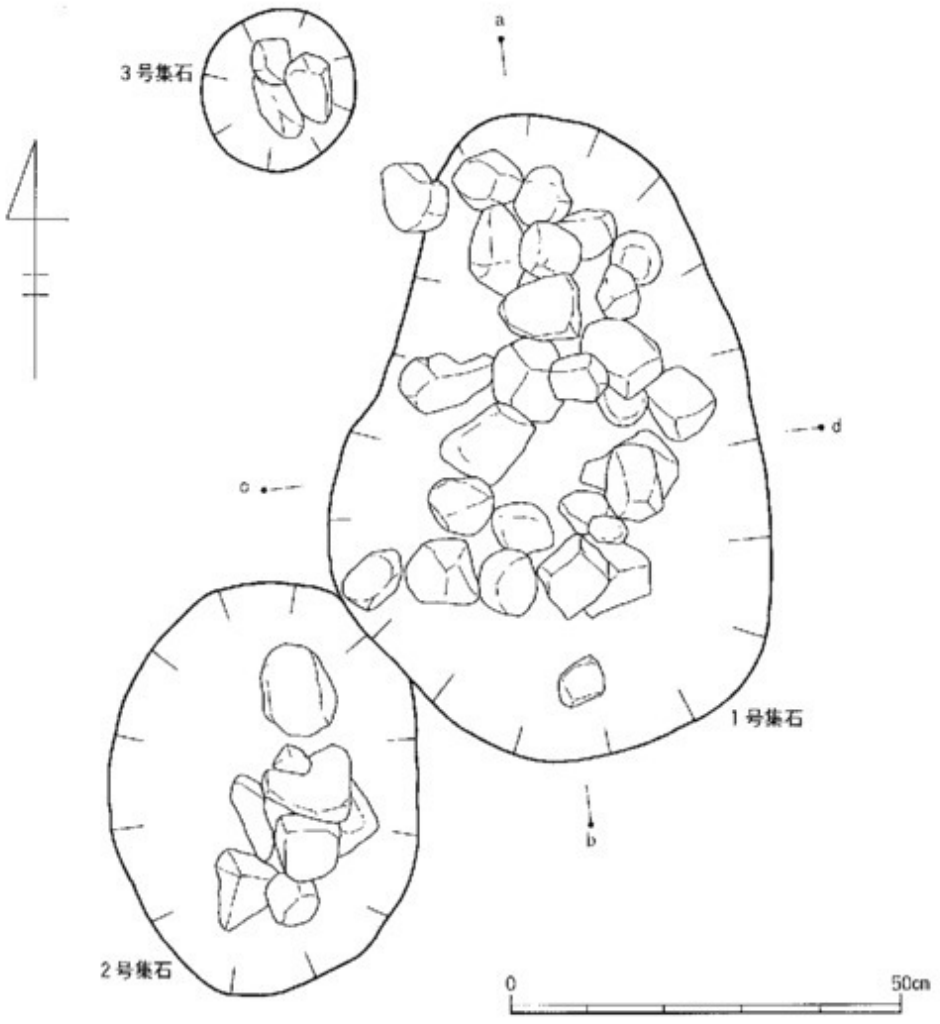
〔5〕 28調査区

① 集石

南北125cm、東西85cmの範囲から土坑を伴う3基の集石が検出された。埋土は細かい粒子の黒色土である。これまでの調査でわずかに見つかっていた縄文早期土器に関連する遺構と思われる。集石の大きさは直径10cm代で、角礫が用いられている。

集石No.	土坑		集石の数	備考
	平面形	大きさ(cm)	(確認できるもののみ)	
1	楕円形	83×57	28個	土坑は北寄りで、僅かにしゃげている。
2	楕円形	53×40	8個	
3	円形	直径20	3個	

第16表 28調査区集石観察表



第31図 28調査区集石実測図

(6) 30調査区

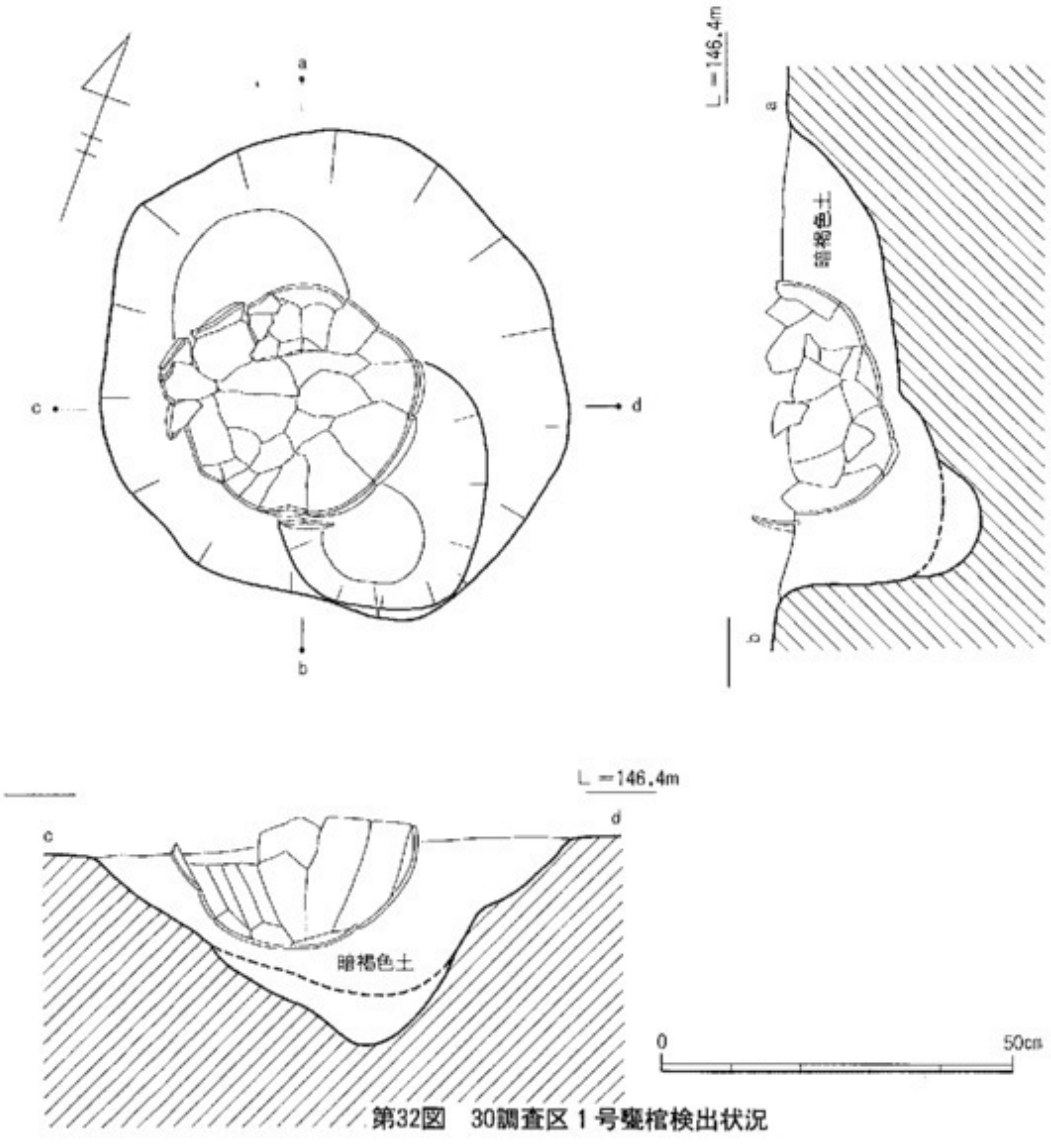
① 弥生時代の甕棺(小児用・黒髪式土器)について

調査区に限り甕棺の散在が見られるが、多くは現位置を保っていない。番号を記し、図化したものは、埋葬時より移動していないと認められるものである。

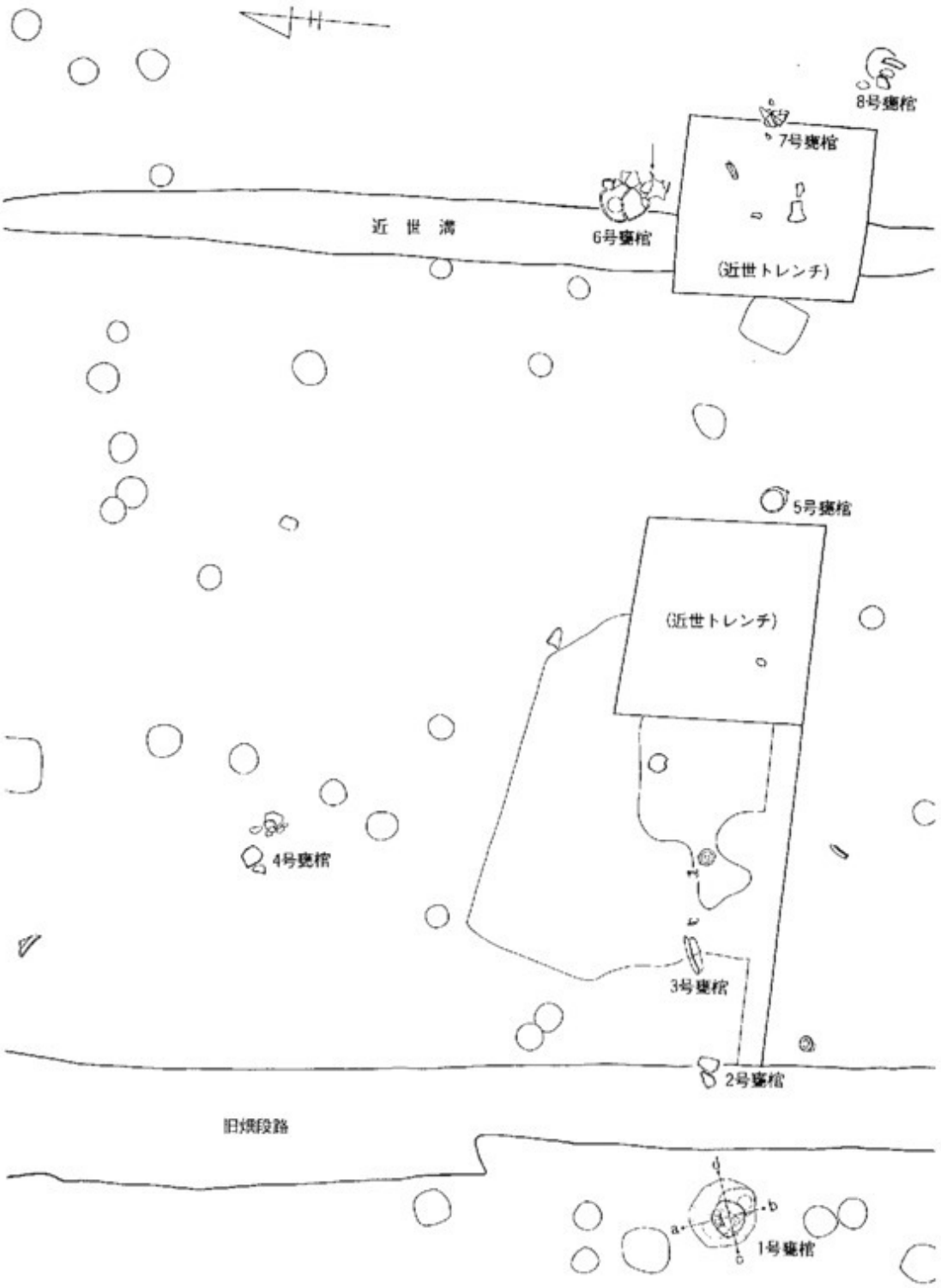
甕棺の掘り方については、1基(1号)を除き、後世の耕作による破壊が著しく、記録にとどめる事は困難であった。

掘り方の形状	大きさ(m)	深　さ(m)	検　出　状　況
楕　円　形	0.70×0.64	0.23	埋土は暗褐色土。 やや砂質で、締まりのない土壌。

第17表　30調査区土坑観察表



第32図　30調査区1号甕棺検出状況



第33図　30調査区甕棺散在状況

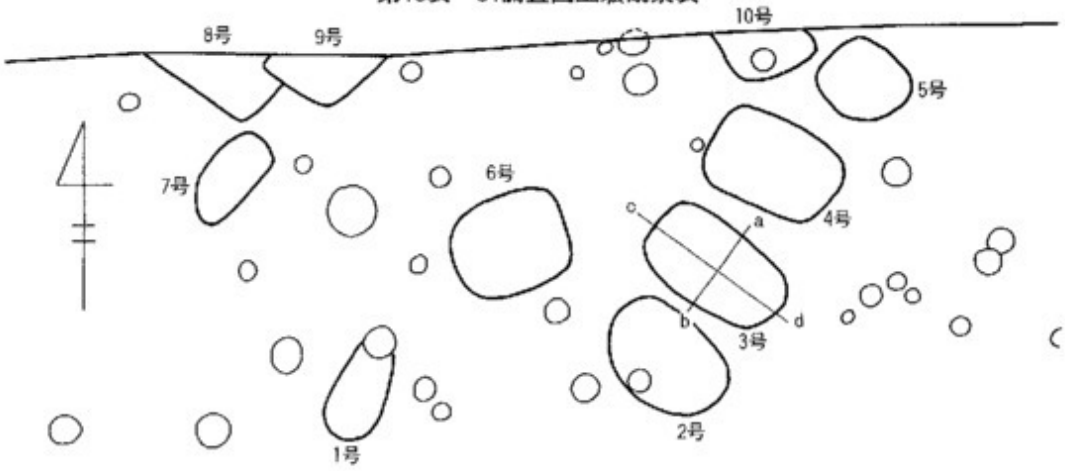
〔7〕 31調査区

① 10個の土坑については、まとまっているので計測値を示す。

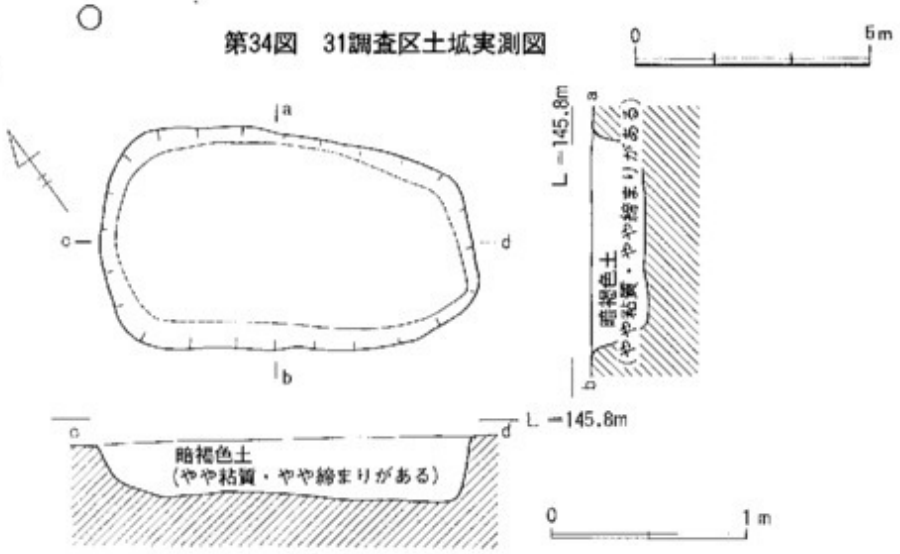
土坑No.	形　　状	大きさ（m）	備　　考
1	長方形(歪)	1.35×0.80	直径30cmの柱穴が北縁に付く。
2	不 整 形	1.55×1.00	
3	長方形(やや歪)	2.00×1.10	四分割を試みた。深さ0.3m。埋土は暗褐色土。
4	長方形(やや歪)	1.70×1.25	
5	方　形(やや歪)	1.10×0.95	
6	方　形(歪)	1.40×1.35	
7	長円形(歪)	1.25×0.70	
8	未　　掘	−	北側が未掘。
9	−	−	北側が未掘。
10	−	×1.10	北東側が未掘。柱穴(直径35cm)が南側寄りに付く。

＊2号～5号の4個が1.5mの等間隔で並んでいる。

第18表　31調査区土坑観察表



第34図　31調査区土坑実測図



第35図　31調査区3号土坑実測図

第Ⅳ章　出土遺物

須恵器（1～12）

いずれも鞠智城時代の遺物である。1～3は蓋。1は復元口径10.8cm、器高2.7cmで、削り出しの返りはズン胴。2の返りも削り出しであるが、細身で大きく内傾する。3は返り無し。1と2は23区のＳＫ０６より出土。

4・5は甕。4は復元口径14.6cm、頸部は大きく外弯する。5は復元口径11.3cm、残存胴部最大径は18.0cm。5は22区のＳＫ０１から出土。

6は坏。復元口径10.0cmで、体部はやや内弯する。7は高坏の脚部。

8～11は甕の破片。外器面の調整は、8が格子状叩き、10が丁寧なナデ、9・11が細目の格子叩き。内器面の調整は9・11は円文叩き、10が叩き。8は23区のＳＫ０６から出土した。

12は甕の底部で。復元底径11.7cm、上げ底で、器形はかなり歪。

土師器（13～26）

13～19は鞠智城時代のものである。13～16は壷。13～15の頸部は大きく外弯する。内器面の調整はいずれもヘラ削り。

16は外器面に刷け目が残る。27区のＳＫ０２より出土。17は鉢で体部は直線的に伸びる。18は壷で内器面の上位に爪先痕が横に並ぶ。28区のＳＫ０１より出土。19は甑で底部に脚が付く。外器面にスス付着。

20～26は古墳時代のものである。20・22・23は27区の7号住居址、21は25区の8号住居址、25は25区のＳＫ０３から出土。

20は高杯で口径17.6cm、器高4.2cm、脚の直径は下位で11.6cm。21は壷で復元胴部最大径16.2cm、22・23は杯。22は口径11.8cm、器高3.2cm。23は復元口径13.5cm、器高3.7cm。須恵器の模倣品で、いずれも外器面にススが付着。

24は小型丸底壷で、復元胴部最大径9.9cm。

弥生土器（27～70）

27・28は板付Ⅱ式土器で弥生時代の前期後半。27は復元底径8.3cmで、30区より出土の2号甕棺。

29～42は黒髪式土器で、弥生時代の中期。29は復元口径32cmで、22区のＳＫ０１より出土。30は復元口径24.4cmで、30区より出土の3号甕棺。31は復元口径23.4cm。体部の上位は「く」の字に大きく弯曲する。32・35は28区の1・2号住居址より出土。

38は底径7.3cm。27区の6号住居址より出土。40は復元口径28cmで、22区のＳＫ０１より出土。41・42は胴部の上位に突帯が付く。いずれも24区のPit3よりの出土で、同一個体の可能性がある。42は復元口径41.6cm。

43～50は須久式土器で、弥生時代の中期。45・47は22区のＳＫ０１より出土。48は底径10.6㎝で、外底端は大きく肥厚する。30区より出土の６号甕棺。49は復元底径6.0㎝。50は復元底径10.2㎝で、外底端は丸味を帯びる。

51は黒髪式Ⅱ土器で弥生時代の後期。復元胴部最大径28.8㎝で、30区より出土の１号甕棺。

52～54・66は弥生時代後期の土器である。53は無頸壷。54は外器面に刻目のある２条の突帯を有する。66は高杯の脚部で、復元底径17.8㎝。

55は後期後半の土器で、外器面にヘラ磨きによる暗文がある。23区のＳＫ０６より出土。

56・59は後期中葉の土器。57は後期前半の土器で、復元口径26.8㎝。30区より出土の７号甕棺。58・60は後期前葉の土器。60は外器面に刻目を有する突帯が付く。

61～65は野辺田式土器で弥生時代後期の土器である。61は復元最大胴部径18㎝で、脚台付き甕。25区の８号住居址より出土。64は25区のＳＫ０４より出土。65は器台の残存である。

67～70は弥生時代最終末の土器である。67・68・70は25区の９号住居址からの出土で、同一個体の可能性がある。

縄文土器（71～82）

いずれも晩期の土器である。71は浅鉢で、底部は尖底型を呈する。復元口径29㎝、器高10.3㎝、内器面は黒色磨き。

72・73は粗製土器で器面に粗い磨きが残る。74は黒色研磨土器。75は浅鉢の口縁部である。76・77の突帯は貼り付けで、刻目を有する。76にはススが付着。

縄文時代の摺り石（83）　重さ125ｇで、石面の端部に磨痕が残る。

中世遺物（84～112）

84・85は青磁で、85は同安窯系青磁。86は染付の碁笥皿。

87・100・104は瓦質擂鉢。条線の一単位は87が８本、100は６本、104が７本。87は24区のＳＢ５２－Ｐ４、100は22区のＳＫ０１、104は23区のＳＫ０６より出土。

88・99・101・111は瓦質火舎。99・101・111は２条の突帯間に花印のスタンプ。88・99は23区のＳＫ０６、101・111は22区のＳＫ０１より出土。

89～98は糸切り土師器。89は小杯で器形はラッパ状型と舟型の中間。復元口径6.6㎜、器高2.2㎝、復元底径4.2㎝。92は杯で、器形は舟型。復元口径8.1㎝、器高2.0㎝、復元底径8.7㎝。口縁部の上位はつまみ上げている感じ。94は大型の杯で復元口径13.3㎝、器高2.6㎝、復元底径8.2㎝、体部は直線的に大きく開く。95は皿で、復元口径9.6㎝、器高1.5㎝、復元底径8.0㎝。89・90・93・96～98は23区のＳＫ０６より出土。

105～108・110は中世雑器。105の焼成は甘く、外器面に格子叩き。106・107の外器面に２条の突帯（貼り付け）が付く。108は復元底径14.8㎝、外器面に６㎜四方の格子目叩き。110は復元底径14.2㎝、外底端側に強い指頭圧痕が残る。105は22区のＳＫ０１、106・108・110は23区の

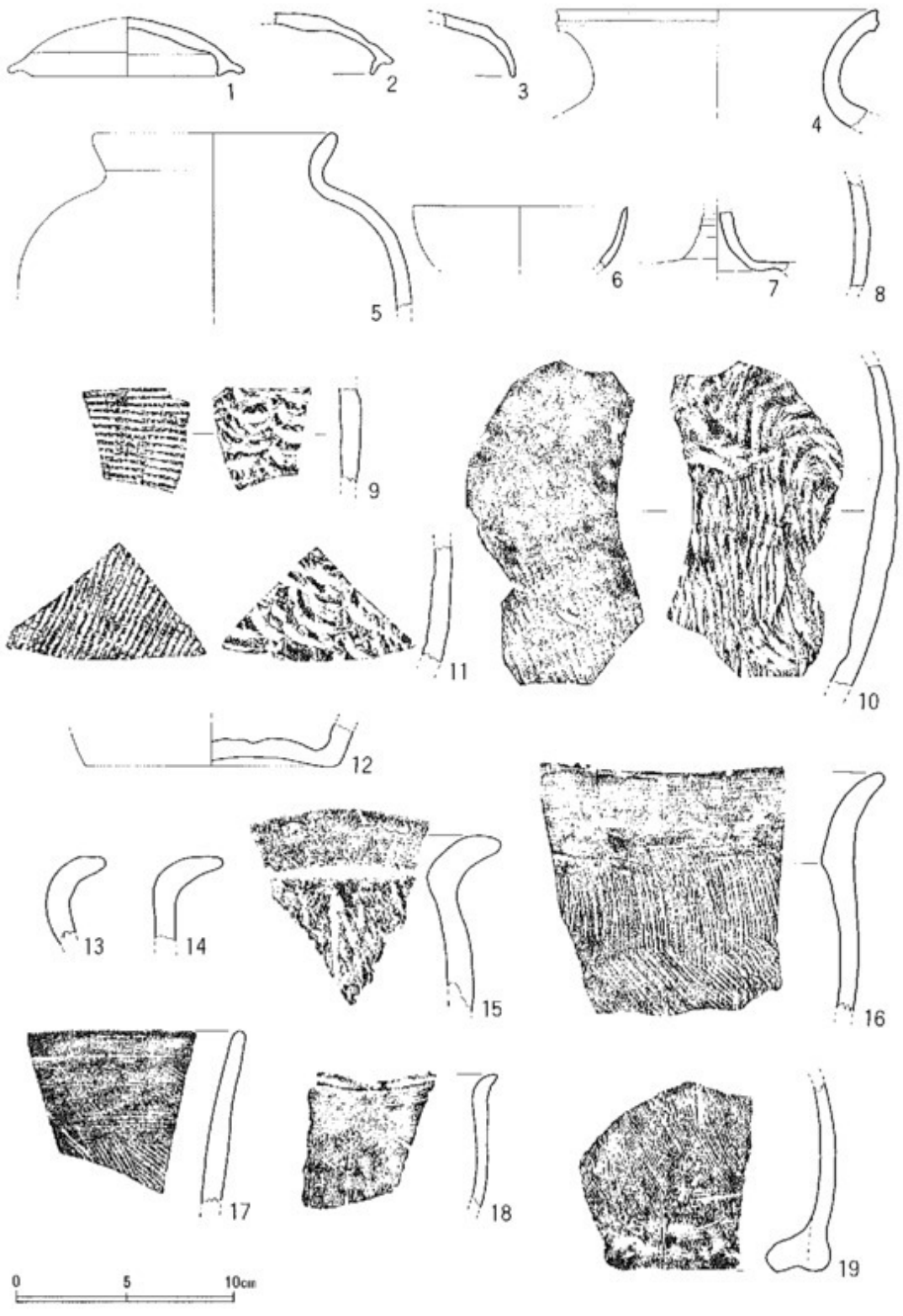
ＳＫ０６より出土。

109は中世の須恵器。器面の調整は外器面がナデ、内器面が非常に細かい鮮明な刷け目。23区のＳＫ０６より出土。

112は備前甕で、底径30.5cm、胴部最大径66cm。24区のＳＫ０１より出土。

No.	器種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形態	調整・その他	出土地点
1	須恵器（蓋）	上位 5 中位 7 下位 3.5	精良	灰茶色	堅緻	復元口径 10.8cm 器高 2.7cm 返りはズン胴で、削り出し。	丁寧な回転ナデ。 〔内器面〕 最上位に指頭圧痕。	23区 SK06
2	須恵器（蓋）	上位5～7 中位 4 下位 5	精良	灰白色	堅緻	返りは細身で、削り出し。（長さ8mm、幅3mm）大きく内傾する。	回転ナデ。 〔外器面〕２条の回線。	23区 SK06
3	須恵器（蓋）	上位 5 中位 6 下位 3	精良	灰白色	堅緻	返り無し。	回転ナデ。	27区 東側 7号住居址
4	須恵器（甕）	上位 8 中位 8 下位 10	白色粒 (少量混入)	灰茶色	非常に堅緻	復元口径 14.6cm 頸部は大きく外弯。	〔外器面〕丁寧な横ナデ。 〔内器面〕横ナデ。 〔口唇部〕２条の沈線。	27区 東側 7号住居址
5	須恵器（甕）	上位5～7 中位 6 下位 7	精良	灰 白 小豆色	堅緻	復元口径 11.3cm 残存胴部最大径18.0cm	〔内外器面〕 非常に丁寧なナデ。	22区 SK01
6	須恵器（坏）	上位 2.5 中位 3 下位 4	精良	灰色	堅緻	復元口径 10.0cm 体部はやや内弯。	回転ナデ。	27区 東側
7	須恵器（高坏の脚部）	上位 5 中位 4 下位 3	精良	灰色	堅緻	残存胴部径 1.3cm	〔外器面〕２条の沈線	34-B区
8	須恵器	上位 6 中位 7 下位 5	精良	灰色	堅緻	――――	〔外器面〕格子状叩き。	23区 SK06
9	須恵器	上位 8 中位 9 下位 7	精良	灰色	非常に堅緻	――――	〔外器面〕 細目の格子叩き。 〔内器面〕円文叩き。	24区
10	須恵器	上位 5 中位 11 下位 10	精良	外灰白色 内灰黒色	堅緻	――――	〔外器面〕丁寧なナデ。 〔内器面〕叩き。指頭痕。	27区 西側
11	須恵器	上位 8 中位 9 下位 10	精良	灰色	堅緻	――――	〔外器面〕 細目の格子叩き。 〔内器面〕円文叩き。	27区 東側 10号住居址
12	須恵器（甕の底部）	底部 中央 9 外底端 10 体部 9	精良	灰色	堅緻	復元底径 11.7cm 底部は上げ底で、かなり垂。	ナデ。	34-B区
13	土師器（壺）	上位 6 中位 11 下位 10	白色粒 (少量混入)	鈍い橙色	非常に堅緻	頸部は大きく外弯。	横ナデ。 〔内器面〕 下位：ヘラ削り。	22区
14	土師器（壺）	上位 6 中位 12 下位 10	精良	鈍い橙色	堅緻	頸部は大きく外弯。	横ナデ。 〔内器面〕 下位：ヘラ削り。	28区

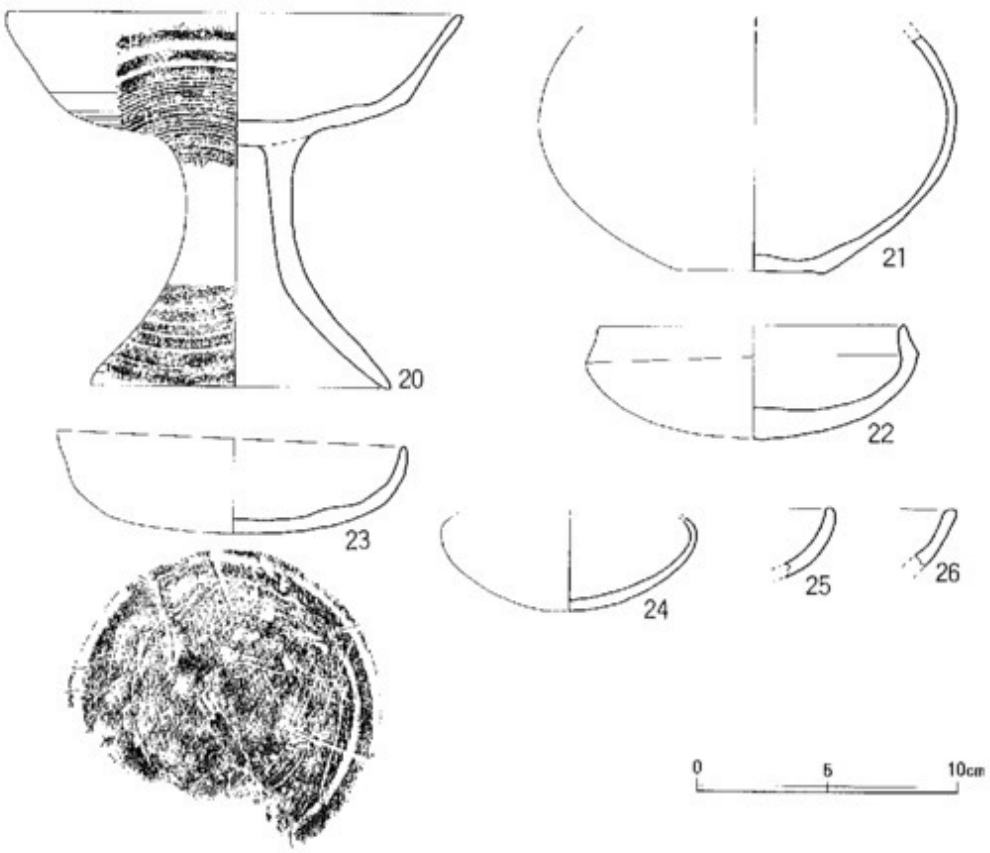
第19表　出土遺物観察表(1)



第36図　出土遺物実測図 (1)

No.	器種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形態	調整・その他	出土地点
15	土師器 (壺)	上位 11 中位 10 下位 12	白色粒 (多量混入)	茶褐色	非常に 堅緻	頸部は大きく外弯。	横ナデ。 〔内器面〕 中位：強いヘラ削り。 〔外器面〕 下位にスス付着	30区
16	土師器 (壺)	上位 6 中位 15 下位 7.5	精良	(外)乳褐色 灰黒色 (内)乳白色	非常に 堅緻	頸部は外弯。	〔外器面〕 上位：横ナデ。 中位：縦の刷け目。 下位：斜めの刷け目。 〔内器面〕 上位：横ナデ。 中位～下位：強いヘラ削り。指頭圧痕。	27区 東側 SK02
17	土師器 (鉢)	上位 6 中位 8 下位 9	精良	鈍い 橙色	非常に 堅緻	体部は、直線的に伸びる。	〔外器面〕 横ナデ。刷け目。 〔内器面〕 ヘラナデ。	27区 東側
18	土師器	上位 7 中位 6 下位 5	精良	丹塗り	堅緻	———	〔外器面〕 横位の細沈線。 〔内器面〕 上位：ナデ。爪先痕が横に並ぶ。	28区 SK01
19	土師器 (甕)	上位 6 中位 7 下位 11 脚部 13	精良	(外)褐灰色 (内)褐橙色	堅緻	底部に脚が付く。	〔外器面〕 斜め刷け目。ススが付着する。 〔内器面〕 ヘラ削り。	21区

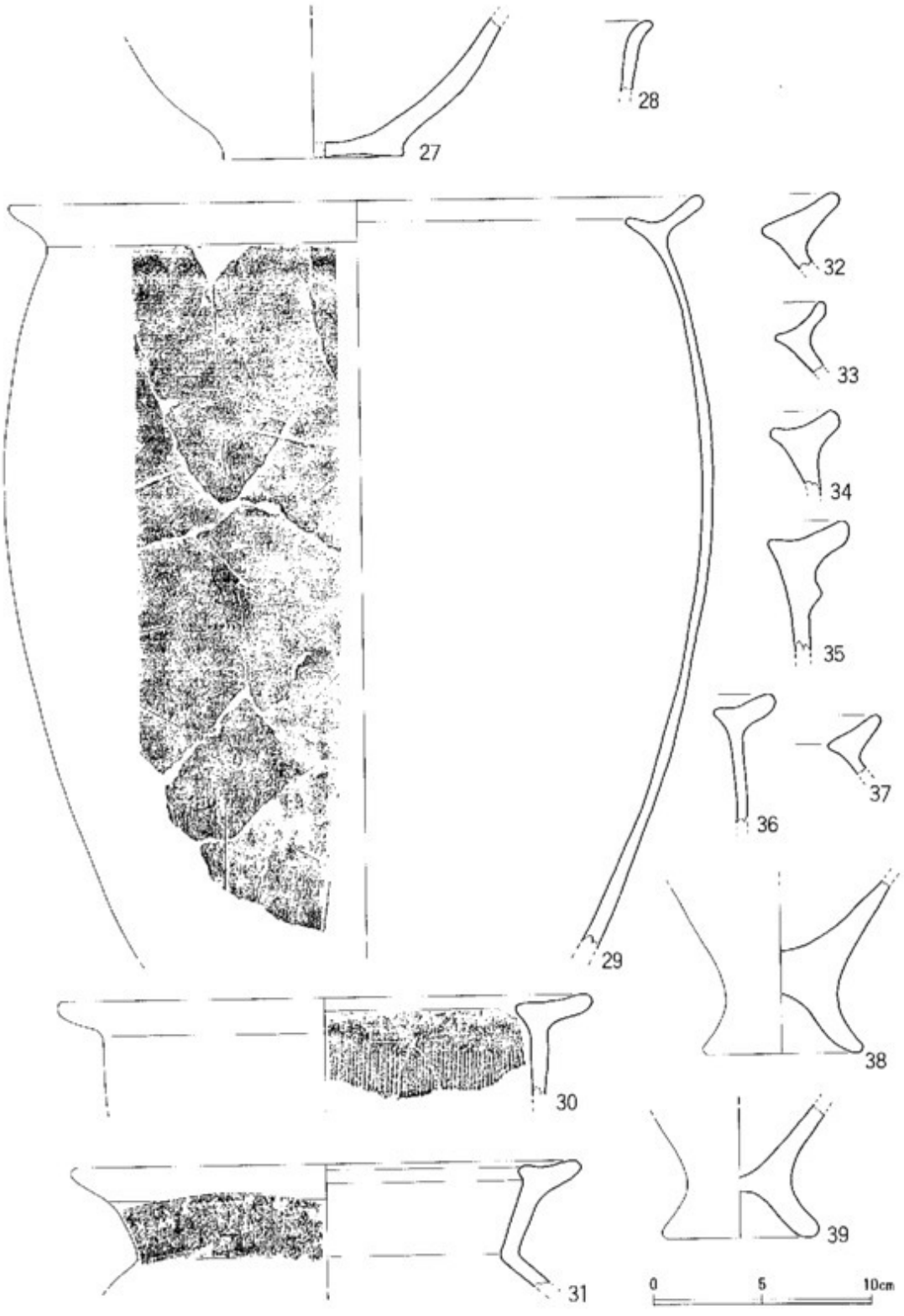
第20表　出土遺物観察表(2)



第37図　出土遺物実測図(2)

No.	器種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形態	調整・その他	出土地点
20	土師器 (高杯)	杯 上位 4 中位 7 脚部 上位 8 中位 10	精良	鈍い 橙色	堅緻	杯 口径 17.6cm 器高 4.2cm 脚 直径 上位 5.2cm 中位 4.1cm 下位11.6cm	(外器面) 杯：回転ナデ。下位に顕著な痕跡が残る。 脚：ナデ。下位は回転ナデ。 (内器面) 脚：回転ナデ。 杯：丁寧なナデ。	27区 東側 7号住居址
21	土師器 (壺)	胴部 上位 4 中位 4 底部 6~4.5	白色粒 (比較的多く混入)	桃褐色	やや軟	復元胴部最大径16.2cm 底径 5.8cm	ナデ。 ローリングが激しい。	25区 8号住居址
22	土師器 (杯)	上位 4~7 中位 7 底部 12	精良	褐色	堅緻	口径 11.8cm 体部最大径 12.8cm 器高 3.2cm	丁寧なナデ。 (外器面) スス付着。	27区 東側 7号住居址
23	土師器 (杯)	上位 2.5 中位 5 底部 6	精良	灰褐色	堅緻	復元口径 13.5cm 器高 3.7cm 底部はやや丸味を帯びる。 須恵器の模倣品。	(外器面) 底部：刷け目。 スス付着。 (内器面) ナデ。	27区 東側 7号住居址
24	土師器 (小型丸底壺)	上位 2 中位 3 底部 4.5	精良	灰褐色	堅緻	胴部は大きく内弯。 復元胴部最大径 9.9cm 底部は丸底の様相を呈する。	(外器面) 刷け目。 (内器面) ナデ。	表採
25	土師器	上位 4 中位 5 下位 5	精良	鈍い 橙色	非常に 堅緻	体部は内弯。	(内外器面) スス付着。	25区 SK03
26	土師器	上位 6 中位 4 下位 6	非常に 精良	乳白色	堅緻	口縁部は扁平。 体部はやや内弯。	丁寧な横ナデ。	28区 3・4号 住居址
27	弥生土器 (甕棺) 前期後半 板付Ⅱ式	体部 上位 6 中位 10 底部 中央 6 外底端 16	金雲母 (混入)	乳灰白色 (内面暗灰色) (灰褐斑)	堅緻	復元底径 8.3cm 外底は、やや上げ底。 体部の立ち上がりは大きく張む。	ナデ。	30区 2号甕棺
28	弥生土器 前期後半 板付Ⅱ式	上位 5 中位 6 下位 5	白色粒 (少量混入)	乳灰色	堅緻	口縁部は大きく外弯。	丁寧なナデ。	26区 1T
29	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 6~7 体部 上位 4 中位 5 下位 7	精良	茶灰色	堅緻	復元口径 32cm 復元胴部最大径32.4cm	(外器面) 上位：斜めの刷け目。 中~下位：刷け目。 スス付着。 (内器面) ナデ。	22区 SK01
30	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 9 体部 上位 8 中位 6	精良	褐灰白色	堅緻	復元口径 24.4cm	横ナデ。 (内器面) 刷け目。	30区 3号甕棺
31	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 6~11 体部 上位 9 中位 6	精良	(外)茶褐色 (素地)暗赤色	堅緻	復元口径 23.4cm 体部の上位は「く」の字型に大きく弯曲。	(外器面) 上位：横ナデ。 中位：粗い刷け目。 (内器面) 強い横ナデ。	26区 3T

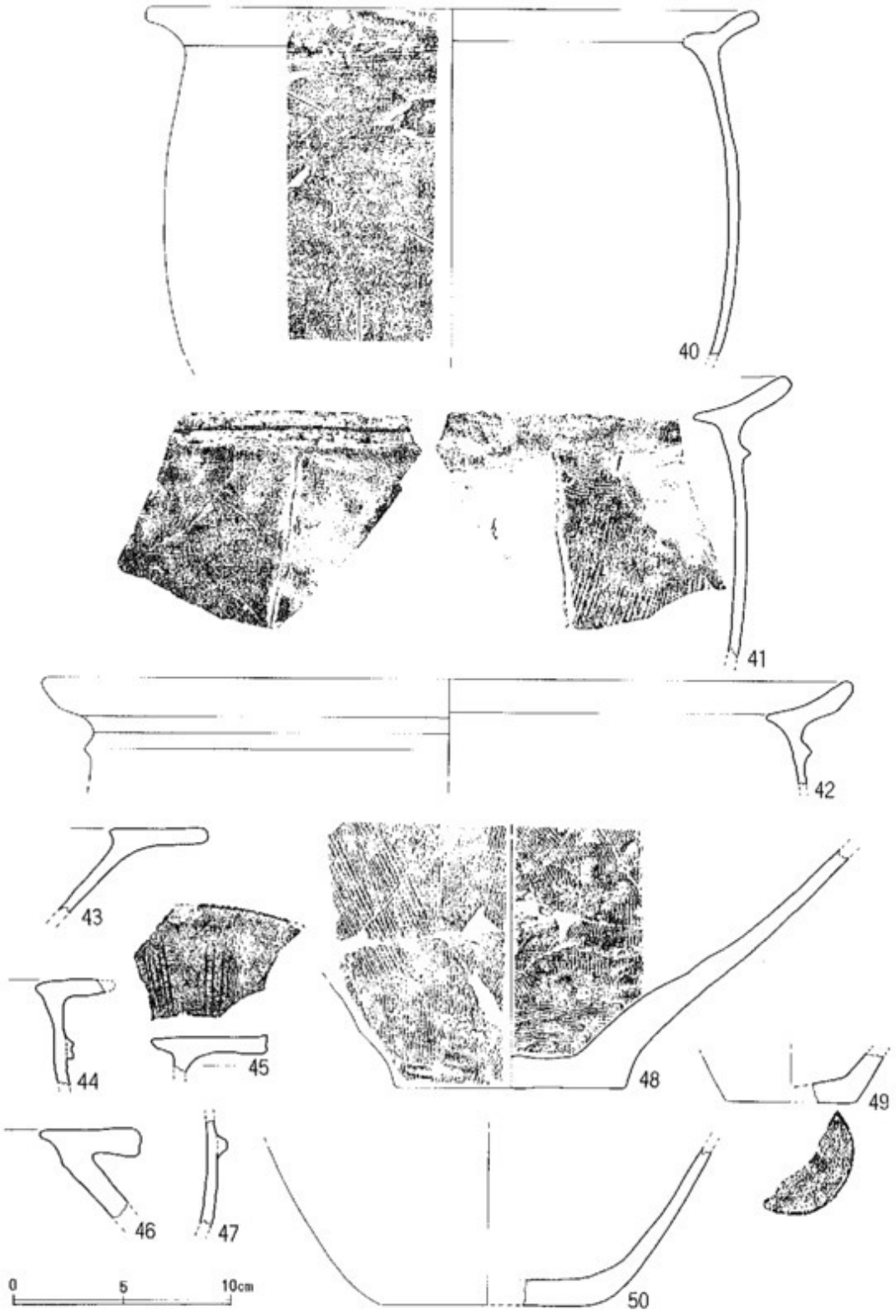
第21表　出土遺物観察表(3)



第38図　出土遺物実測図(3)

No.	器　種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形　態	調整・その他	出土地点
32	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 7～10 体部 上位　7	精良	灰褐色	堅緻		横ナデ。	28区 1・2号 住居址
33	弥生土器 中期 黒髪式	頸部　5 体部 上位　6	精良	乳褐色	堅緻		横ナデ	26区 1 T
34	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 9～12 体部 上位　7	精良	褐灰色	堅緻		横ナデ。	30区
35	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 10～12 体部 突帯 15 上位　7	小石粒 (混入)	褐白灰色	堅緻	体部の上位に突帯が付く。	〔内器面〕 上位：横ナデ。 中位：刷け目。	28区 1・2号 住居址
36	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 8～10 体部 上位　6 中位　5		褐灰色			〔外器面〕スス付着。 〔内器面〕 刷け目後、ナデ消し。	30区
37	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 6～10 体部 上位　5	鉱物 (混入)	灰黒色	堅緻		横ナデ。	28区
38	弥生土器 中期 黒髪式	体部　5 底部　20 脚部　11	精良	鈍い 橙色	堅緻	底径　7.3cm 脚部はやや弯曲。	〔外器面〕刷け目。 〔内底面〕スス付着。	27区 東側 6号住居址
39	弥生土器 中期 黒髪式	体部　7 底部　7 脚部　11	白色粒 (多地混入)	赤褐色	やや 甘い	底径　7.2cm	ローリングを受けている。	30区
40	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 6～7 体部 上位　9 中位　5 下位　4	精良	(外)灰黒色 (内)褐灰色	堅緻	復元口径　28cm 復元胴部最大径26.4cm	〔外器面〕 上位：横ナデ。 中位：横方向の刷け目。 下位：斜め方向の刷け目。ナデ消しが加わる。 〔内器面〕ナデ。	22区 SK01
41	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 7～10 体部 突帯 10 上位　6 中位　5 下位4.5	精良	褐灰色	堅緻	体部の上位に突帯が付く。	〔外器面〕上位：横ナデ。 中位：刷け目。 下位：横方向の刷け目。斜め方向の刷け目。スス付着。 〔内器面〕ナデ。指頭痕。 下位：刷け目。	24区 Pit3
42	弥生土器 中期 黒髪式	頸部 7～10 体部 突帯　9 上位　4	精良	黒色 (スス付着)	堅緻	復元口径　41.6cm 体部の上位に突帯が付く。 突帯の先端は鋭角。	ナデ。	24区 Pit3
43	弥生土器 中期 須久式	頸部　8 体部 上位　7 下位　5	精良	乳褐色	堅緻		〔内外器面〕丹塗り。	26区 2 T

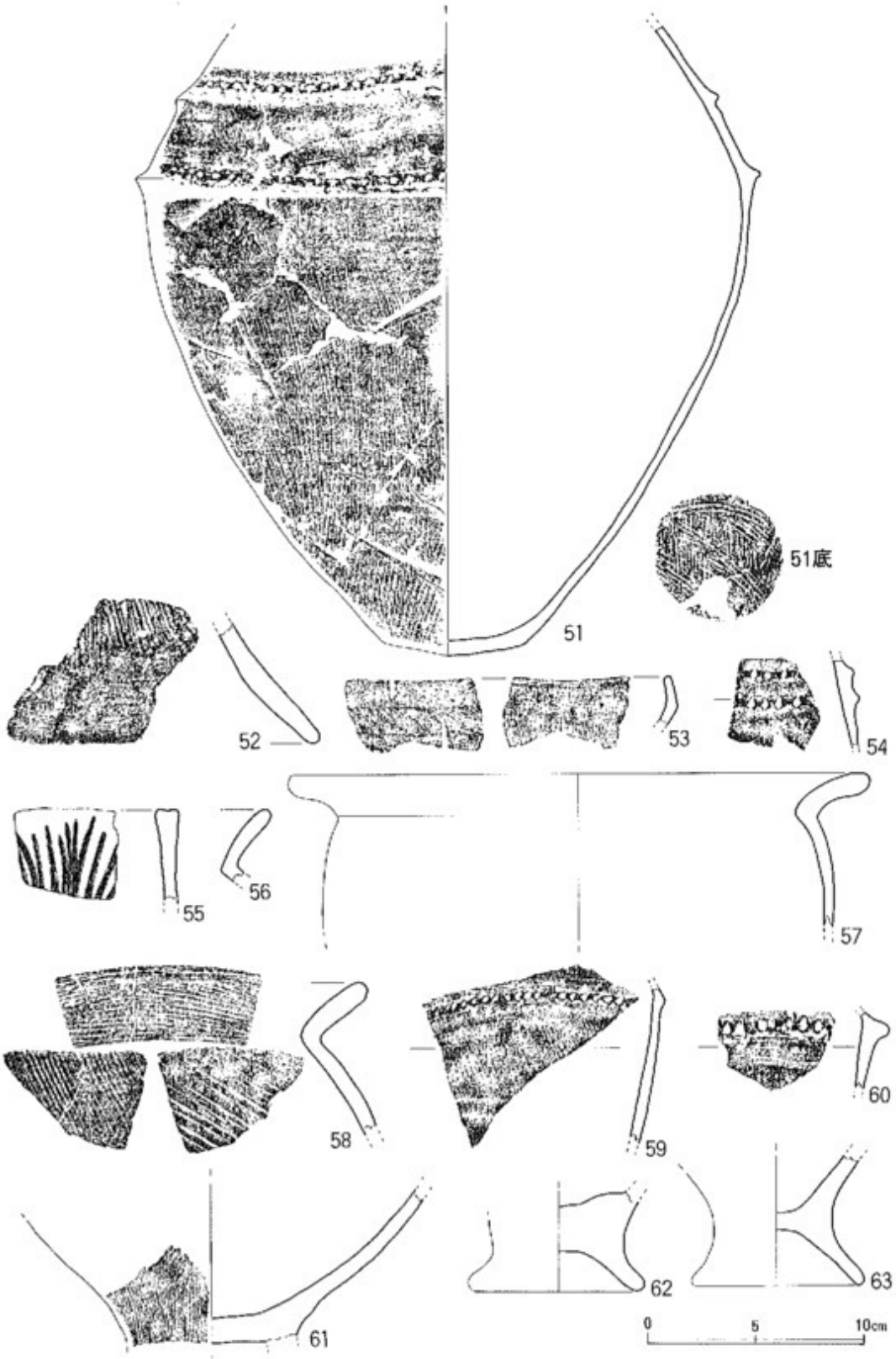
第22表　出土遺物観察表(4)



第39図　出土遺物実測図(4)

No.	器種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形態	調整・その他	出土地点
44	弥生土器 中期 須久式	頸部 6～8 体部 上位4.5 突帯 8	精良	褐白色	堅緻	体部の上位に貼り付けの突帯が付く。 突帯の上面は凹む。	〔内外器面〕暮い丹塗り。	26区 1T
45	弥生土器 中期 須久式	頸部 7～8 体部 上位 5	精良	褐色	非常に堅緻	――――	〔内外器面〕丹塗り。 〔頸部〕 上面：横方向刷け目。 下面：ナデ。	22区 SK01
46	弥生土器 中期 須久式	頸部 11～13 体部 上位 11	精良	(内)灰黒色 (外)緑褐色	堅緻	質量感のある土器。	〔頸部〕 上・下面とも強いナデ。 〔内器面〕上位：凹線。	26区 2T
47	弥生土器 中期 須久式	体部 突帯 9 上位 5 中位5.5	精良	褐白灰色	堅緻	体部に貼り付けの突帯が付く。	〔内外器面〕丹塗り。	22区 SK01
48	弥生土器 中期 須久式	体部 上位 6 中位 8 下位 19 底部 15 外底端27	精良	灰黄褐色	堅緻	底径 10.6cm 底部は平底。 外底端は大きく肥厚。 体部は外弯気味に立ち上がる。	〔内外器面〕刷け目。	30区 6号甕棺
49	弥生土器 中期 須久式	体部 8 底部 9 外底端13	鉱物 (混入)	褐白色	堅緻	復元底径 6.0cm 底部は平底。	〔外底〕ナデ。 〔内外器面〕丹塗り。	28区
50	弥生土器 中期 須久式	体部 上位 5 中位 6 下位 9 底部 12 外底端13	精良	(外)白褐色 (内)褐灰色	堅緻	復元底径 10.2cm 外底端は丸味を帯びる。	〔外器面〕若干の刷け目。 丹塗り。 〔内器面〕 ナデ。指頭圧痕。 〔外底面〕ナデ。	26区 3T
51	弥生土器 後期 黒髪式II	体部 上位 4 中位 4 下位 4 底部 7	鉱物 (混入)	褐灰色	堅緻	復元胴部最大径28.8cm 体部の上位に刻み目を持つ2条の突帯。	〔外器面〕刷け目。 〔内器面〕 刷け目後、ナデ消し。	30区 1号甕棺
52	弥生土器 後期	脚部 上位 8 中位 11 下位 7	精良	灰橙色 (外器面にスス付着)	堅緻	――――	〔外器面〕 上位・中位：刷け目。 下位：横ナデ。 〔内器面〕 刷け目後、ナデ消し。	22区
53	弥生土器 後期 無頸壺	体部 上位 4 中位 6 下位 5	精良	乳褐色	非常に堅緻	体部は中途から、大きく内弯する。	〔外器面〕 上位～中位：横方向の刷け目に、ナデが加わる。 中位～下位：右斜め方向の刷け目。やや粗い調整。	28区 1・2号 住居址
54	弥生土器 後期	上位 4 突帯 8 下位 4	精良	褐桃色 (内)灰黒色	堅緻	外器面に刻目を持つ2条の突帯。	ナデ。	28区 1・2号 住居址

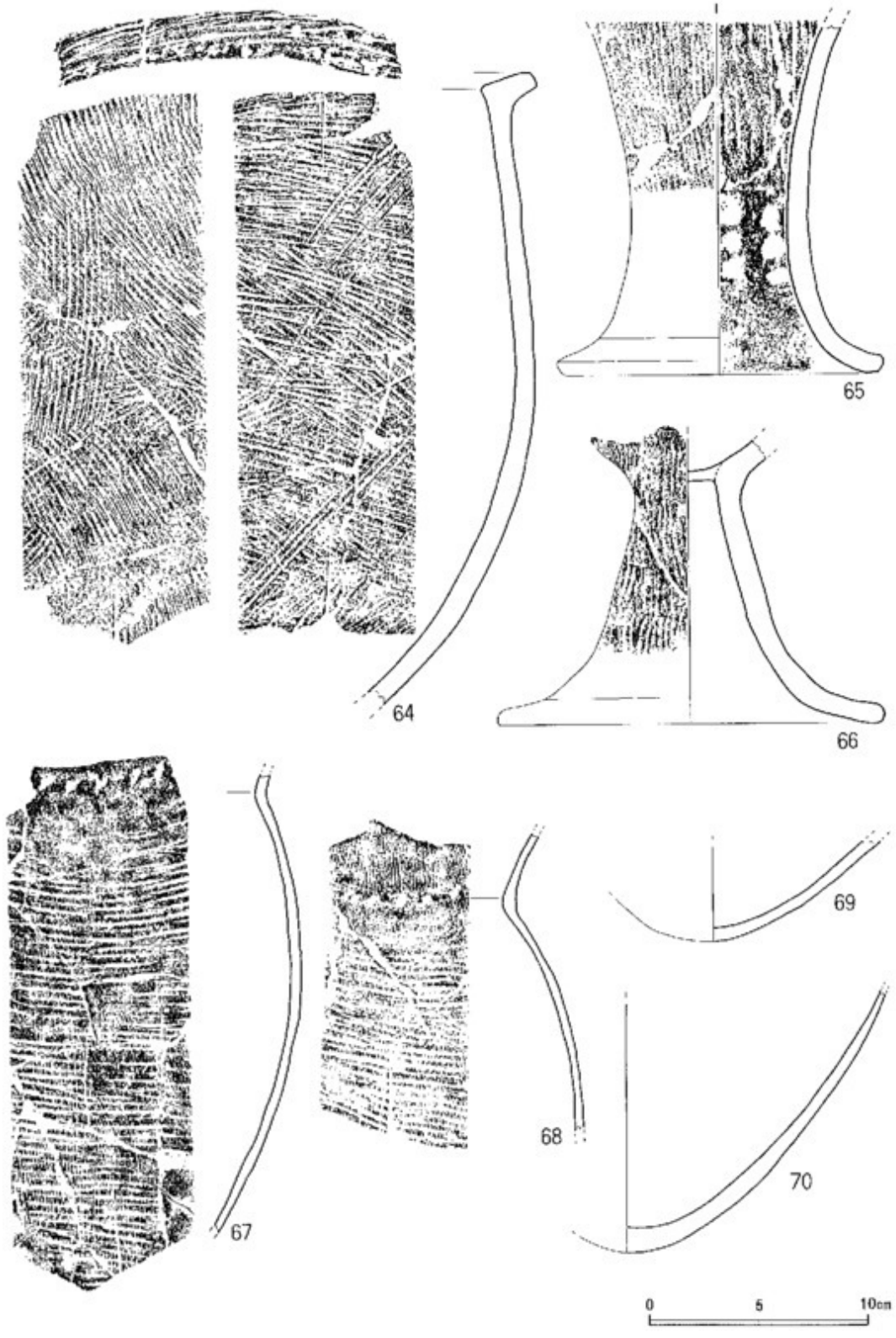
第23表　出土遺物観察表(5)



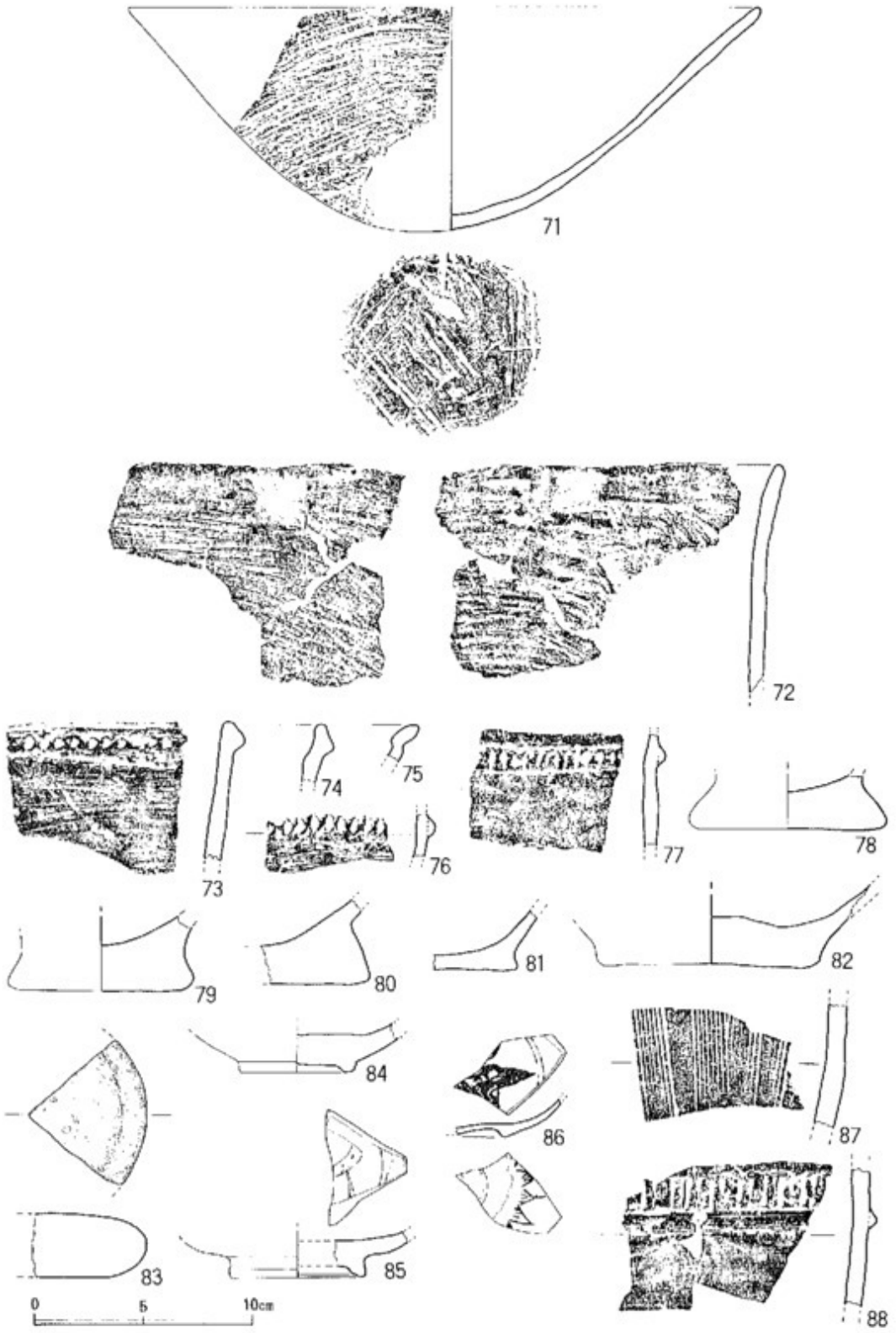
第40図　出土遺物実測図(5)

No.	器種	器厚(cm)	胎土	色調	焼成	形態	調整・その他	出土地点
55	弥生土器 後期後半	上位 10 中位 6 下位 6	精良	灰茶色 (内)灰黒色	非常に 堅緻	体部は下位から上位へ 漸次、肥厚する。 口唇部は凹む。	(外器面) ヘラ磨きによる暗文。 (内器面) 粗いナデ。	23区 SK06
56	弥生土器 後期中葉	上位 7 中位 6 下位 6	精良	乳褐色	堅緻	頸部は「く」の字に外寄。	横ナデ。 若干のススが付く。	
57	弥生土器 後期前半	上位 10 中位 10 下位 4	精良	乳白色	やや 甘い	復元口径 26.8cm 頸部は肥厚する。	横ナデ。 ローリングが加わる。	30区 7号甕棺
58	弥生土器 後期前葉	上位 10 中位 7 下位 7	精良	乳褐色	普通	———	(外器面) 上位～中位：横ナデ。 中位～下位：刷け目。 (内器面) 上位～中位：粗く浅い 刷け目。 中位～下位：粗く浅い 斜め方向の刷け目。	30区 7号甕棺
59	弥生土器 後期中葉	上位 3 突帯 5 中位 5 下位 5	精良	鈍い 橙色	非常に 堅緻	刻み目を有する突帯が 付く。	(外器面) ナデ。 (内器面) 指頭圧痕。	
60	弥生土器 後期前葉	上位 3 突帯 12 中位 4	精良	乳白色	堅緻	刻み目を有する突帯が 付く。	(外器面) 横ナデ。 (内器面) ナデ。	26区 2 T
61	弥生土器 後期 野辺田式	体部 上位 6 中位 7 底部 12	精良	(外)暗褐色 (内)褐白色	堅緻	復元最大胴部径 18cm 復元底径 8cm 脚台付き甕である。	———	25区 8号住居址
62	弥生土器 後期 野辺田式	底部 30 脚部 8	白色粒 (混入)	鈍い 橙色	堅緻	底部径 8.1cm 脚部高 1.9cm	(外器面) 刷け目。	30区
63	弥生土器 後期 野辺田式	体部 7 底部 8 脚部 6	精良	灰黒色	堅緻	復元底径 7.9cm 脚部高 2.6cm	(外器面) 刷け目。	27区 西側
64	弥生土器 後期 野辺田式	頸部 25 体部 上位 10 中位 9 下位 9	白色粒 (混入)	(外) 上位黒色 中位茶褐色 下位灰褐色	普通	———	(外器面) 刷け目。 (内器面) 刷け目後、ナデ消し。	25区 SK04
65	弥生土器 後期 野辺田式	上位 9 中位 10 下位 10	精良	橙褐色 鈍い橙色	普通	復元底径 15cm 器台の残存。	(外器面) 刷け目。 (内器面) 刷け目。指頭圧痕。	30区
66	弥生土器 後期	底部 5 体部 10 脚部 上位 10 中位 10 下位 9	精良	鈍い 橙色	普通	復元底径 17.8cm 高杯の脚部。	(外器面) 刷け目。	25区 8号住居址
67	弥生土器 最終末期	上位 5 中位 5 下位 3	精良	(外)乳白色 (内)灰褐色	普通	———	(外器面) 上位：爪先痕。 中位～下位：刷け目。 (内器面) 刷け目後、ナデ消し。	25区 9号住居址

第24表　出土遺物観察表(6)



第41図　出土遺物実測図(6)



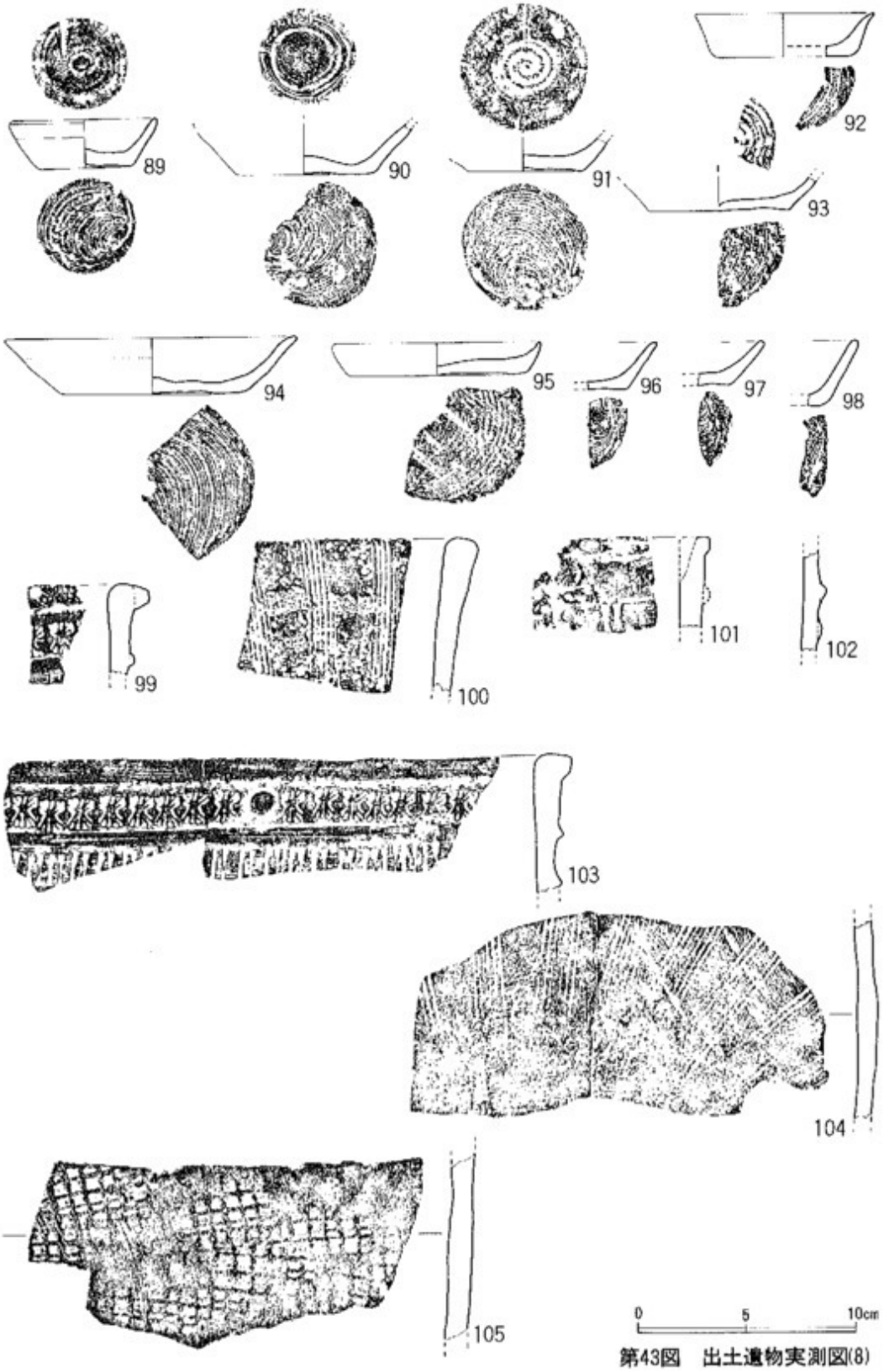
第42図　出土遺物実測図(7)

No.	器　種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形　態	調 整・その他	出土地点
68	弥生土器 最終末期	上位　3 中位　6 下位　4	精良	(外)乳白色 (内)灰褐色	普通		(外器面) 刷け目。 (内器面) 刷け目後、ナデ消し。	25区 9号住居址
69	弥生土器 最終末期	底部　6 体部　5	鉱物 (混入)	灰褐色	普通	底部はやや尖底型を呈する。 体部とも薄壁。	(外器面) ローリング。 (内器面) 刷け目後、ナデ消し。	25区
70	弥生土器 最終末期	底部　12 体部 上位　3 中位　5 下位　8	白色粒 (混入)	(外)褐灰色 (内)灰褐色	普通	底部は肥厚し、やや尖底型を呈する。	ローリングを受けている。	25区 9号住居址
71	縄文土器 晩期	底部　7 体部 上位　5 中位4.5 下位　5	白色粒 (混入)	(外)黒褐色 (内)黒色	普通	復元口径　29cm 器高　10.3cm 底部は尖底型を呈する。 浅鉢。	(外器面) 刷け目。 (内器面) 黒色磨き。	24区 SB52 -P2
72	縄文土器 晩期 粗製土器	上位　6 中位　7 下位　7	鉱物 (多量に混入)	茶黒色	普通	体部はやや外弯。	粗い磨き。	24区 SB52 -P2
73	縄文土器 晩期 粗製土器	突帯　11 体部 上位　7 中位　7 下位　7	精良	(外)褐灰色 カーボン沿着 (内)褐灰色	普通	口唇部の端に三角形状の刻み。 中央部には 2.5mm幅の沈線。	(口唇部) 最上位はナデ。 (外器面) 横方向の粗い磨き。炭化物付着。 (内器面) 横ナデ。指頭圧痕。	26区 2T
74	縄文土器 晩期 黒色磨製土器	上位 5.5 屈曲部10 中位　7	白色粒 (多量に混入)	(外)灰茶色 (内)黒色 (内部)褐色	堅緻	頸部は逆「く」の字に屈曲する。 外器面の上位に 2 mm幅の 2 条の沈線。	(外器面) 磨き (内器面) 横方向の磨き。	27区
75	縄文土器 晩期	上位　7 中位　5	精良	灰白褐色	堅緻	浅鉢の口縁部。	横ナデ。	26区 1T
76	縄文土器 晩期	突帯　9 中位　5	白色粒 (少量混入)	(外)黄褐色	普通	突帯は貼り付けで、刻目を有する。	ナデ。 ススが付着する。	26区 2T
77	縄文土器 晩期	上位　4 突帯　9 中位　7 下位　6	精良	(外)乳白色 (内)乳灰色	堅緻	突帯は貼り付けで、刻目を有する。	ナデ。	
78	縄文土器 晩期	底部 中央 17	白色粒 (混入)	鈍い 橙色	堅緻	底径　8.9cm 平底で、外底端は大きく張り出す。	(外器面・外底面) ナデ。	26区
79	縄文土器 晩期	底部 中央 21	白色粒 (混入)	茶褐色	堅緻	底径　8.1cm 平底。 体部の立ち上がりは、大きく凹む。	(外器面・外底面) ナデ。	21区
80	縄文土器 晩期	底部 中央 18 体部　7	精良	褐灰色	堅緻	外底端は肥厚し、大きく張り出す。	(外器面・外底面) ナデ。	
81	縄文土器 晩期	底部 中央　7 体部　5	精良	(外)緑褐色 (内)灰黒色	堅緻	全体的に薄壁。 体部の立ち上がりは、大きく窄む。	(外器面・外底面) ナデ。	
82	縄文土器 晩期	底部 中央 21 体部　6	白色粒 小石 (混入)	褐灰色	普通	質感のある土器。 底部は体部に比べて、大きく肥厚。 やや上げ底。	(外器面・外底面) ナデ。 (内底面) ザラザラの状態。	30区 5号襲棺

第25表　出土遺物観察表

No.	器　種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形　態	調整・その他	出土地点
83	摺り石 縄文	厚さ　29	—	—	—	重さ　125g	石面の端部に磨痕。	22区
84	青　磁	底部 中央 14 高台　5 体部　7	精良	灰オリーブ色 (外器面の一部) 灰橙色	堅緻	底径　5.3cm 高台高　4cm	底部は大きく肥厚。	21区 Pit3
85	青　磁	底部　11 体部　6	精良	灰オリーブ色	堅緻	復元底径　6.3cm 高台高　5mm	同安窯系青磁。 器面に光沢あり。	21区 Pit8
86	染　付	底部 中央　3 体部　2	精良	(呉須色) 青黒色	堅緻	――――――	蓋筒皿。 全体的に薄壁。	22区 Pit18
87	瓦質擂鉢	上位　8 中位　9 下位　9	精良	灰黒色 (内部) 灰白黒色	堅緻	8条を一単位とする条線。	ナデ。	24区 SB52 -P4
88	瓦質火舎	上位　7 突帯　11 中位　7 下位　7	精良	(外)黒灰色 (内)灰褐色	普通	突帯は貼り付け。	〔外器面〕横ナデ。 〔内器面〕ローリングを受けている。	23区 SK06
89	糸切り 土師器 (小杯)	底部 中央　7 外底端 7 体部 3.5	精良	鈍い橙色	非常に堅緻	器形はラッパ状型の舟型の中間。 体部は直線的に伸びる。 復元口径　6.6cm 器高　2.2cm 復元底径　4.2cm やや上げ底。 内底面の中央部は凸。	横ナデ。 〔外底面〕糸切り。	23区 SK06
90	糸切り 土師器 (杯)	底部 中央　8 端部　4 外底端 7 体部　5	精良	桃灰色 (二次焼成?)	非常に堅緻	上げ底で内底面の中央は大きく凸となる。	横ナデ。 〔外底面〕糸切り。	23区 SK06
91	糸切り 土師器 (杯)	底部 中央　6 外底端 8 体部　5	精良	褐灰色	非常に堅緻	底径　5.3cm やや上げ底。	ナデ。 〔内底面〕ロクロ回転による渦巻き痕。 〔外底面〕糸切り。	21区 Pit24
92	糸切り 土師器 (杯)	底部　5 外底端 8 体部 中央　5 上位　2	金雲母 (混入)	赤褐色	非常に堅緻	復元口径　8.1cm 器高　2.0cm 復元底径　8.7cm 器形は舟型。 口縁部の上位は、つまみ上げている感じ。	ナデ。 〔外底面〕糸切り。	21区
93	糸切り 土師器 (杯)	底部 中央　3 外底端7.5 体部　4	白色粒 (混入)	乳褐色	非常に堅緻	復元底径　6.4cm 内底面の中央は、大きく窪む。	〔内底面〕 ロクロ回転による渦巻き痕。	23区 SK06
94	糸切り 土師器 (杯)	底部 中央　7 端部4.5 外底端 7 体部　4	精良	鮮やかな 赤褐色	普通	体部は直線的に大きく開く。 復元口径　13.3cm 器高　2.6cm 復元底径　8.2cm	ナデ。 〔外底面〕糸切り。	21区 Pit34

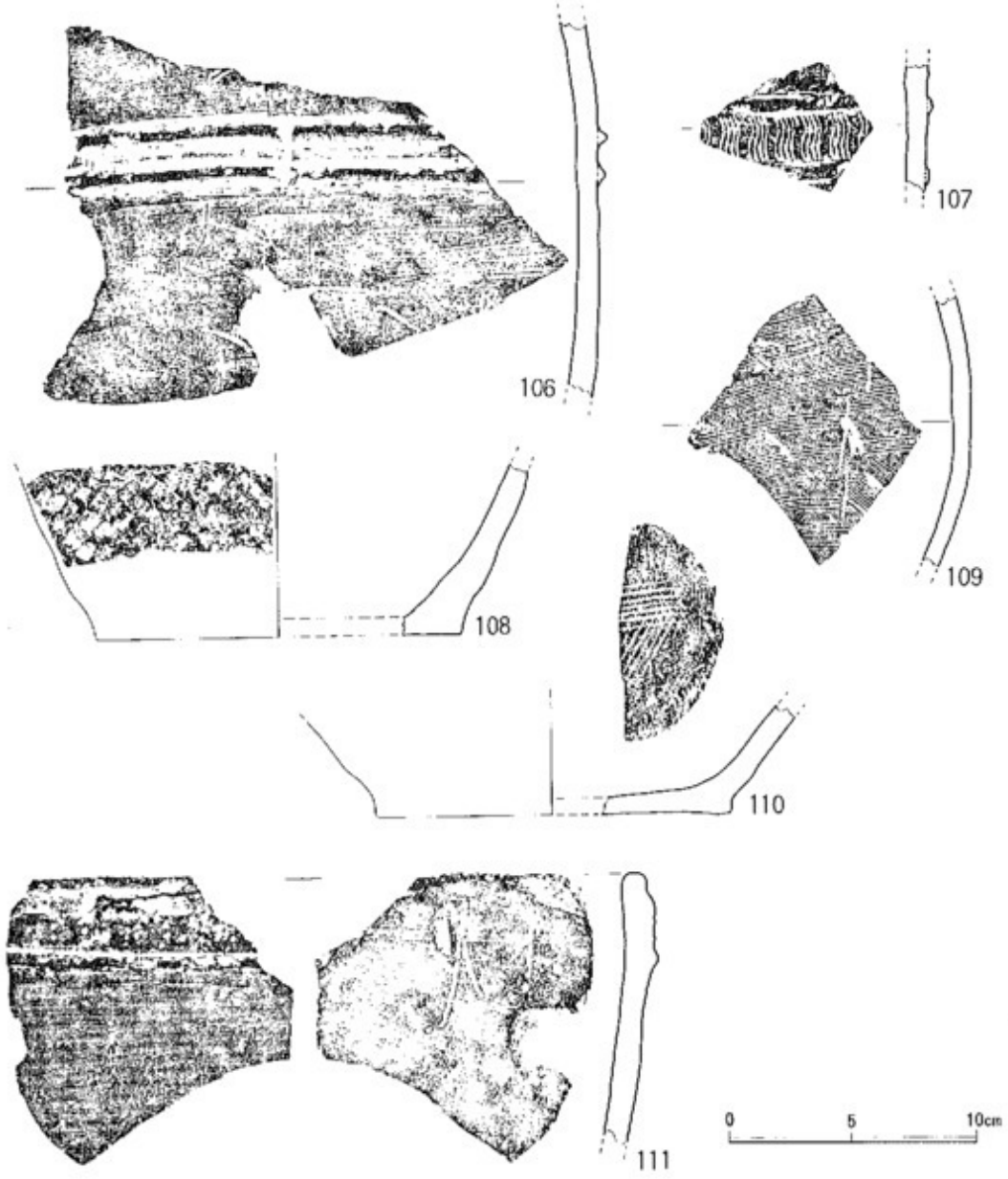
第26表　出土遺物観察表(8)



第43図　出土遺物実測図(8)

No.	器　種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形　態	調整・その他	出土地点
95	糸切り 土師器 (皿)	底部 中央 4 外底端 8 体部 2 中位 5 上位 2	金雲母 (混入)	鈍い 橙色	非常に 堅緻	復元口径 9.6cm 器高 1.5cm 復元底径 8.0cm	ナデ。 〔外底面〕糸切り。	21区 Pit52
96	糸切り 土師器 (杯)	底部 4 外底端 7 体部 3	金雲母 (混入)	褐灰色	非常に 堅緻	――――	丁寧なナデ。 〔外底面〕糸切り。 〔内底面〕ススが付着。	23区 SK06
97	糸切り 土師器 (杯)	底部 5 外底端 7 体部 4	金雲母 (混入)	灰黒色 (二次焼成?)	普通	やや上げ底。	ナデ。 〔外底面〕糸切り。	23区 SK06
98	糸切り 土師器	底部 5 外底端 7 体部 4.5	金雲母 (混入)		普通	――――	横ナデ。 〔外底面〕糸切り。	23区 SK06
99	瓦質火舎	突帯 19 中位 9 突帯 11 下位 7	精良	灰黒色	堅緻	突帯は貼り付け。	ローリングを受けている。 2条の突帯間に花印のスタンプ。	23区 SK06
100	瓦質擂鉢	上位 15 中位 10 下位 8	精良	灰黒色 (内部)灰色	普通	6条を一単位とする条線。	ナデ。	22区 SK01
101	瓦質火舎	上位 11 中位 10	精良	灰黒色 (内部)灰褐色	普通	――――	ローリングを受けている。 2条の突帯間に花印のスタンプ。	22区 SK01
102	瓦質土器	上位 6 突帯 11 中位 7 突帯 9 下位 7	精良	(外)黒灰色 (内)灰白褐色	普通	突帯は貼り付け。	ローリングを受けている。	23区 SK06
103	瓦質土器	上位 17 中位 10 突帯 12 下位 11	精良	灰黒色	普通	――――	ローリングを受けている。 花印スタンプと格子状の刻目。	23区 SK06
104	瓦質擂鉢	上位 8 中位 9 下位 7	精良	灰褐色	普通	7条を一単位とする条線。	〔外器面〕ススが付着 〔内器面〕 刷け目後、掻き目。	23区 SK06
105	中世雑器	上位 10 中位 11 下位 10	白色粒 鉱物 (混入)	(外)灰黒色 (内)灰褐色 (内部) 灰白褐色	甘い	――――	〔外器面〕格子叩き。 凹：8×5mm～3×5mm (大きさは一定しない) 凸：2mm(横位・縦位) 〔内器面〕 ナデ。ローリングを受けている。	22区 SK01
106	中世雑器	上位 9 突帯 12 突帯 12 中位 8 下位 10	精良	茶褐色	堅緻	2条の突帯が付く。 突帯は貼り付け。	〔外器面〕 上～中位：横ナデ。 中～下位：ナデ。 〔内器面〕ナデ。	23区 SK06
107	中世雑器	上位 9 突帯 10 中位 9 突帯 9	精良	褐灰色	普通	2条の突帯が付く。 突帯は貼り付け。	2条の突帯間に波状の掻き目。 掻き目は4条を一単位とする。	21区 Pit65

第27表　出土遺物観察表(9)



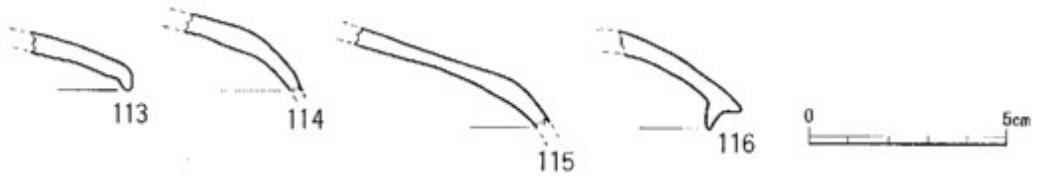
第44図　出土遺物実測図(9)

No.	器種	器厚(cm)	胎土	色調	焼成	形態	調整・その他	出土地点
108	中世雑器	底部 7 外底端20 体部 8	精良	灰小豆色	非常に堅緻	復元底径 14.8cm 平底と思われる。	(外器面) 中位：6mm四方の格子目叩き。 下位：強い指頭圧痕が目立つ。 (内器面) 丁寧なナデ。 針状の小穴有り。	23区 SK06
109	須恵器 中世	上位 8 中位 6 下位 6	精良	灰色 (外)光沢あり	非常に堅緻	――――	(外器面) ナデ。 (内器面) 非常に細かく	23区 SK06
110	中世雑器	底部 中央 6 外底端16 体部 9	精良	灰褐色 (内部)灰色	普通	復元底径 14.2cm 外底は平底に近い。	(外器面) 外底端側に強い指頭圧痕が残る。	23区 SK06
111	瓦質火舎	上位 9.5 突帯 13 中位 10 下位 9.5	白色粒 (混入)	(外)灰黒色 (内)灰白色	普通	突帯が付く。	(外器面) 突帯間に直径1.4cm大の花印スタンプ。 (内器面) 横ナデ。	22区 SK01
112	備前甕	上位 8 中位 12 下位 7	小石 (混入)	(外)小豆色 (内) 灰オリーブ色	堅緻	底径 30.5cm 胴部最大径 60.0cm	ナデ。	24区 SK01

第28表　出土遺物観察表(10)

堀切地区（圃場整備予定地内）よりの出土遺物

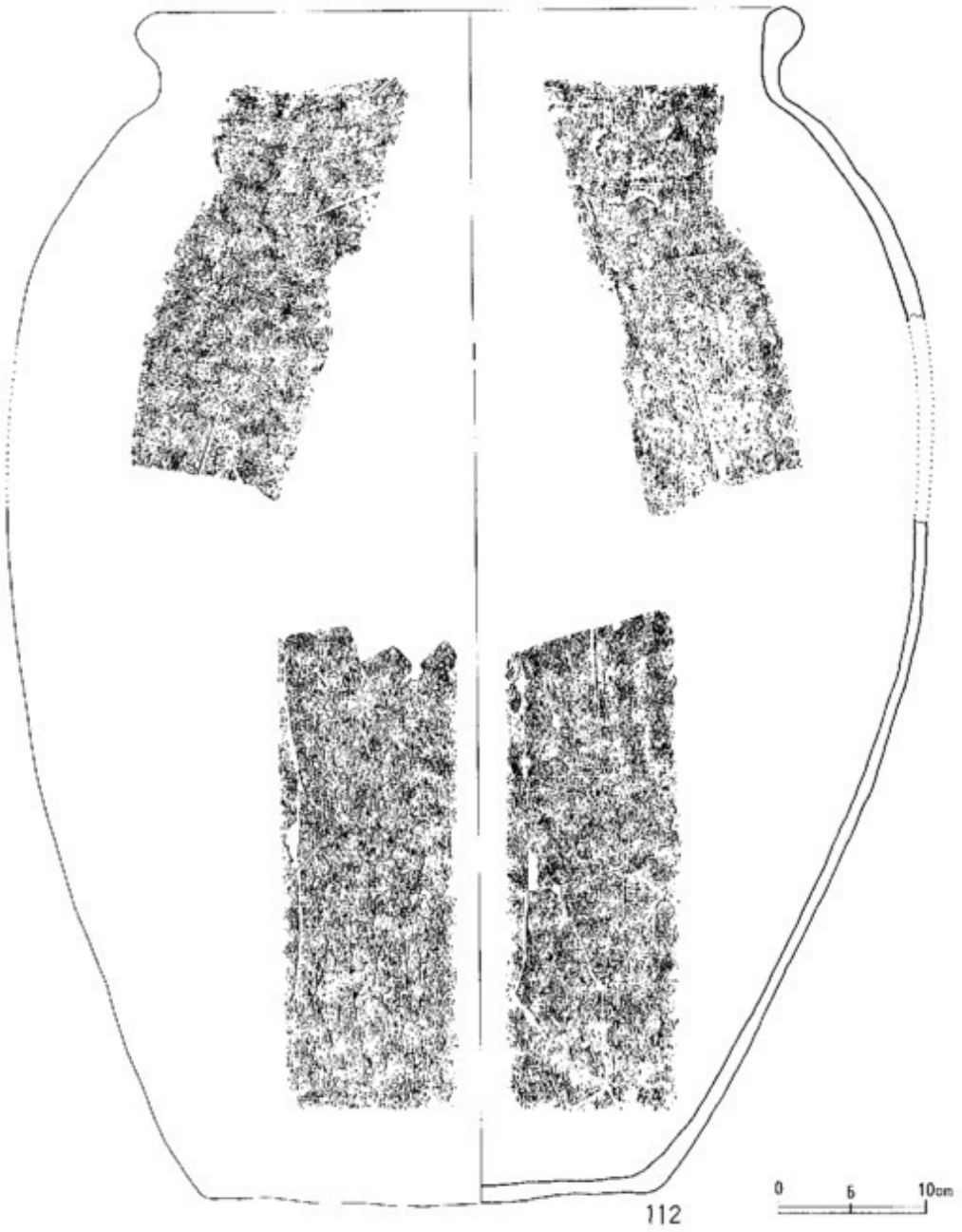
113～116須恵器。いずれも蓋で、鞠智城時代のものである。削り出しによる返りが付くもの(113・116)と付かないもの(114・115)がある。



第45図　出土遺物実測図(10)

No.	器種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形態	調整・その他	出土地点
113	須恵器 (蓋)	上位 4.5 中位 5 下位 5	白色粒 (混入)	(外)灰黒色 (内)灰白色	堅緻	削り出しの小さな返りが付く。	(外器面) 回転ナデ。 (内器面) ローリング。	堀切 地区
114	須恵器 (蓋)	上位 4.5 中位 5.5 下位 3	白色粒 (混入)	灰色	非常に堅緻	――――	(外器面) 回転ナデ。 (内器面) ナデ。	堀切 地区
115	須恵器 (蓋)	上位 4.5 中位 3.5 下位 3.5	白色粒 (混入)	灰(黒)色	非常に堅緻	――――	(外器面) 鮮明な回転ナデ。 (内器面) ナデ。	堀切 地区
116	須恵器 (蓋)	上位 6 中位 4.5 下位 4.5	精良	灰白色	堅緻	削り出しの返し(細身)が付く。	(内外器面)	堀切 地区

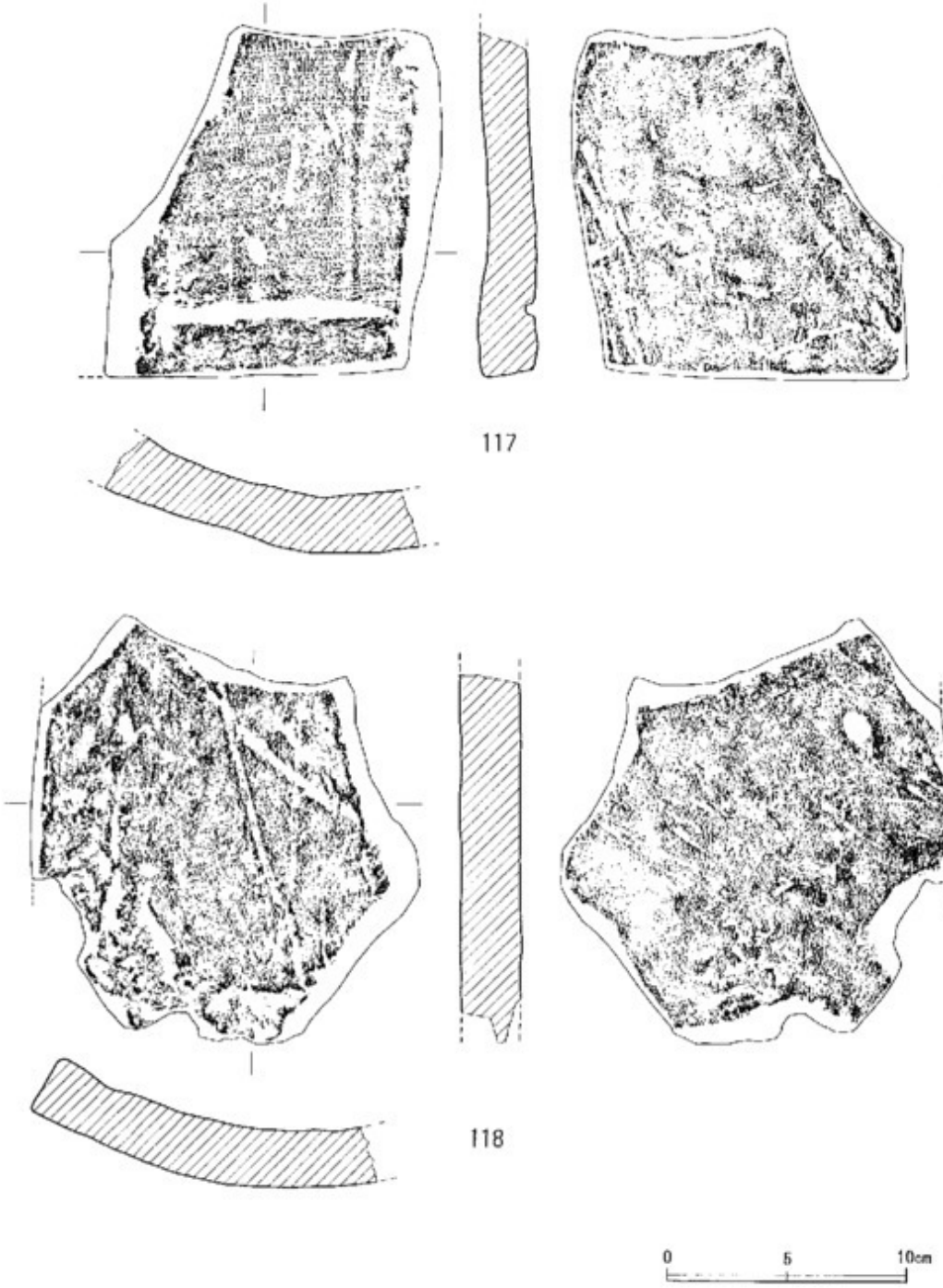
第29表　出土遺物観察表(11)



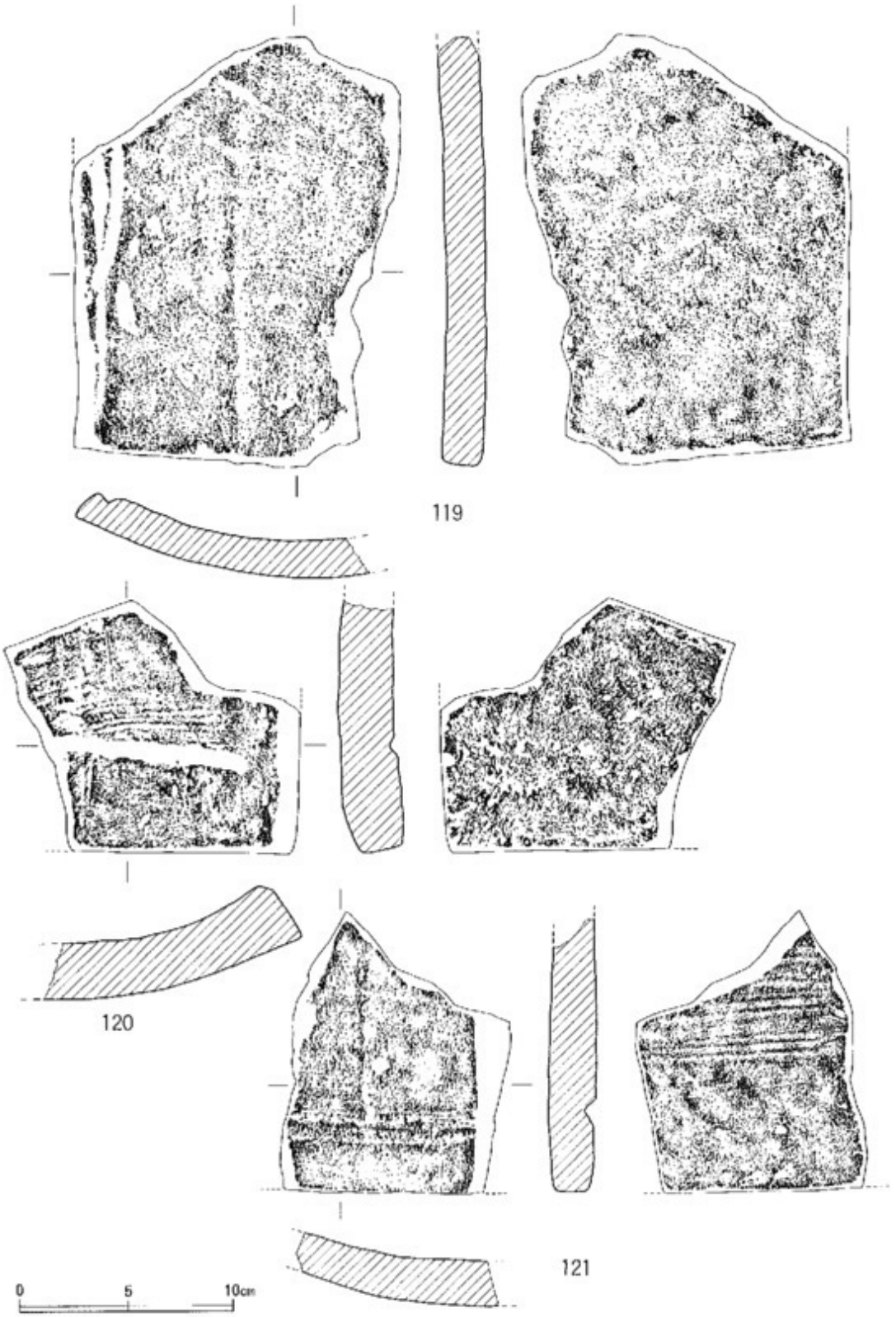
第46図　出土遺物実測図(1)

布目瓦

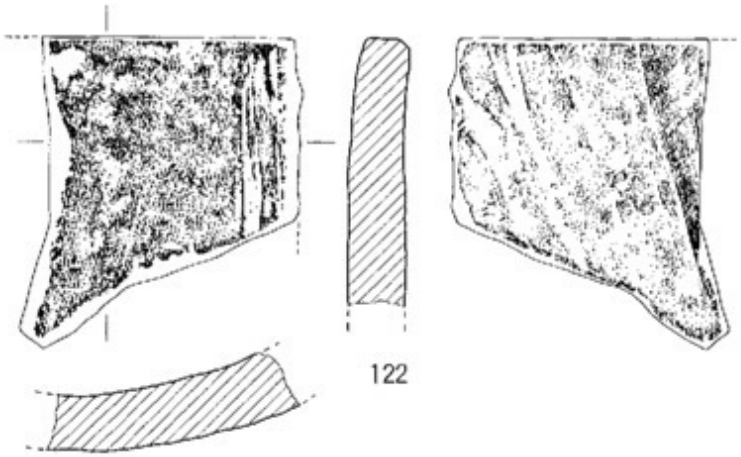
23調査区の南側域から炭化物を伴う土拡が検出、布目瓦も多量に出土した。図示した117～169の布目瓦は、すべてこの土拡から出土したものである。



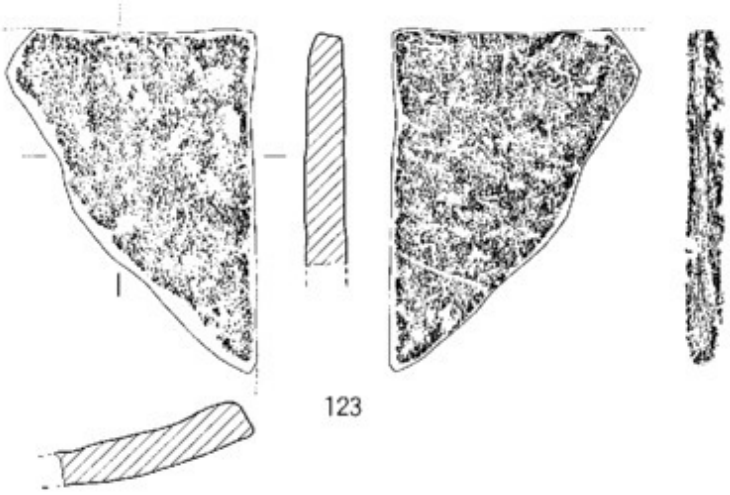
第47図　出土遺物実測図　瓦(1)



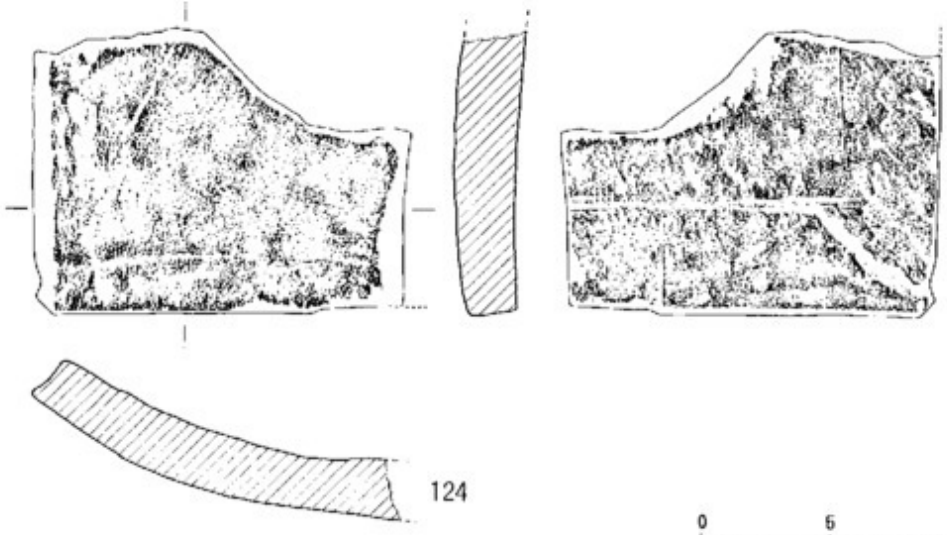
第48図　出土遺物実測図　瓦(2)



122

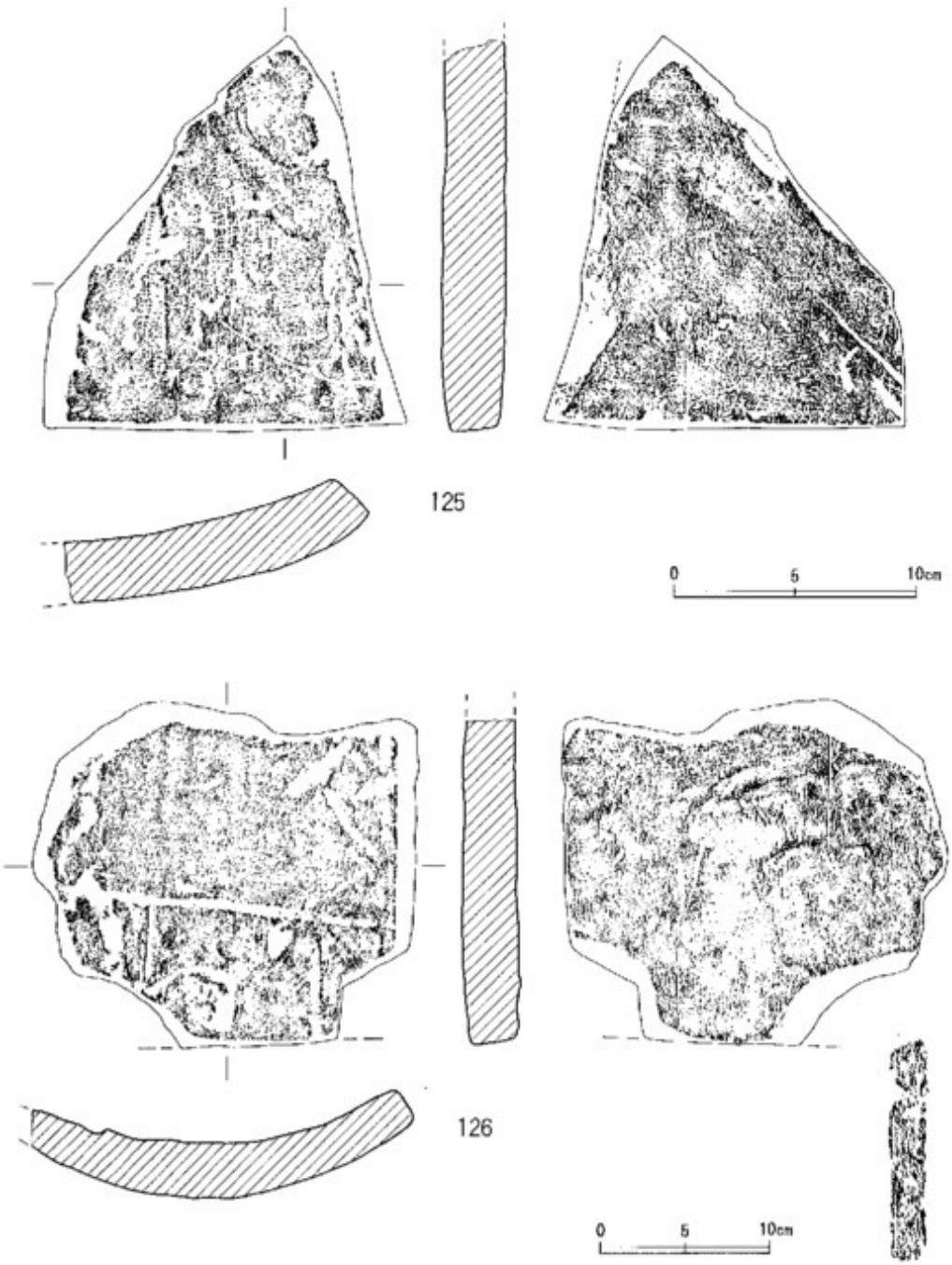


123

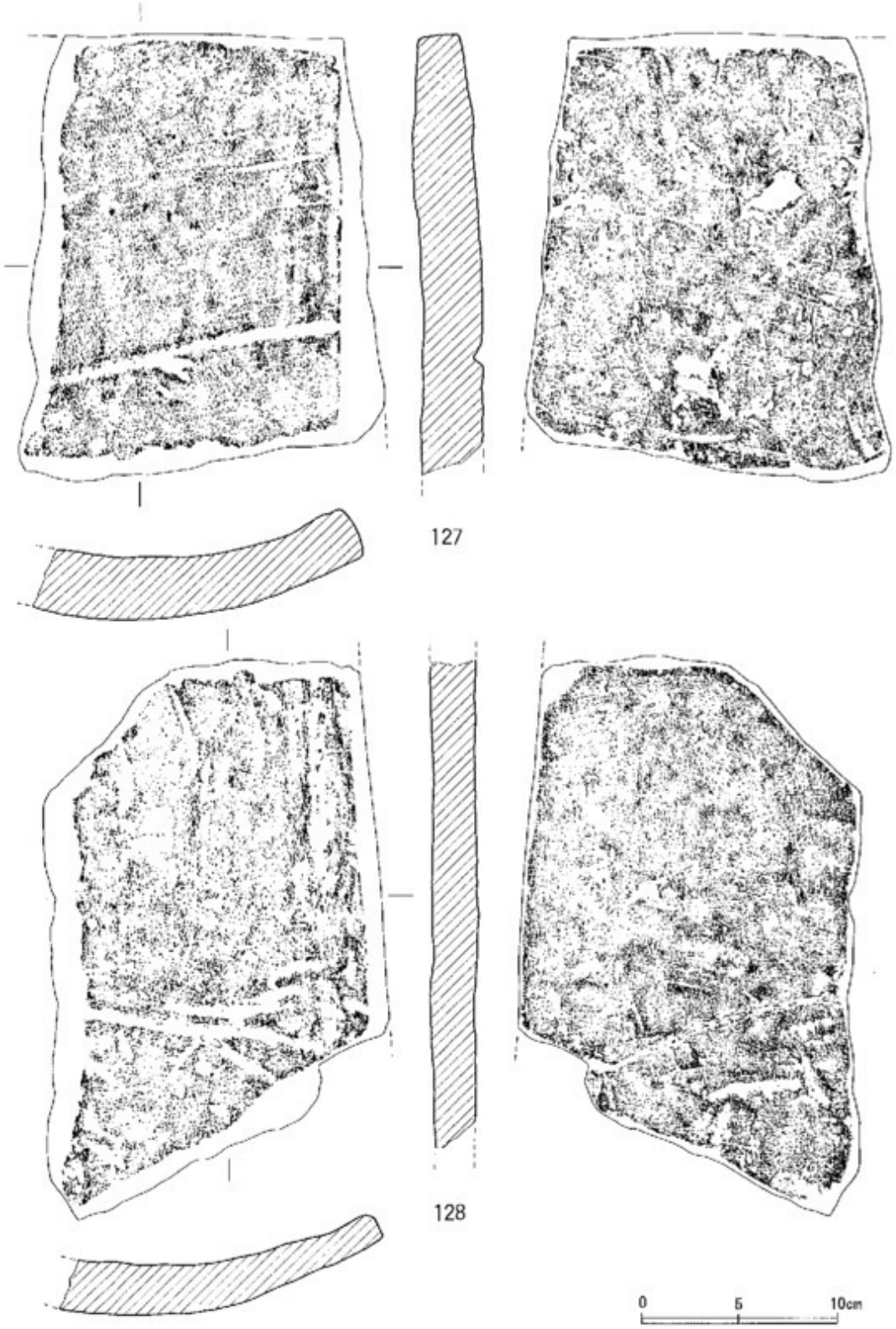


124

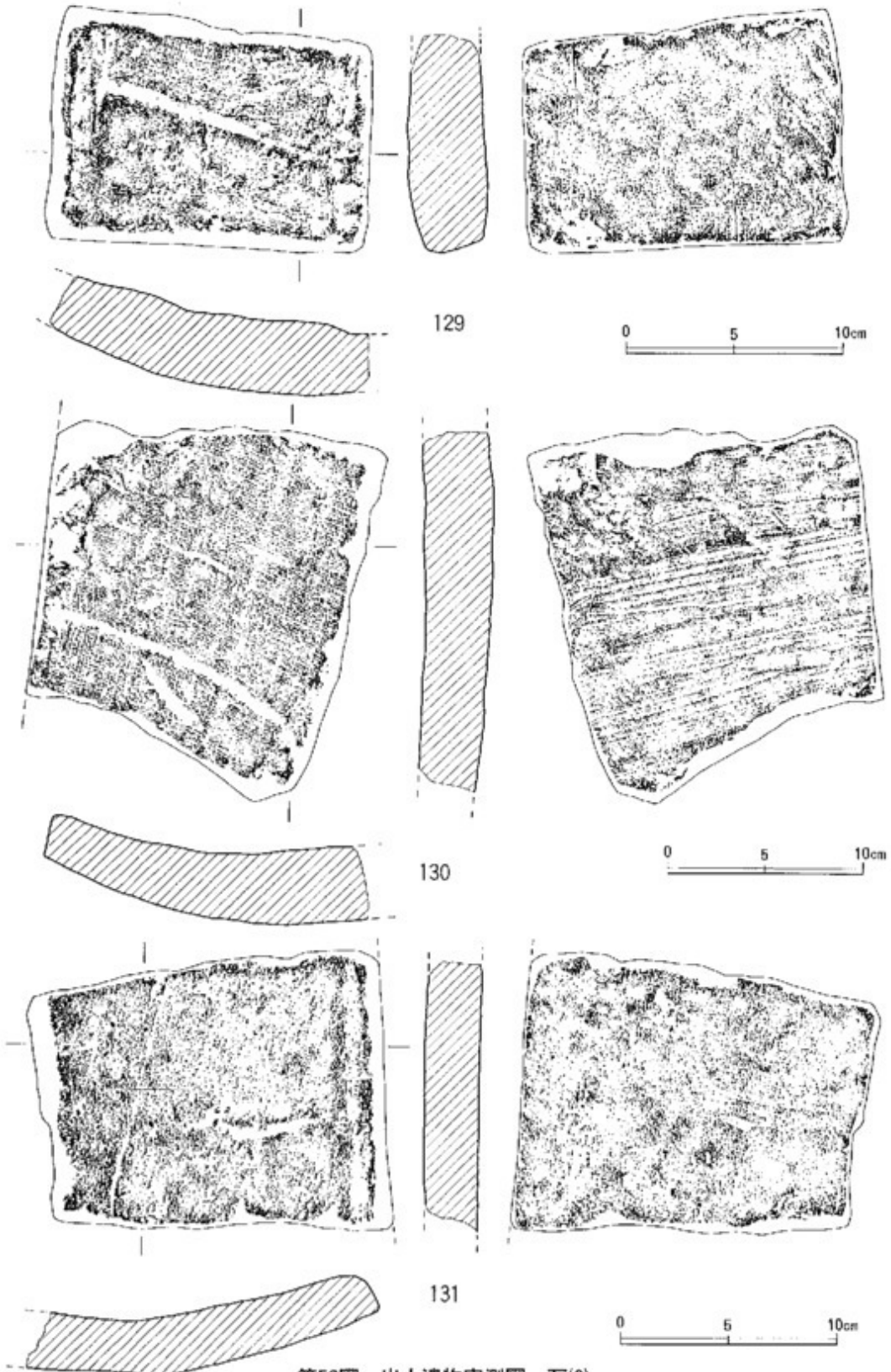
第49図　出土遺物実測図　瓦(3)



第50図　出土遺物実測図　瓦(4)



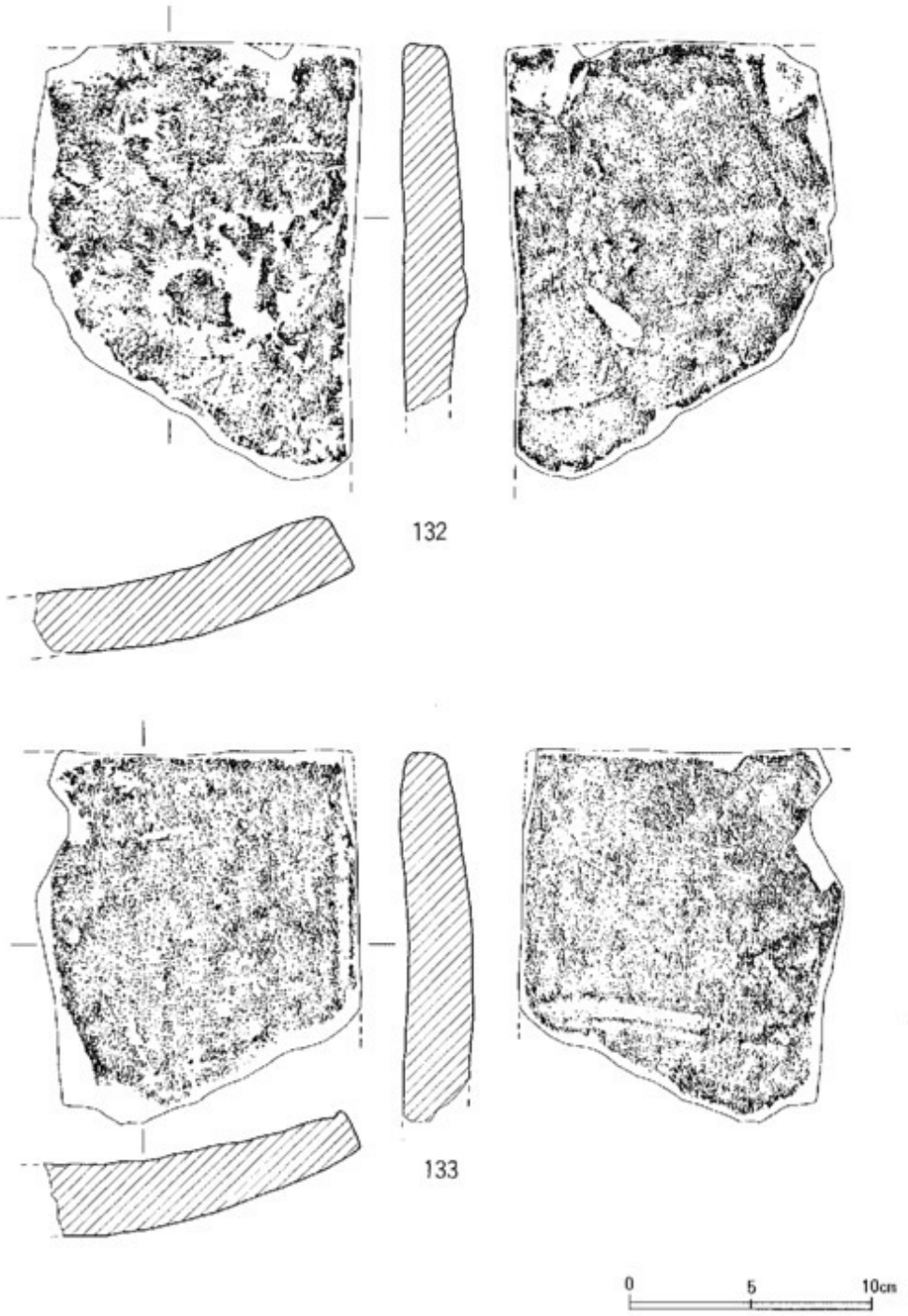
第51図　出土遺物実測図　瓦(5)



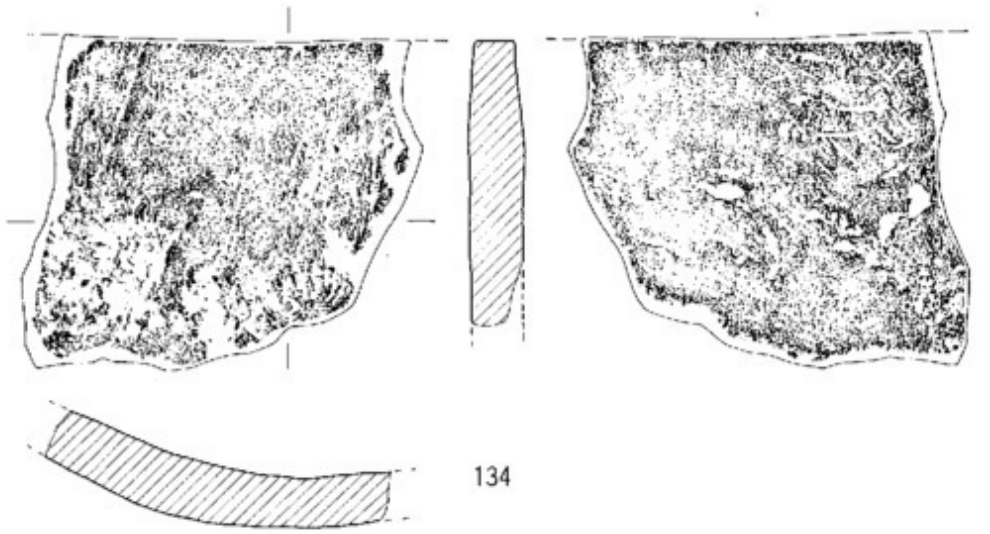
第52図　出土遺物実測図　瓦(6)

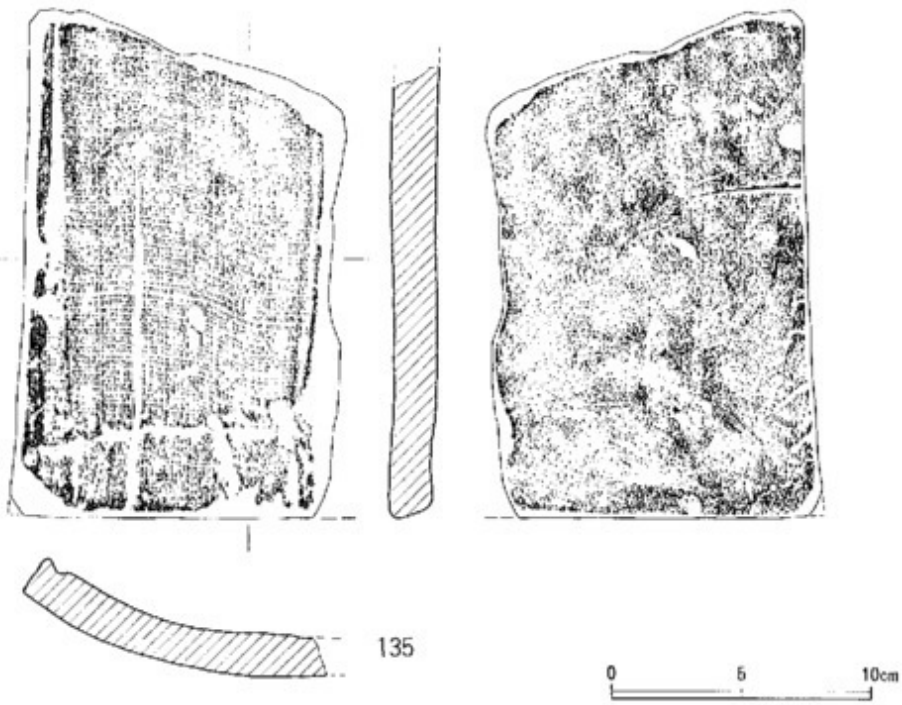
No.	器種	器厚（cm）	重さ(g)	胎土	色調	焼成	調査
117	平瓦	縦位 狭 1.9 広 2.5 横位 中 2.5 側 2.7	555	精良	橙色	硬	〔凹面〕布目。 粘土紐痕(3～5mm幅)。 〔凸面〕ナデ。
118	平瓦	縦位 狭 2.5 広 2.5 横位 中 2.4 側 2.6	781	白色小石 (少量)	橙色	硬	〔凹面〕布目(ローリング)。 粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
119	平瓦	縦位 狭 2.0 広 1.9 横位 中 1.4 側 1.8	739	白色小石 (米粒大) (多量に混入)	灰橙色	やや軟	〔凹面〕布目(ローリング)。 分割界線。模骨痕。 〔凸面〕ナデ。
120	平瓦	縦位 狭 2.4 広 2.1 横位 中 2.7 側 3.0	446	精良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。粘土紐痕(8mm幅)。 側面寄りに1cm幅で 砂が付く。 〔凸面〕ナデ。 端部に2.5cm幅の横ナデ。
121	平瓦	縦位 狭 2.0 広 1.8 横位 中 2.1 側 1.8	335	精良	橙色	硬	〔凹面〕布目(ローリング)。 粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ(小型の凹凸あり)。 凹：4mm　凸：2mm
122	平瓦	縦位 狭 1.9 広 2.2 横位 中 2.1 側 2.5	285	精良	灰色	硬	〔凹面〕布目。 先端部にナデ。
123	平瓦	縦位 狭 1.3 広 1.6 横位 中 1.3 側 1.6	188	精良	灰白褐色	やや軟	〔凹面〕布目(ローリング)。 模骨痕。 〔凸面〕ナデ。
124	平瓦	縦位 狭 2.4 広 2.0 横位 中 2.2 側 1.9	435	鉱物 (少量)	灰白褐色	やや軟	〔凹面〕布目(ローリング)。 粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ(ローリング) 紐痕あり。
125	平瓦	縦位 狭 2.5 広 2.0 横位 中 2.5 側 2.2	600	精良	橙色	硬	〔凹面〕布目。粘土合わせ。 細紐痕。指腹痕。 広端部はナデ。 (炭化物が付着) 〔凸面〕ナデ。
126	平瓦	縦位 狭 2.9 広 3.0 横位 中 3.2 側 2.2	1702	白色小石	褐色	やや硬	〔凹面〕布目(ローリング)。 ナデ。粘土合わせ。 粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
127	平瓦	縦位 狭 2.1 広 3.2 横位 中 3.3 側 2.7	1545	白色小石 (やや多し)	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
128	平瓦	縦位 狭 2.7 広 2.1 横位 中 2.6 側 1.6	1291	鉱物 (少量)	〔凹〕橙色 〔凸〕灰褐色	やや甘い	〔凹面〕布目(ローリング)。 分割界線。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
129	平瓦	縦位 狭 3.3 広 2.9 横位 中 2.6 側 2.7	566	精良	灰色褐色	やや硬	〔凹面〕布目。ナデ。分割界線。 粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
130	平瓦	縦位 狭 3.5 広 3.0 横位 中 3.8 側 2.2	1365	精良	橙色	硬	〔凹面〕布目(ローリング)。 粘土紐痕。 〔凸面〕極浅の条痕。
131	平瓦	縦位 狭 2.5 広 2.5 横位 中 2.6 側 2.2	640	白色粒 (少量)	白色褐色	やや軟	〔凹面〕布目(ローリング)。 模骨痕。細紐痕。 〔凸面〕ナデ。指頭圧痕

第30表　出土遺物観察表　瓦(1)

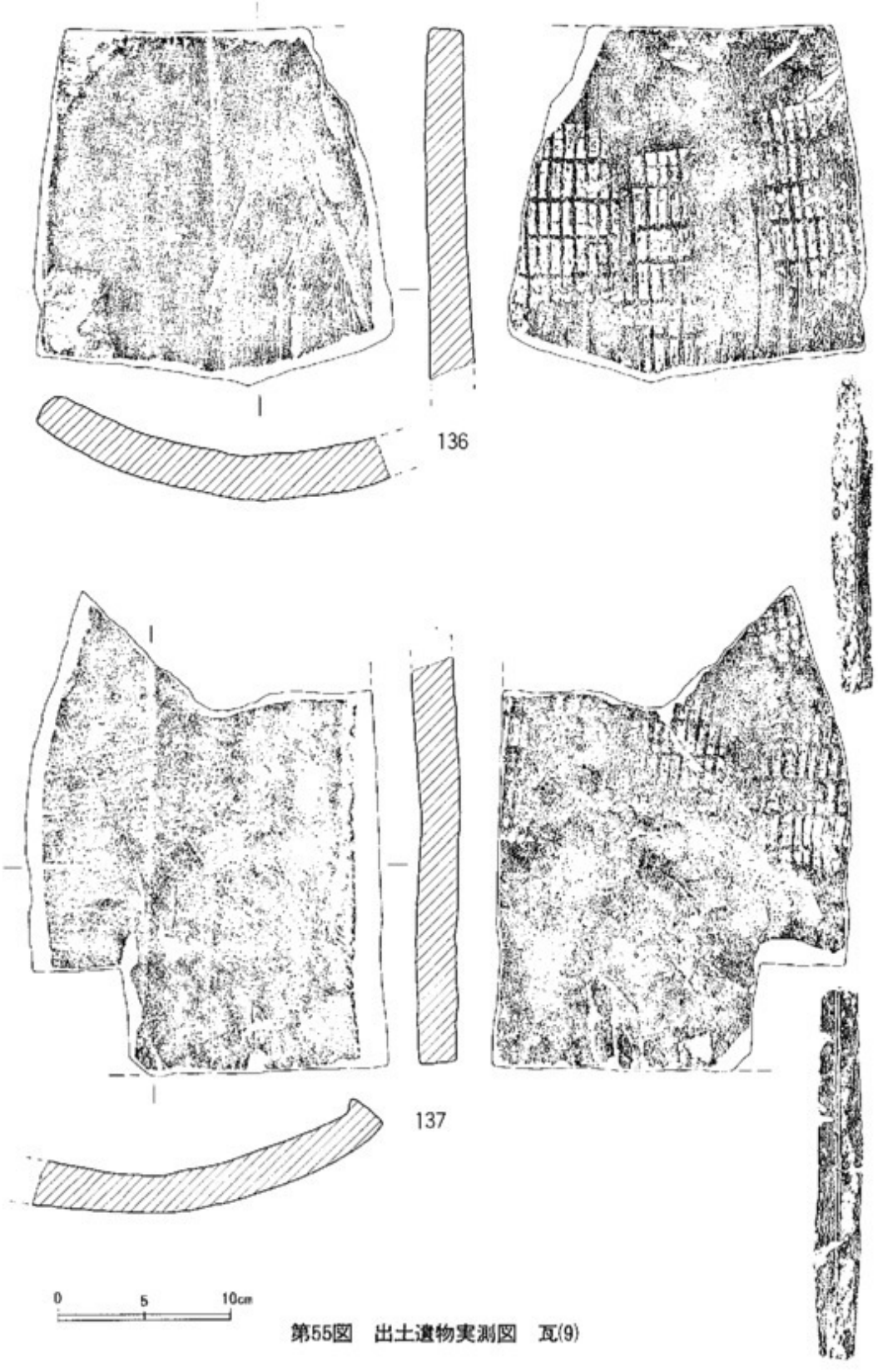


第53図　出土遺物実測図　瓦(7)

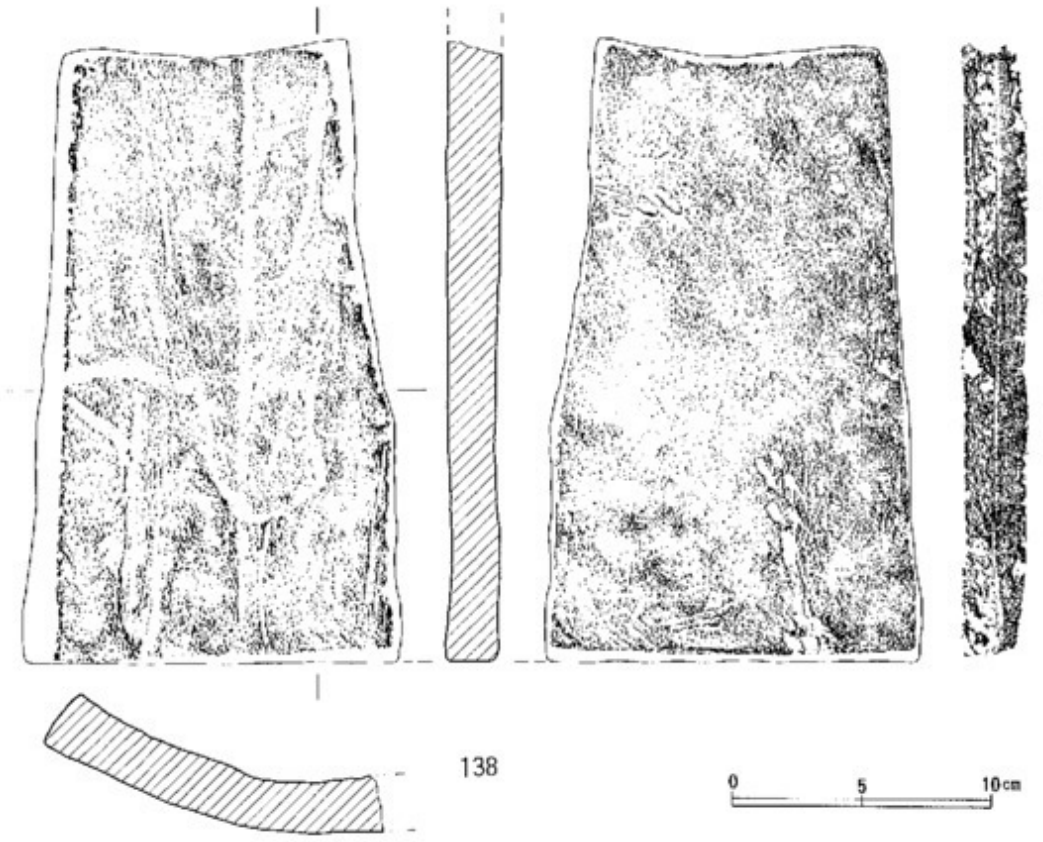


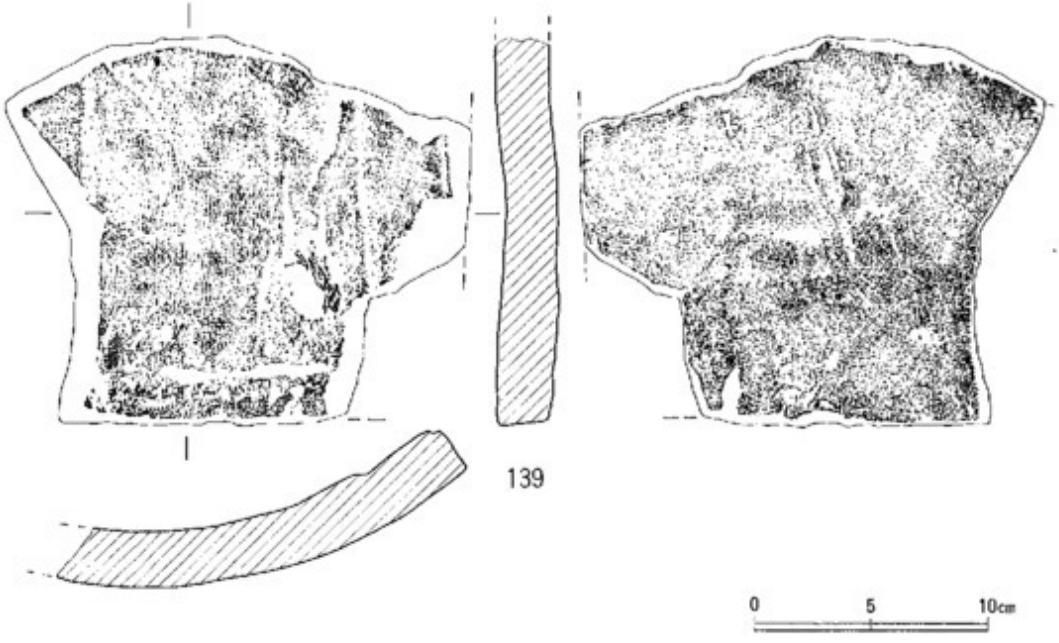


第54図　出土遺物実測図　瓦(8)

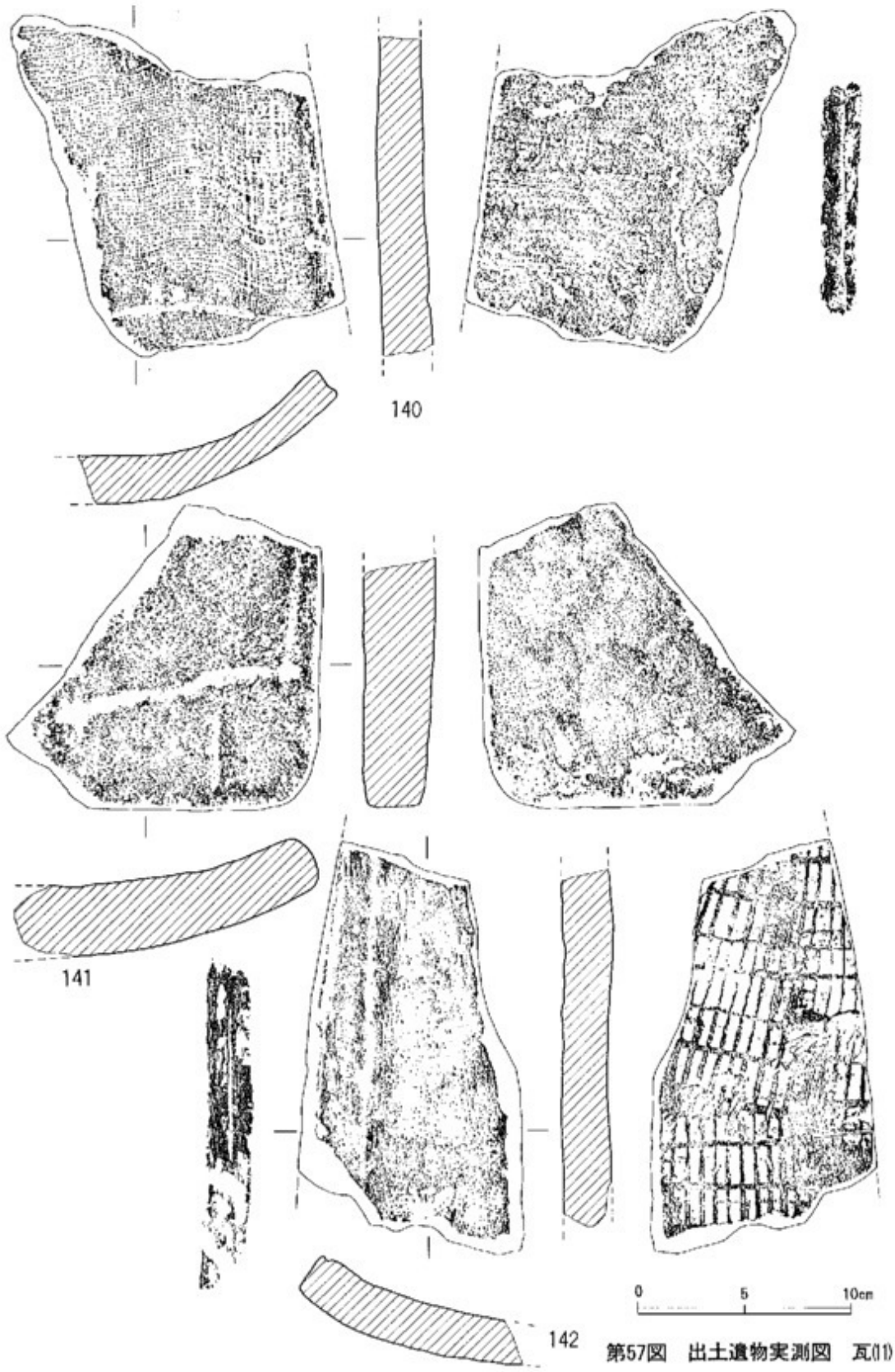


第55図　出土遺物実測図　瓦(9)

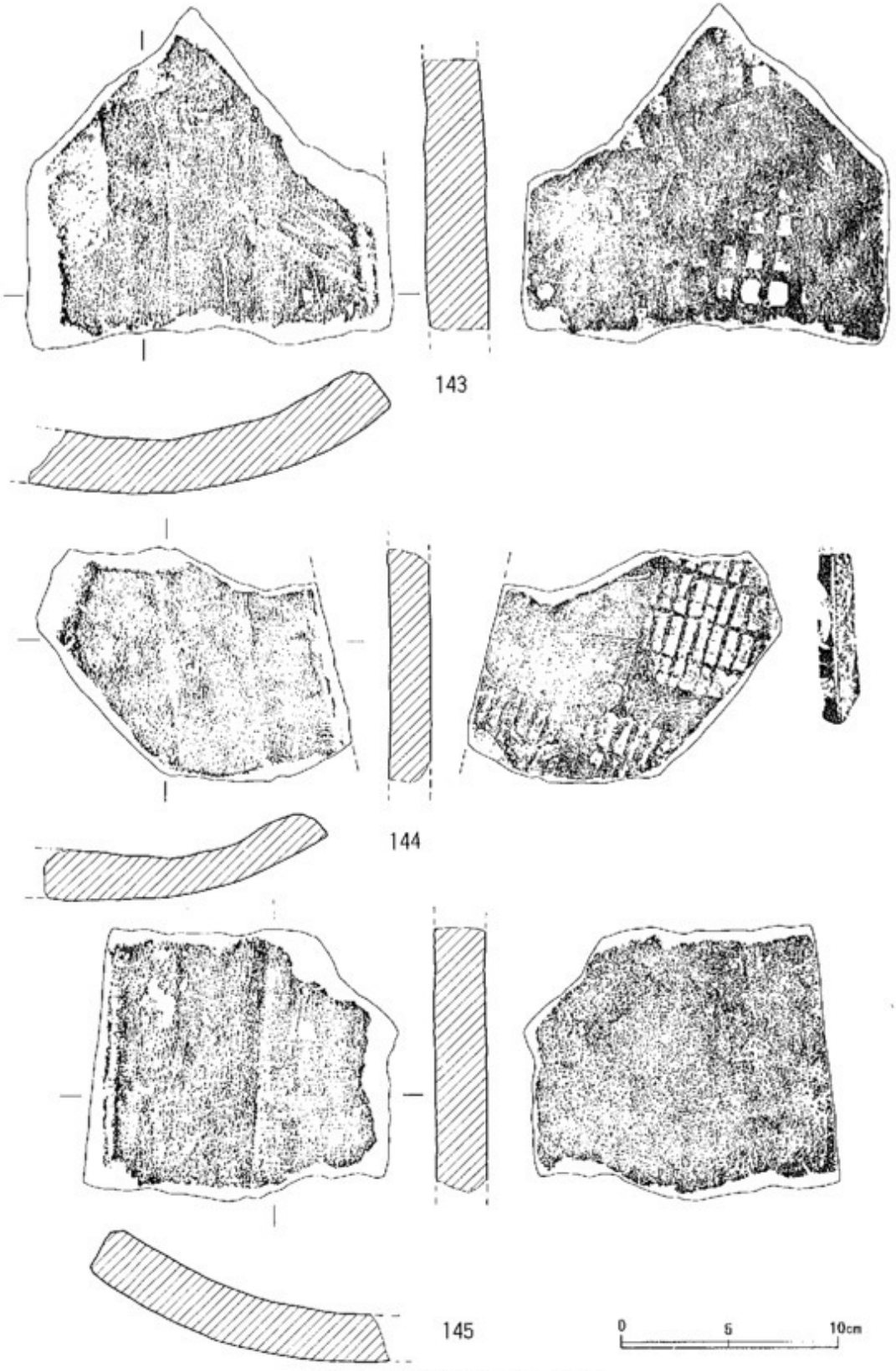




第56図　出土遺物実測図　瓦(10)



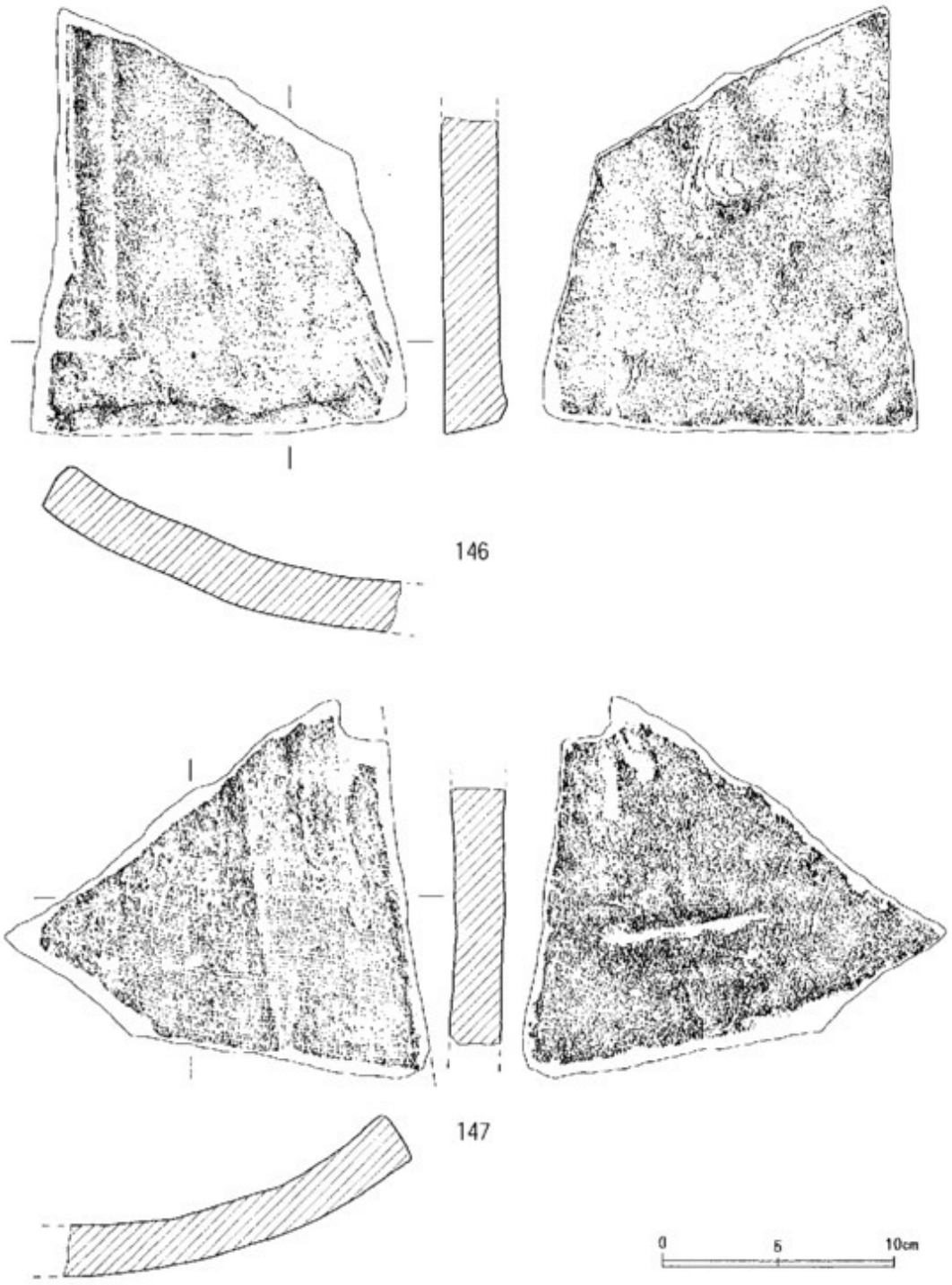
第57図　出土遺物実測図　瓦(1)



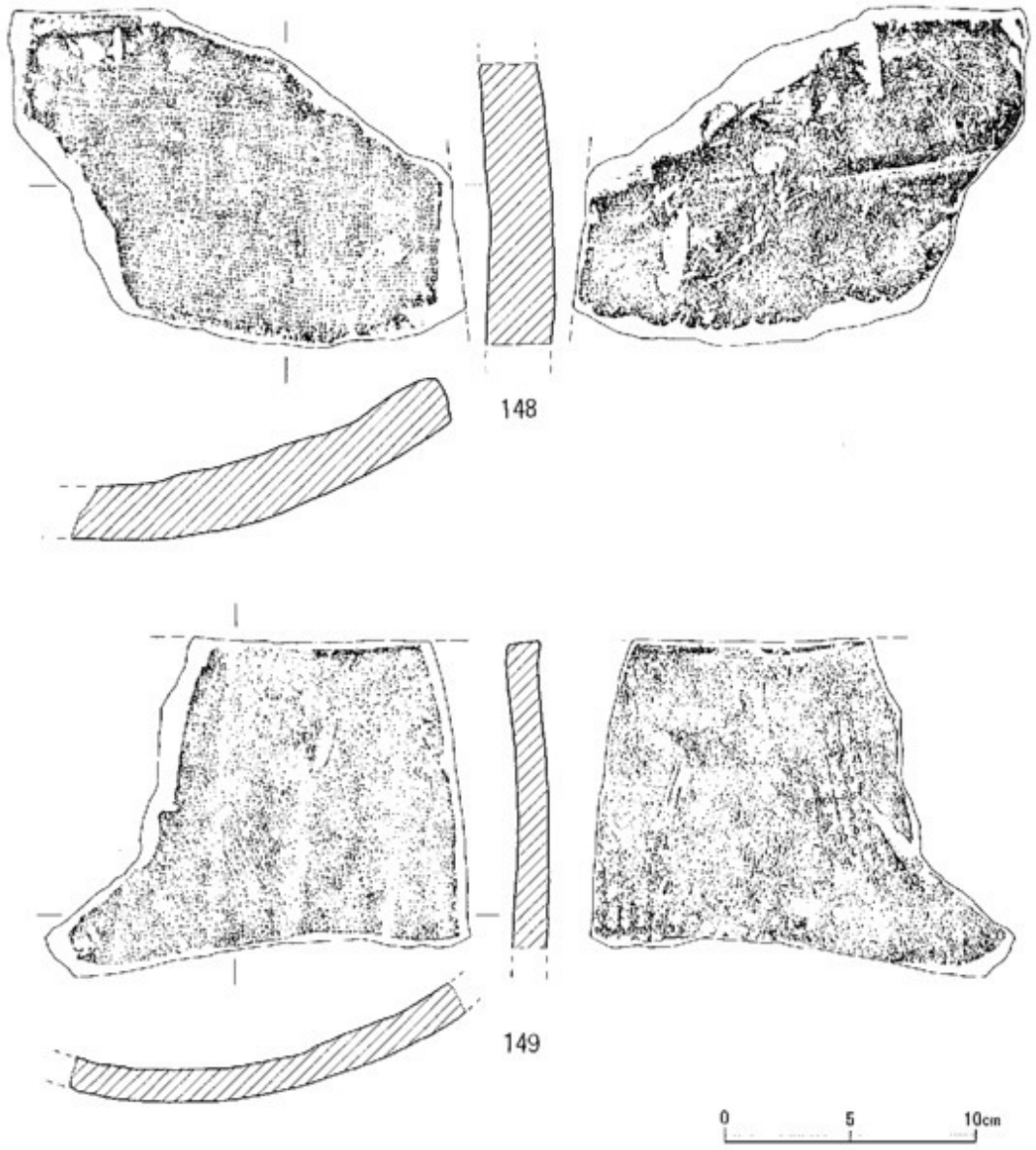
第58図　出土遺物実測図　瓦(12)

No.	器種	器厚（cm）	重さ(g)	胎土	色調	焼成	調査
132	平瓦	縦位 狭 1.7 広 1.8 横位 中 2.6 側 2.5	724	精良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目（ローリング）。粘土合わせ（器面は凹凸）。 〔凸面〕ナデ。
133	平瓦	縦位 狭 1.7 広 2.7 横位 中 2.9 側 1.7	564	白色小石（少量）	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。分割界線。模骨痕 〔凸面〕ナデ。
134	平瓦	縦位 狭 1.6 広 2.1 横位 中 1.9 側 2.0	448	鉱物（少量）	褐色	やや硬	〔凹面〕布目（ローリング）。 〔凸面〕ナデ。
135	平瓦	縦位 狭 1.8 広 1.7 横位 中 1.5 側 1.7	521	精良	灰白褐色	やや硬	〔凹面〕布目。分割界線。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
136	平瓦	縦位 狭 2.0 広 2.6 横位 中 2.7 側 2.2	1497	精良	褐色（一部、灰黒色）	やや硬	〔凹面〕布目。ナデ。模骨痕。 〔凸面〕格子目叩き（短冊型）。凹：5mm×2cm 凸：横4mm、縦4mm 〔側面〕破面。
137	平瓦	縦位 狭 2.4 広 2.2 横位 中 2.2 側 2.3	1724	精良	灰色	硬	〔凹面〕布目。分割界線。模骨痕 〔凸面〕格子目叩き（短冊型）。凹：4mm×1.1～1.8cm 凸：横4mm、縦3mm 〔側面〕破面。
138	平瓦	縦位 狭 2.1 広 2.1 横位 中 2.2 側 2.4	1091	精良	灰白	硬	〔凹面〕布目。ナデ。模骨痕。 〔凸面〕ナデ（丁寧）。 〔側面〕破面。
139	平瓦	縦位 狭 2.3 広 2.2 横位 中 2.4 側 2.4	942	精良	灰白	硬	〔凹面〕布目。模骨痕 粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
140	平瓦	縦位 狭 1.9 広 2.3 横位 中 2.2 側 1.7	518	白色小石（多量）	灰色	硬	〔凹面〕布目。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。器面はヒビ割れ。
141	平瓦	縦位 狭 3.4 広 2.4 横位 中 3.3 側 2.5	812	白色小石（多量）	灰褐色	やや軟（凹面はやや硬）	〔凹面〕布目（ローリング）。粘土紐痕。器面はザラザラの状態。 〔凸面〕ナデ。
142	平瓦	縦位 狭 2.3 広 2.3 横位 中 2.0 側 2.1	509	精良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。分割界線。タル板の形が押型として残る。 〔凸面〕格子目叩き（短冊型）。凹：4mm×1.6cm 凸：横4mm、縦3mm 〔側面〕破面。
143	平瓦	縦位 狭 2.6 広 2.7 横位 中 2.7 側 2.5	700	精良	灰褐色	やや軟	〔凹面〕布目。分割界線。 〔凸面〕格子目叩き（短冊型）。凹：7mm×1cm 凸：横7mm、縦10mm
144	平瓦	縦位 狭 2.0 広 1.9 横位 中 2.4 側 1.6	334	精良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。模骨痕。 〔凸面〕格子目叩き（短冊型）。凹：5mm×1.7cm 凸：横4mm、縦2mm 〔側面〕破面。
145	平瓦	縦位 狭 2.3 広 2.3 横位 中 2.2 側 2.5	609	白色小石（多量）	灰褐色	やや軟	〔凹面〕布目。模骨痕。器面はザラザラの状態。 〔凸面〕ナデ。

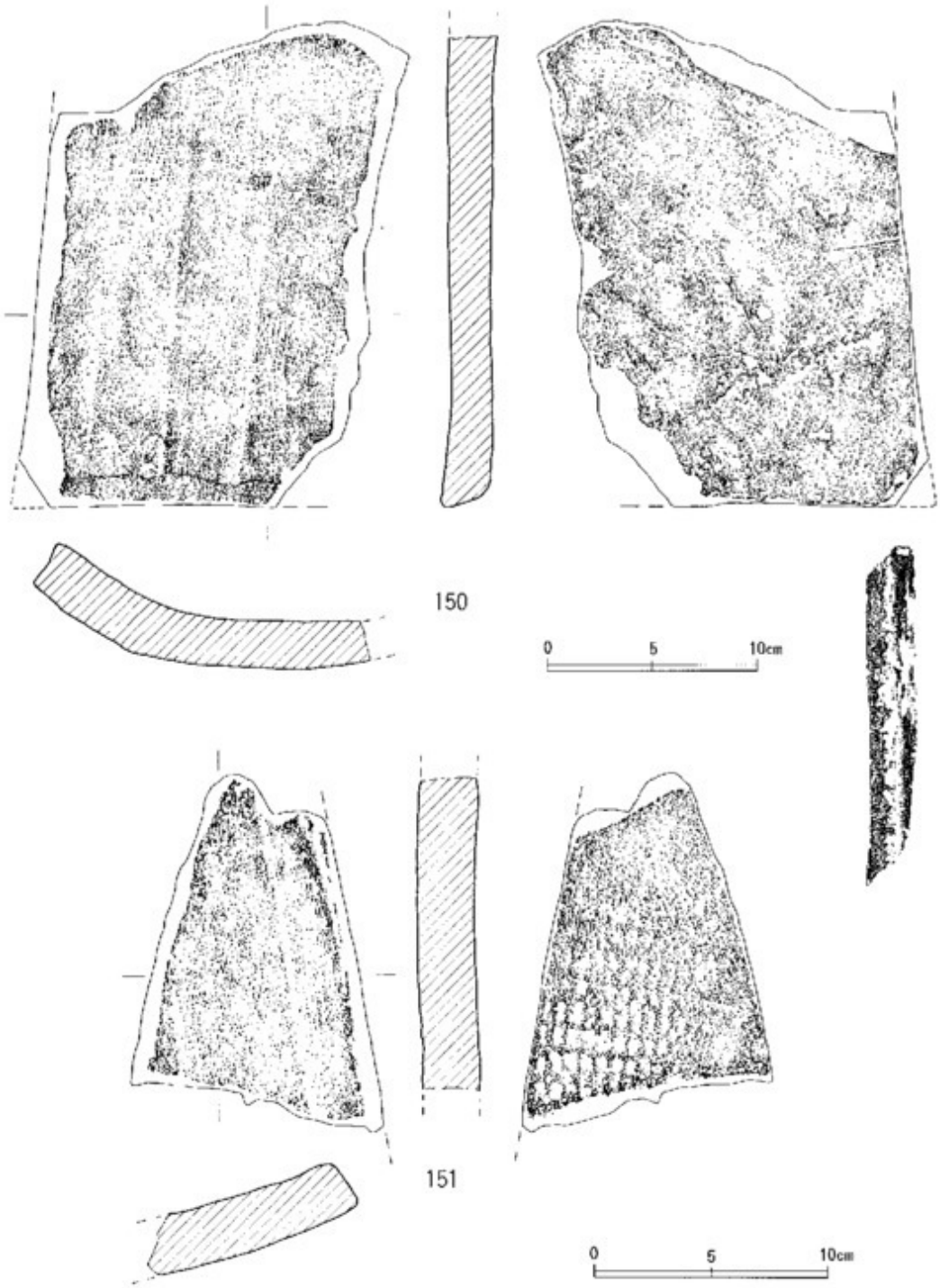
第31表　出土遺物観察表　瓦(2)



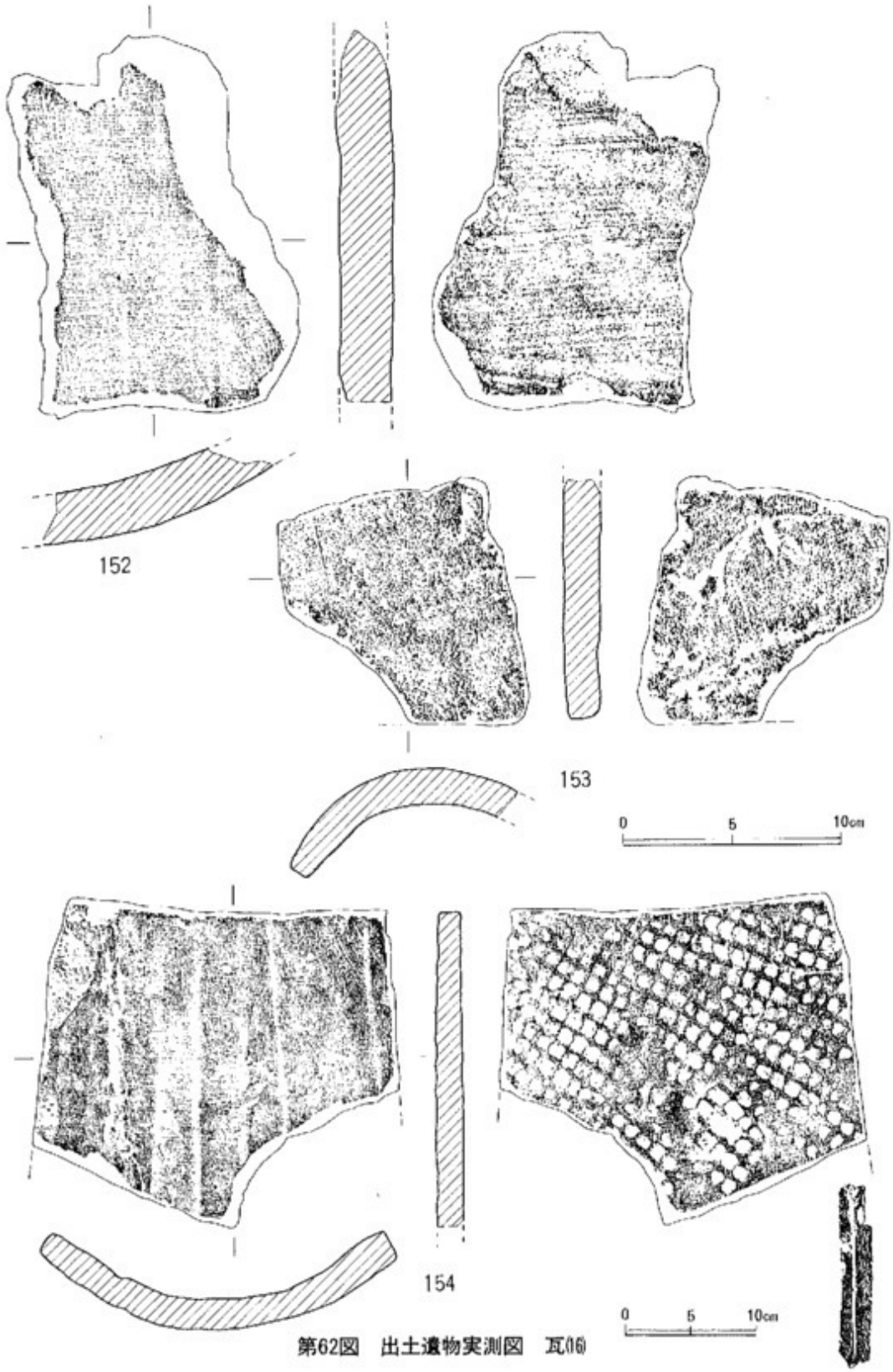
第59図　出土遺物実測図　瓦(13)



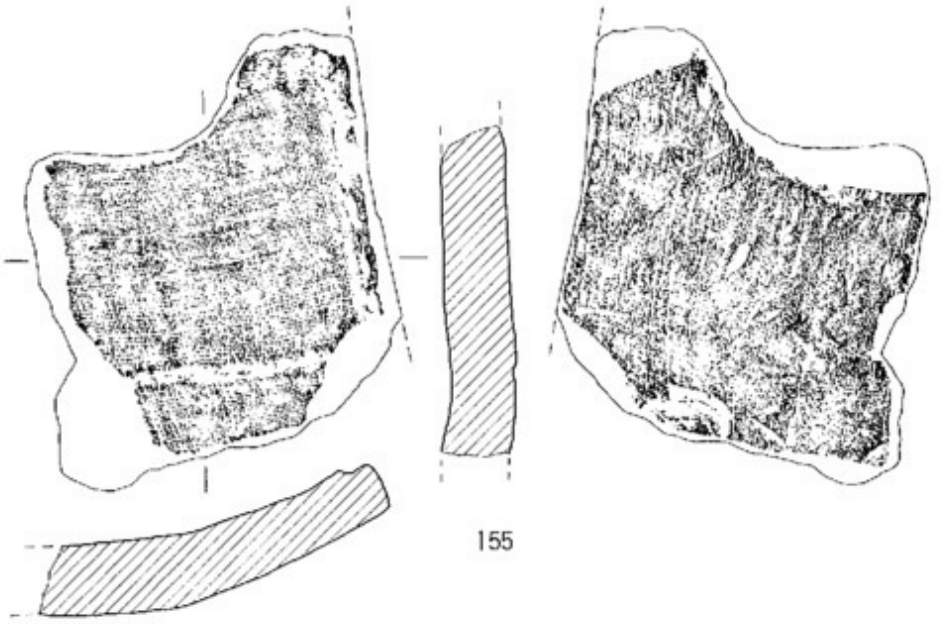
第60図　出土遺物実測図　瓦(14)

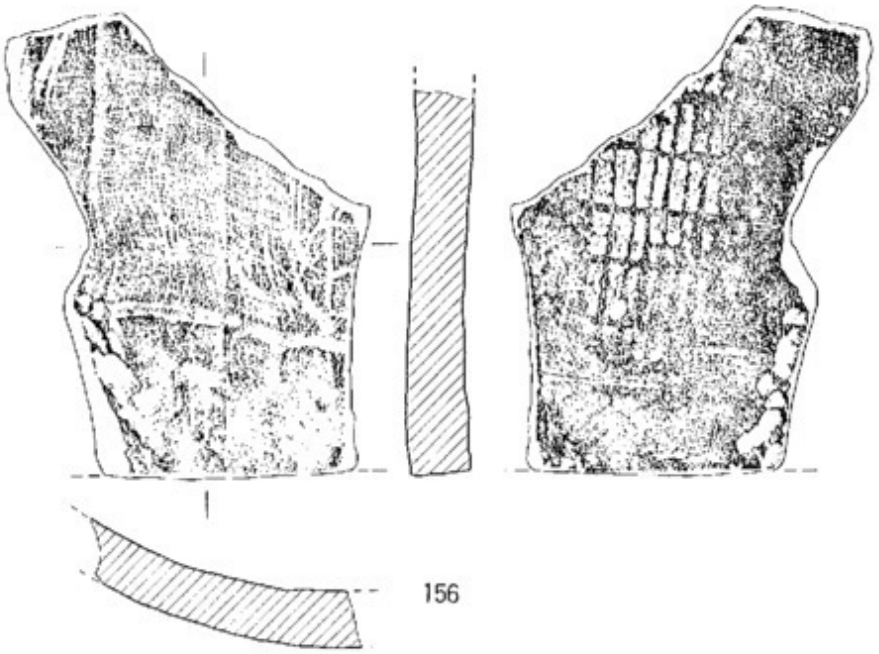


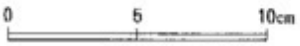
第61図　出土遺物実測図　瓦(15)



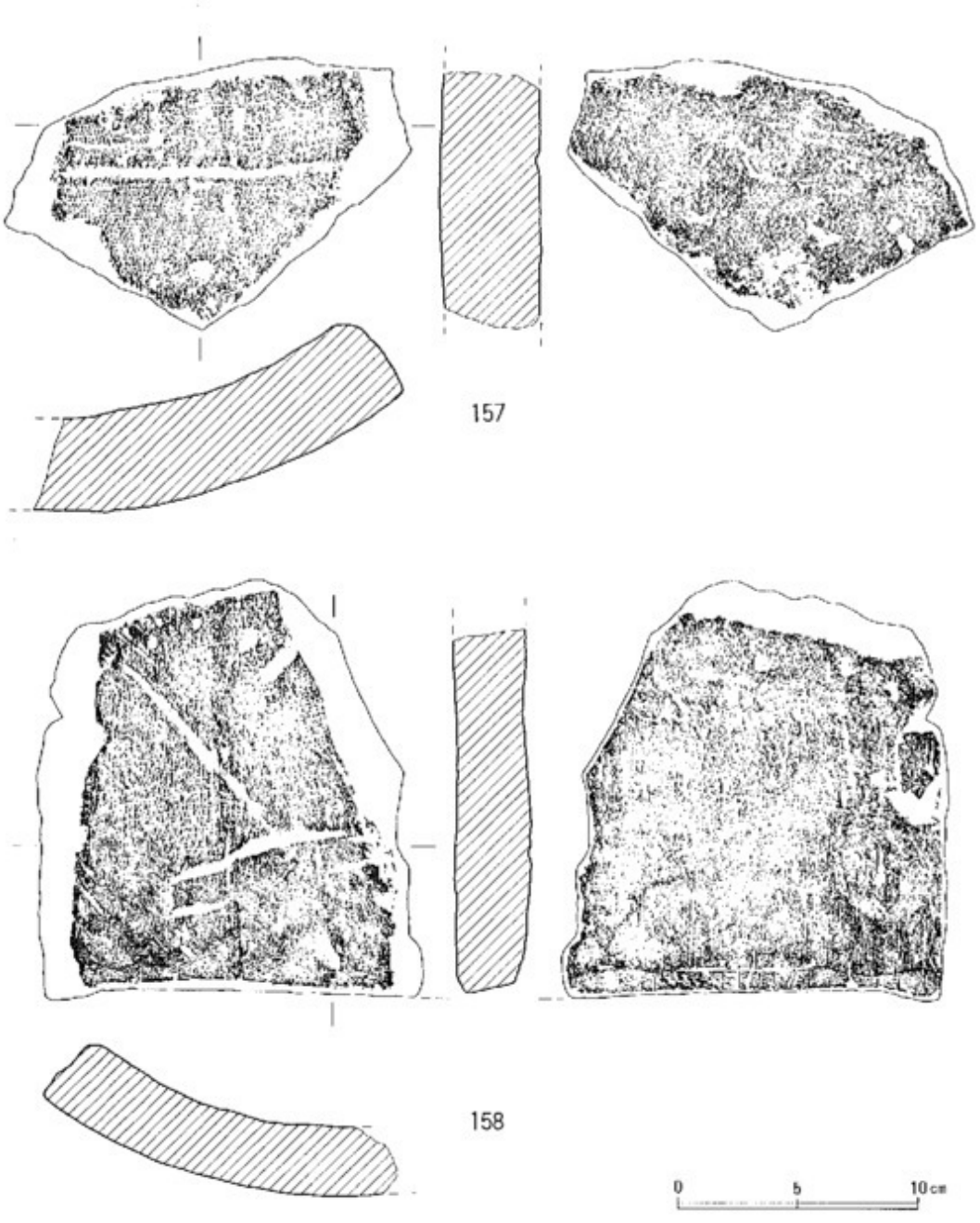
第62図　出土遺物実測図　瓦(6)



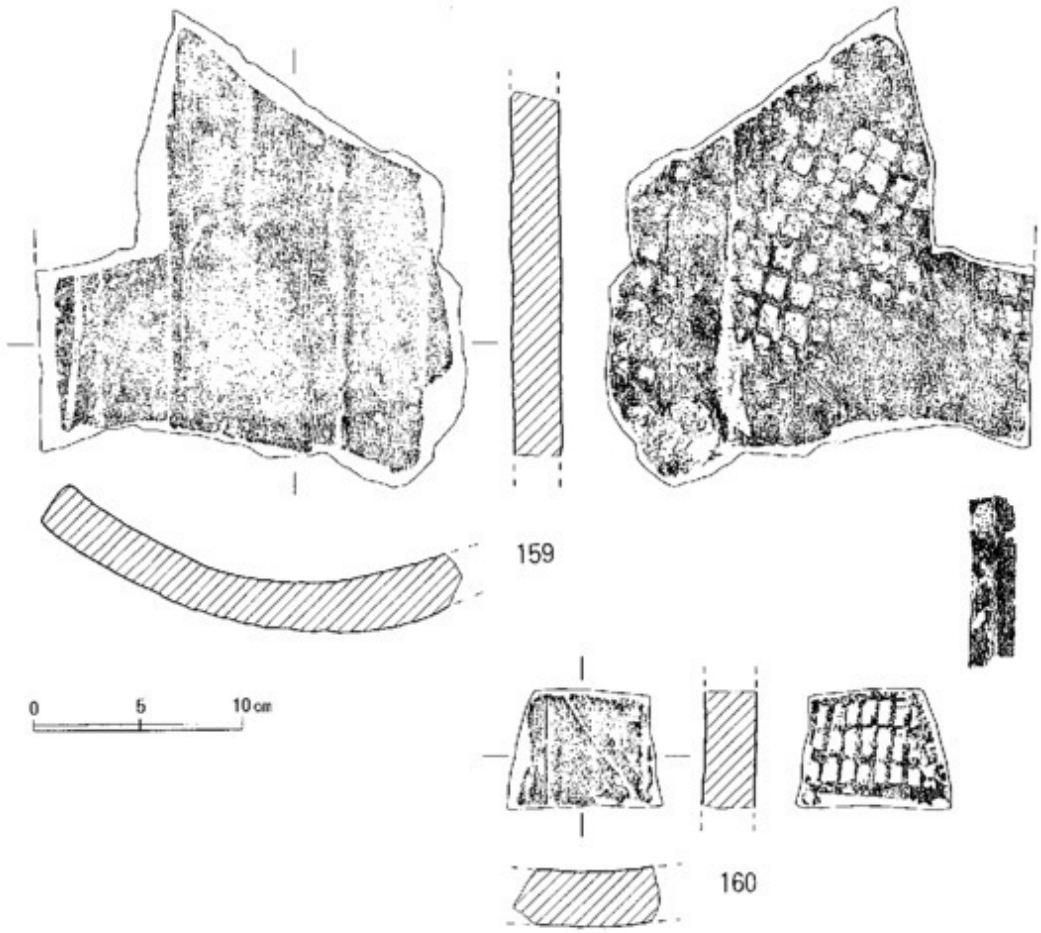


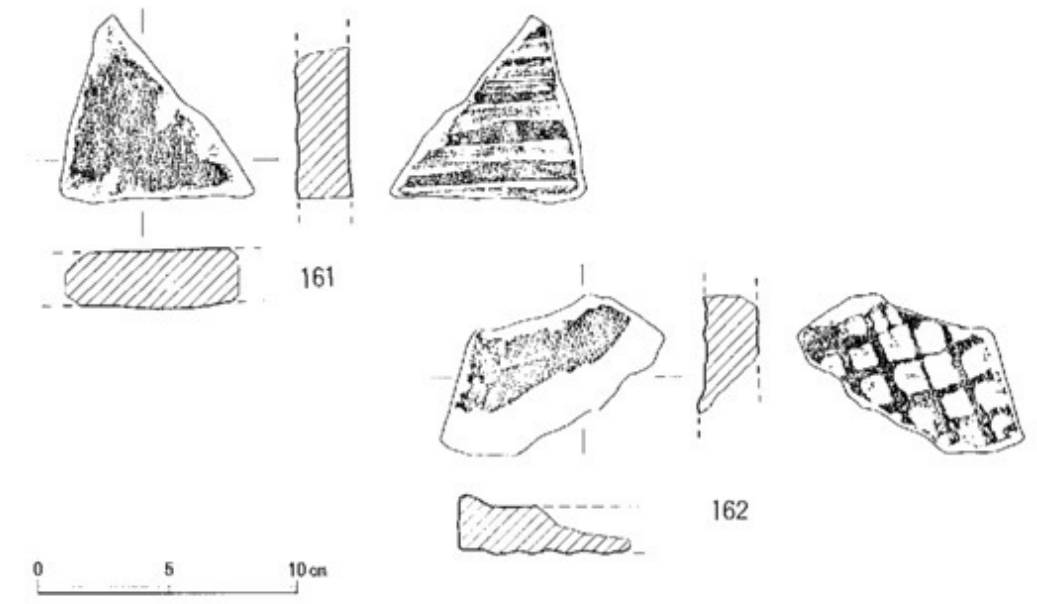


第63図　出土遺物実測図　瓦(17)



第64図　出土遺物実測図　瓦(8)

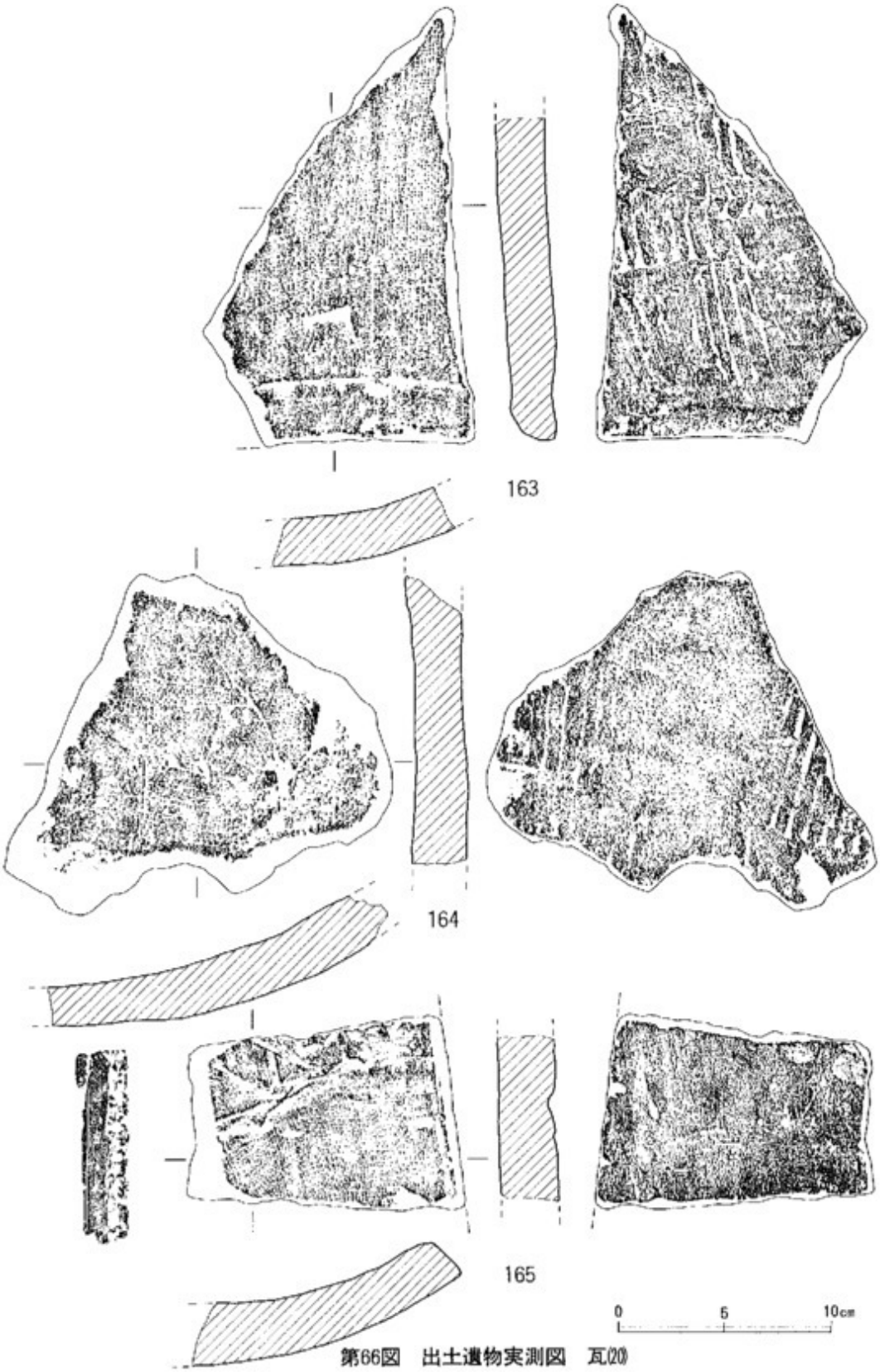




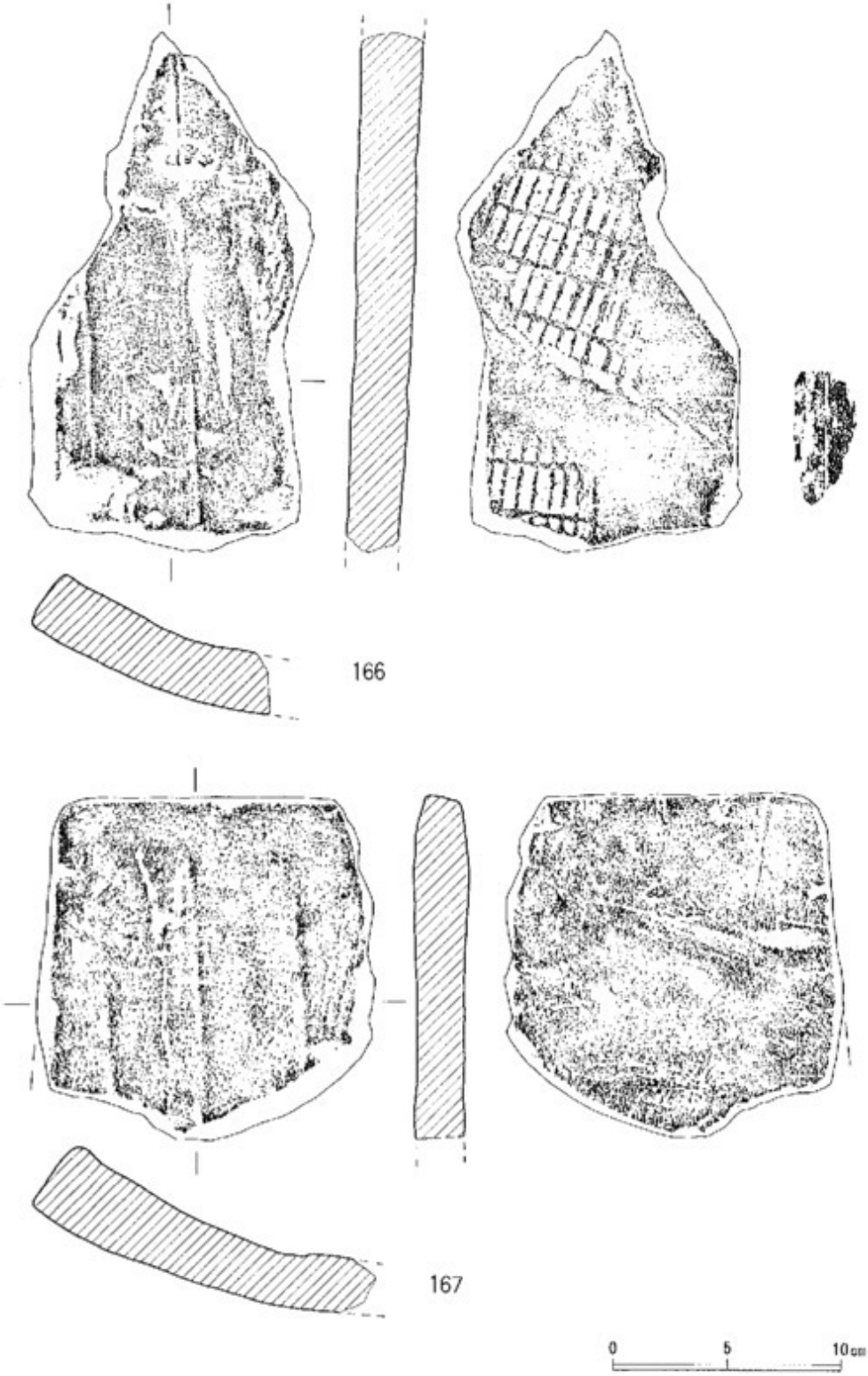
第65図　出土遺物実測図　瓦(19)

No.	器種	器厚(cm)	重さ(g)	胎土	色調	焼成	調査
146	平瓦	縦位 狭 2.4 広 2.7 横位 中 2.2 側 2.2	882	精良	灰色	硬	〔凹面〕布目。横骨痕。 端部はヘラ削り。 〔凸面〕ナデ。
147	平瓦	縦位 狭 2.3 広 2.2 横位 中 2.2 側 2.3	653	鉱物(少量)	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。横骨痕。 〔凸面〕ナデ。
148	平瓦	縦位 狭 2.4 広 2.6 横位 中 2.1 側 2.0	550	精良	白褐色 薄桃色	やや硬	二次焼成。 〔凹面〕布目。横骨痕。 〔凸面〕ナデ。
149	平瓦	縦位 狭 1.3 広 1.3 横位 中 1.2 側 1.4	374	精良	灰色	硬	〔凹面〕布目。 〔凸面〕ナデ。
150	平瓦	縦位 狭 2.3 広 2.2 横位 中 2.0 側 2.4	1269	精良	灰色	硬	〔凹面〕布目。端部はヘラ削り。 〔凸面〕ナデ(やや粗い)
151	平瓦	縦位 狭 2.5 広 2.5 横位 中 2.5 側 2.0	418	鉱物(少量)	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。横骨痕。 〔凸面〕ナデ。
152	平瓦	縦位 狭 2.6 広 2.4 横位 中 2.3 側 2.2	573	白色小石(やや多し)	茶褐色	硬	〔凹面〕布目。横骨痕。 〔凸面〕ナデ(横方向)。
153	丸瓦	縦位 狭 1.7 広 1.5 横位 中 1.6 側 1.1	238	精良	灰白褐色	やや軟	〔凹面〕ナデ 〔凸面〕ナデ(ローリング)。
154	平瓦	縦位 狭 1.8 広 2.0 横位 中 2.4 側 2.7	1986	精良	灰白褐色	やや硬	〔凹面〕ナデ。横骨痕。 〔凸面〕格子目叩き(方形)。 凹:1.1cm×1.1cm 凸:横4mm、縦4mm
155	平瓦	縦位 狭 2.7 広 2.5 横位 中 2.7 側 1.9	580	精良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目(後、強いナデ)。 横骨痕。 〔凸面〕ナデ。
156	平瓦	縦位 狭 2.2 広 2.4 横位 中 2.3 側 1.9	598	精良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。横骨痕。 〔凸面〕格子目叩き(短冊型)。 凹:5mm×2.1cm 凸:横2mm、縦1.5mm
157	平瓦	縦位 狭 4.1 広 4.1 横位 中 3.9 側 4.0	696	白色小石	灰白褐色	やや軟	〔凹面〕布目。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
158	平瓦	縦位 狭 3.0 広 2.1 横位 中 3.0 側 2.9	893	白色小石(少量)	灰色 〔内〕黒灰色	硬	〔凹面〕布目。強いナデ。 粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。(極細の縦ヒビ割れ線が入る) 広端部は横方向のヘラ削り)
159	平瓦	縦位 狭 2.2 広 2.3 横位 中 2.3 側 2.3	1055	精良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。極細の縦線(5本) 〔凸面〕格子目叩き(方形)。 凹:1cm×1cm 凸:横5mm、縦4mm 〔側面〕破面。
160	平瓦	縦位 狭 2.0 広 2.0 横位 中 2.1 側 2.1	77	精良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。 〔凸面〕格子目叩き(小型短冊型)。 凹:3mm×8mm 凸:横2mm、縦3mm

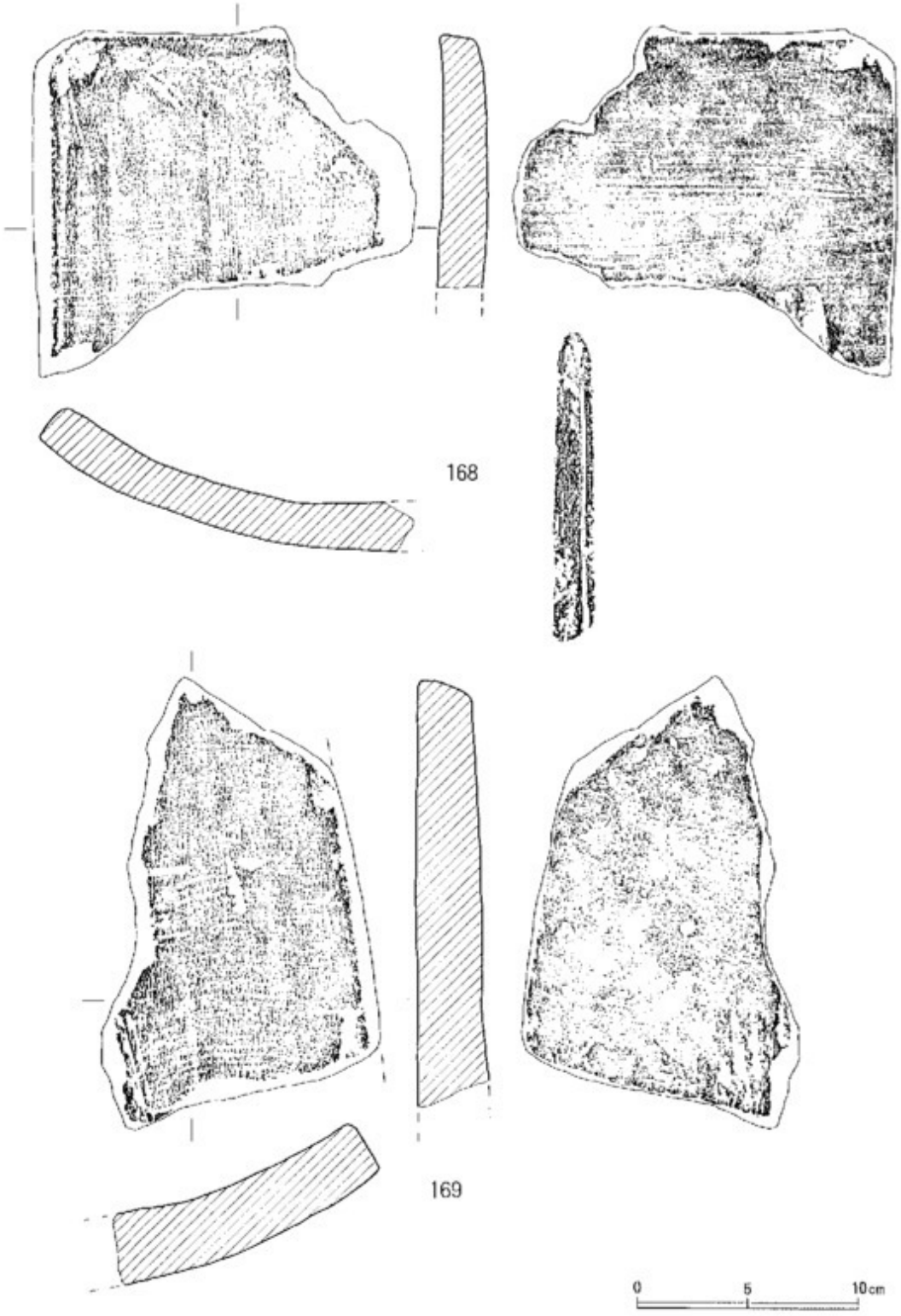
第32表　出土遺物観察表　瓦(3)



第66図　出土遺物実測図　瓦(2)



第67図　出土遺物実測図　瓦(21)



第68図　出土遺物実測図　瓦(2)

No.	器　種	器厚（cm）	重さ(g)	胎　土	色　調	焼　成	調　　査
161	平瓦	縦位 狭 2.0 広 2.0 横位 中 2.2 側 2.2	87	鉱物 (少量)	褐色	やや硬	〔凹面〕布目(ローリング)。 分割界線。 〔凸面〕深目の条痕。 凸：7㎜、凹：7㎜
162	平瓦	縦位 狭 2.1 広 2.1 横位 中 2.2 側 2.2	72	鉱物 (少量)	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。 〔凸面〕格子目叩き(方形)。 凹：9㎜×1.2cm 凸：横5㎜、縦4㎜
163	平瓦	縦位 狭 2.3 広 2.0 横位 中 2.1 側 2.1	560	鉱物 (少量)	橙色	硬	〔凹面〕布目(ローリング)。 布端痕。 〔凸面〕ナデ。 極細縦線(8㎜間隔)。
164	平瓦	縦位 狭 2.4 広 2.6 横位 中 1.8 側 2.6	543	精　良	灰褐色	やや軟	〔凹面〕布目。模骨痕。 〔凸面〕ナデ。 極細縦線(7～10㎜間隔) 溝の深さ1㎜未満。
165	平瓦	縦位 狭 2.6 広 2.6 横位 中 2.9 側 2.0	380	精　良	〔凹〕褐色 〔凸〕灰褐色	やや硬	〔凹面〕布目。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
166	平瓦	縦位 狭 2.7 広 2.3 横位 中 2.6 側 2.7	699	精　良	白褐色	やや硬	〔凹面〕布目(ローリング)。 模骨痕。 〔凸面〕格子目叩き(大型短冊型) 凹：4㎜×2cm 凸：横2㎜、縦2.5㎜
167	平瓦	縦位 狭 1.6 広 2.1 横位 中 2.4 側 4.3	783	精　良	灰褐色	やや軟	〔凹面〕布目(ローリング)。 模骨痕。 〔凸面〕ナデ。
168	平瓦	縦位 狭 1.6 広 2.1 横位 中 2.2 側 2.1	640	精　良	灰褐色	やや軟	〔凹面〕布目。模骨痕。 〔凸面〕ナデ。横線の条痕。
169	平瓦	縦位 狭 2.4 広 3.2 横位 中 3.2 側 2.6	859	精　良	褐色	やや硬	〔凹面〕布目。模骨痕。 〔凸面〕ナデ。爪先痕。

第33表　出土遺物観察表　瓦(4)

〔第15次調査で出土した布目瓦の分類〕

〔単位：mm〕

分類	細分類	実測図 No.	凹　面	凸　面	幅	間　隔	深　さ
Ⅰ類	Ⅰa	154	11×11	4×4			
		159	10×10	5×4			
		162	9×12	5×4			
		170	9× 9	5×4			
	Ⅰb	出土例なし。					
	Ⅰc	121	4× 4	2×2			
	Ⅰd	136	5×20	4×4			
		137	4×11～18	4×3			
		142	4×16	4×3			
		144	5×17	4×2			
		156	5×21	2×1.5			
		166	4×20	2×25			
	Ⅰe	143	7×10	7×10			
	Ⅰf	160	3× 8	2× 3			
Ⅱ類	Ⅱa	出土例なし。					
	Ⅱb	出土例なし。					
	Ⅱc	124・131					
	Ⅱd	出土例なし。					
	Ⅱe	163			－	8	－
		164			－	7～10	1（未満）
	Ⅱf	161			7	7	－
Ⅲ類	出土例なし。						
Ⅳ類	Ⅳa	出土例なし。					
	Ⅳb	117～120　122・123　125～129　132～135　138～141					
		145～153　155・157・158・165　167～169					

第35表　第15次調査出土布目瓦分類表

〔瓦の分類〕

布目瓦については、調整方法によって、第13次調査から下記の様に分類している。

分類	調整方法	細分類	形状
Ⅰ類	格子叩き目	Ⅰa	大型の方形
		Ⅰb	中型の方形
		Ⅰc	小型の方形
		Ⅰd	大型の短冊形
		Ⅰe	中型の短冊形
		Ⅰf	小型の短冊形
Ⅱ類	条痕	Ⅱa	横方向で、深く明確な条痕
		Ⅱb	縦方向で、深く明確な条痕
		Ⅱc	浅い条痕で、ナデにより単位不明のもの
		Ⅱd	浅い条痕で単位がわかり、幅が狭く、間隔の広いもの
		Ⅱe	浅い条痕で単位がわかり、幅が広く、間隔の狭いもの
		Ⅱf	浅い条痕で単位がわかり、幅と間隔が広いもの
Ⅲ類	縄目		
Ⅳ類	調整により叩き目が消去されている	Ⅳa	滑らかな器面
		Ⅳb	帯状の圧痕が付く

第Ⅴ章　ま　と　め

第15次調査にあたる平成５年度の調査で、注目すべき結果が生じた。町道から東側の上原地区は、相対的に遺構の空白地帯である事が判明した。総面積28,000㎡に及ぶこの地帯は、遺構の検出状況にこれまでと大きな差異があった。

特に第10次～第14次調査で、町道から西側の下原地区(字長者原)から実に49棟もの(長者山の４棟を含む)建物跡が検山された事は周知の事実である。これに対して第15次調査分を含めて、上原地区で確認されたものは僅か６棟にすぎない。比較にならぬ数である。鞠智城時代に、下原地区と上原地区とでは、明らかに土地利用の面で相違があった事がわかる。

短絡的に見れば、「下原」が米・武器類の備蓄ゾーンで、「上原」が練兵場ゾーンであろうか。後者については戦争体験者の方々からの示唆であるが、城という性格からすれば、あながち的はずれな考えでもなかろう(ちなみに、これからすれば「屋敷」の集落は政庁ゾーンに相当する事になる)。

今回、明確となった上原地区の空白地帯は、今後の調査に大きな課題を残す事になった。

なお、各ゾーンの広さは、備蓄ゾーン76,500㎡、練兵場ゾーン29,000㎡、政庁ゾーン54,000㎡である。比率は備蓄ゾーン48%、練兵場ゾーン18%、政庁ゾーン34%となる。

① 上原地区調査概要

調　査	年　度	地　番	調査方法	調　査　成　果	鞠智城関連の建物	
第６次	昭和55年度	449－1	トレンチ	弥生時代の遺物出土。	0	
第10次	昭和63年度	486－1	全　掘	掘立柱建物１棟(19号) 大半は中世遺構(柱穴、土坑など)。	１棟	
第14次	平成４年度	445－1	全　掘	掘立柱建物１棟(44号) (４個の掘形のみ検出、西側部分の架行か？) 数多くの柱穴。	１棟	
第15次	平成５年度	486－1	トレンチ	１個の掘形(51号)。	1	
		494	全　掘	掘立柱建物１棟(52号)。 (復元にやや疑問が残る)	1	４棟
		451	全　掘	掘立柱建物２棟	2	
計					６棟	

② 下原地区(字長者原)調査概要

記号	地　番	面積(㎡)	鞠智城関連の建物
1	498－1	1,401	３棟
2	499	752	２棟
3	500	687	３棟
4	501－1	1,144	１棟
5	502－1	1,057	３棟
6	504	2,009	３棟
7	511－1	732	１棟
8	515	1,442	0
9	519－1	1,286	８棟
10	521	2,163	0

記号	地　番	面　積(㎡)	鞠智城関連の建物
11	523	1,388	３棟
12	524－1	1,435	２棟
13	525－2	371	２棟
14	525－3	1,523	１棟
15	525－4	1,127	0
16	528－1	1,116	４棟
17	529	1,050	２棟
18	544	2,013	４棟
19	546	1,194	１棟
	合　計	25,544	４３棟

＊１～19までは総て全掘である。
＊その他、503-1と512をトレンチ調査して、各１棟分を検山している。さらに長者山より４棟分が確認されている。

写　真　図　版

図版１解説

(1) 米原台地の南東側から俯瞰したものである。右下に三枝の石垣箇所が望める。さらに台地の東縁を形造る崖線の様子をうかがい知る事ができる。左上の山は土塁線である。

(2) 台地の上面域は図中の番号で示した様に、地形的に大きく４ブロックに分けられる。

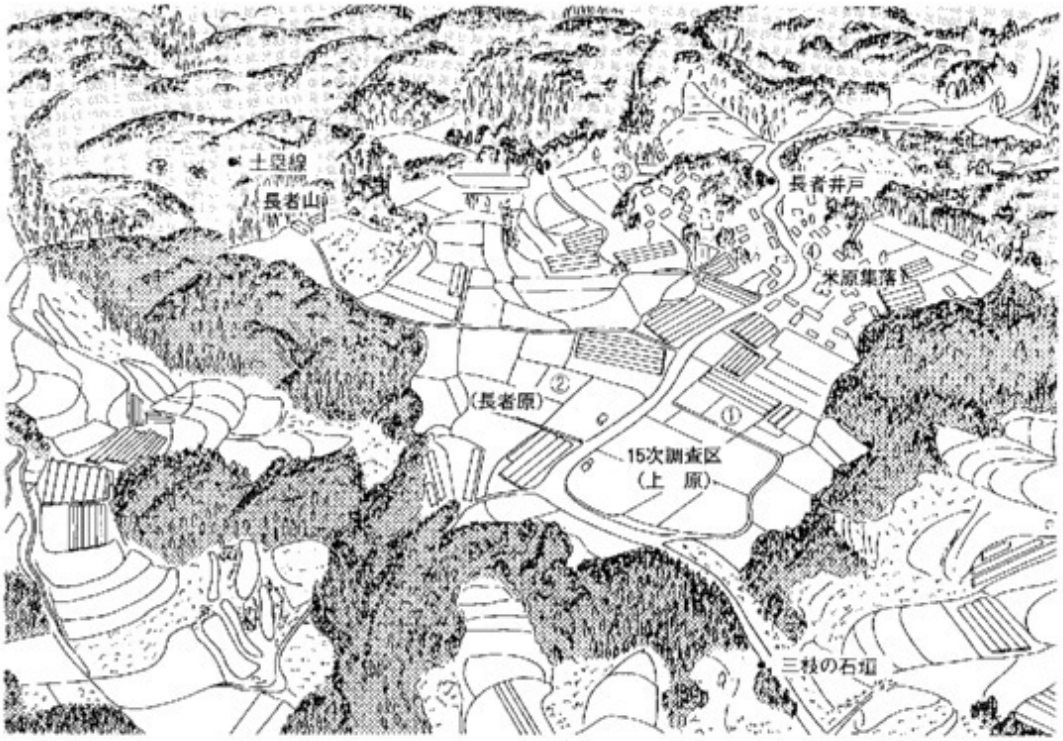
①一様な平坦面ではないが、最も高所区画である。「上原」と称されている。この区画に主たる遺構は存在しない。遺構の空白地帯である。

②町道を境に上原地区より一段低い区画である。「下原」と称されているが、字名では「長者原」となる。遺構の密集地帯で、これまで検出された遺構の大半がここに集中する。

③西側から北東側へ下る迫地で、階段状地形となっている。平成５年度の第15次調査で谷頭を発掘調査したが、遺構は存在しなかった。他の区域は未調査である。広義的には末端区域に「長者井戸」がある。

④米原集落部分で台地の北東部分にあたる。地形的には台地の上面域から見て一段低い所にある。俯瞰すると馬蹄形をした窪地に集落が成立している事がわかる。

図版１　航空写真①　米原台地（南東側上空より）



図版２解説

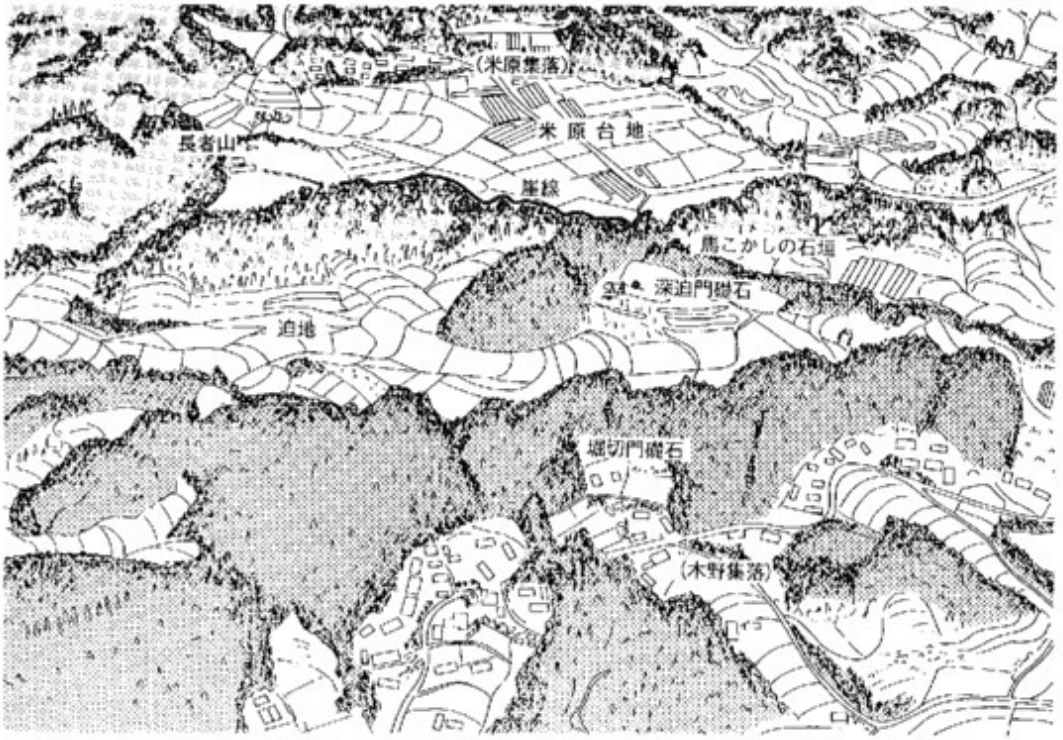
(1) 米原台地の西縁域を西南西側から俯瞰したものである。狭義的に台地は一旦、崖線を形造り、裾部は南側から北側へ下る迫地となる。しかし、城域はさらに西側へ拡大しており、迫地の縁は再び土塁線状の高まりを見せる。ちなみに城域の西限は木野集落(菊池市)に面する高さ20～30mに及ぶ絶壁である。この一部緩斜面箇所に堀切門礎石がある。この門礎は鞠智城の正門と見なされており、ここから旧道は南下して菊池の街道へ繋がっている。

(2) 南側から北側へ下る迫地は、途中で大きく括れている。土地利用の面も、そこまで水田で、それ以北は塩井川の流れる谷間となり、杉の植林地などに変化する。池の尾門礎石はちょうど、この地形の変化点にある。昭和40年前半の調査結果として、礎石自体は数十m、南側へ移動しているとの推論がなされている。しかし、地形的には門礎石の位置として妥当な場所である。

迫地の東縁沿いに道路が延びている。北端部は木野川を挟んで頭合集落に接する事になるが、橋の架かっている付近は「大門」(地元の方言でジャーモンという。だいもんの意と解釈する）と称されている。この地点は古来より福岡方面に上る椎持往還との接点にあたっている所から、かつては鞠智城の城戸があった可能性がある。現存の道路の原形は池の門礎石の存在も相まって、鞠智城時代にあると推論する。

(3) 15次調査で、池の尾門礎石までの迫地を80%近く試掘した。結果は、本報告書文末に記したが、遺構は存在しなかった。「せまち」と呼ばれる江戸時代からの開墾地で、迫地を東西両側へ漸次、削り広げたものであった。

図版２　航空写真②　米原台地西縁域



図版 3 解説

(1) 米原台地の南域を俯瞰したものである。城域の南側箇所は野首地形となっている。広い意味で四方を迫地に取り囲まれた円形状の米原台地もこの箇所のみ、唯一、陸続きである。三枝の石垣はこの野首地形の西壁面に残っている。一部、専門家の間で、この野首地形は後世の作造ではないかとする見方もあったが、凝灰岩の岩盤が存在する事で、それは否定される。

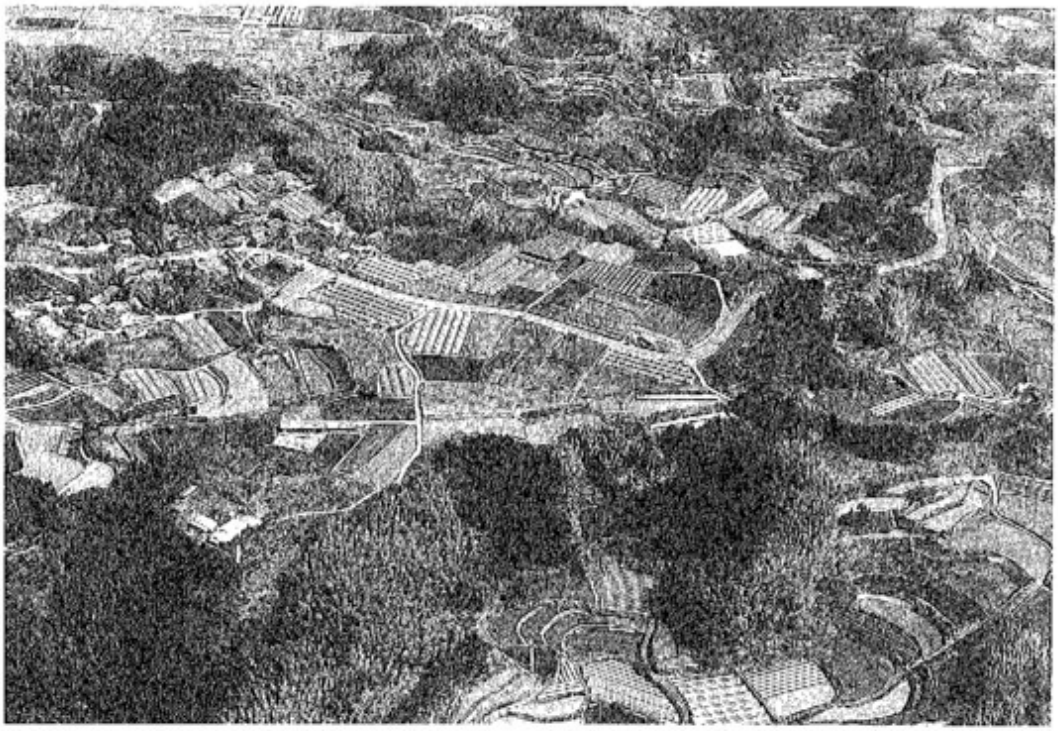
狭義的に、この野道地形は米原台地の南東域に迫地を挟んで成立している鐘掛松集落と鞠智城を連結することになる。さらには、この集落内に菊池市隈府からの古道が通っているので、それとも繋がる事を意味する。

(2) 集落の北縁には土塁状の地形が残っている。米原台地の対岸にあたる所で、広義的に鞠智城の外郭ラインを形成する所である。この鐘掛松集落については、今後、さらに調査が必要である。米原台地と同様に長者伝説も残っており、米原集落と同様に鞠智城との結び付きがうかがわれる。ちなみに、「長者さんの韮畑」という畑地である。

図版３　航空写真③　米原台地南域

図版 4 解説

(1) この写真は、米原台地が上面域で広い平坦面を有するものの、縁ではかなりの崖面を形成している事を示している。米原台地は、その意味で城地にふさわしい要害の地である。



図版４　航空写真④　米原台地（南西側上空より）

図版５解説

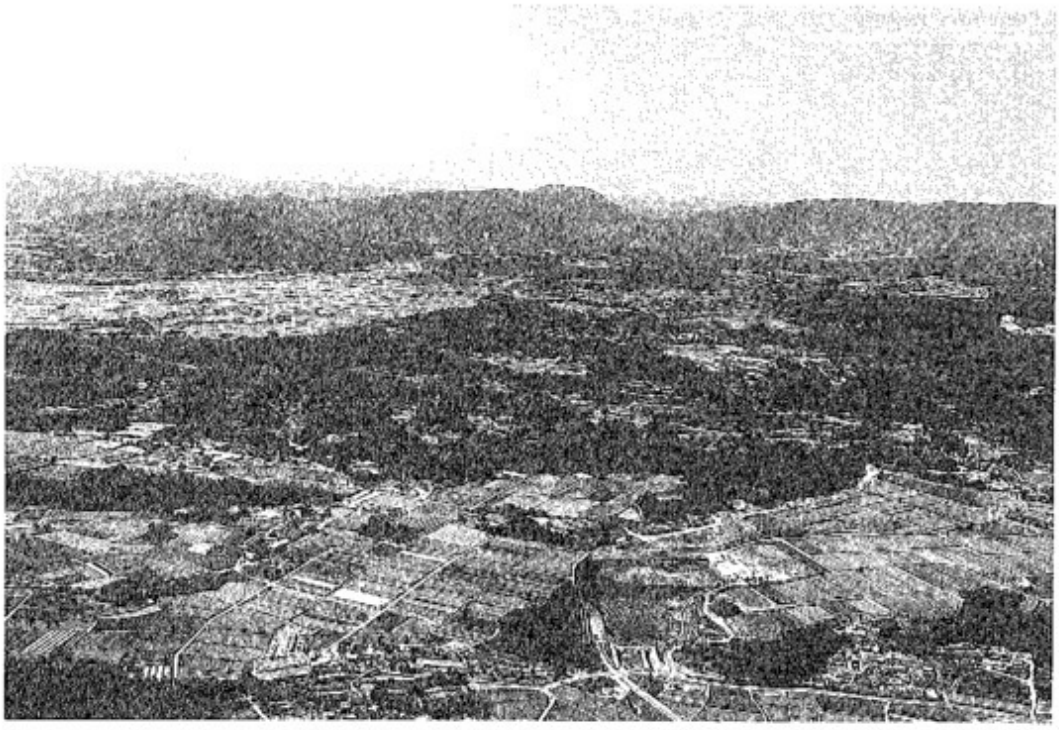
(1) 米原台地を東側から遠望した航空写真である。写真の中段より下は、広大なひろがりを有する台(うてな)台地で、写真外のこれよりさらに東側に菊池平野がある。

(2) 頭合～立徳～横枕の丘陵ラインである。鞠智城の外郭ラインと見なされる所で、尾根は土塁線に外ならない。南端部分にあたる所が「頭合」である。

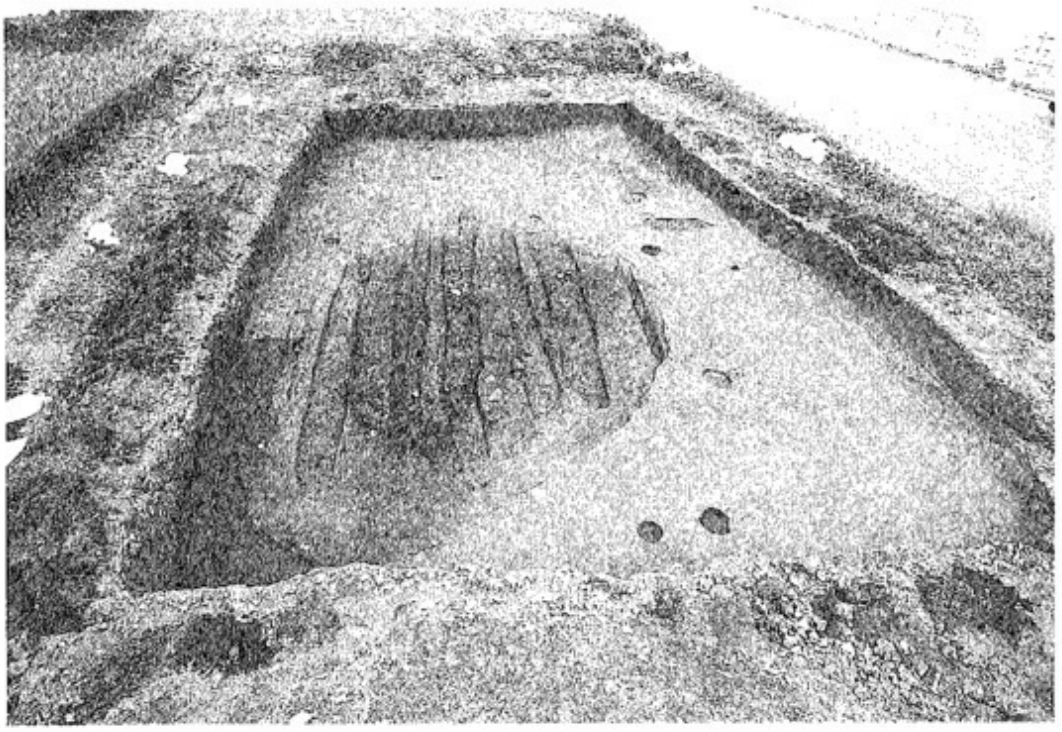
この写真は広義的に見た場合、米原台地が南側の一部区域を除く三方を丘陵によって完全に囲繞されている事を示している。

図版２－(2)で触れた頭合の「大門」は、その意味で非常に重要である。「大門」は鞠智城の開口部にあたっている。

(3) 「日の岡」という地名の残る山である。北西方向、山鹿市の中心部分から延びる連山の連端部にあたる。地名から鞠智城に関連する「烽火」のおかれた山との解釈がなされている。「日の岡」については平成６年２月に詳細な踏査を行った。



図版５　航空写真⑤　米原台地遠望（東側上空より）

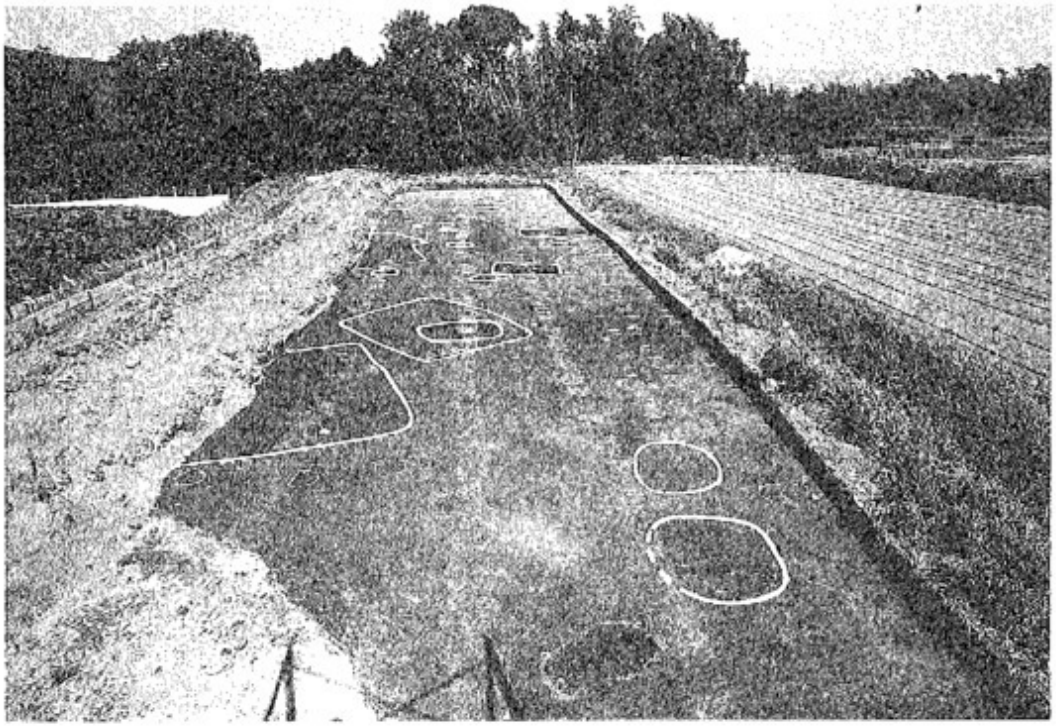


図版 6　23調査区南側調査区

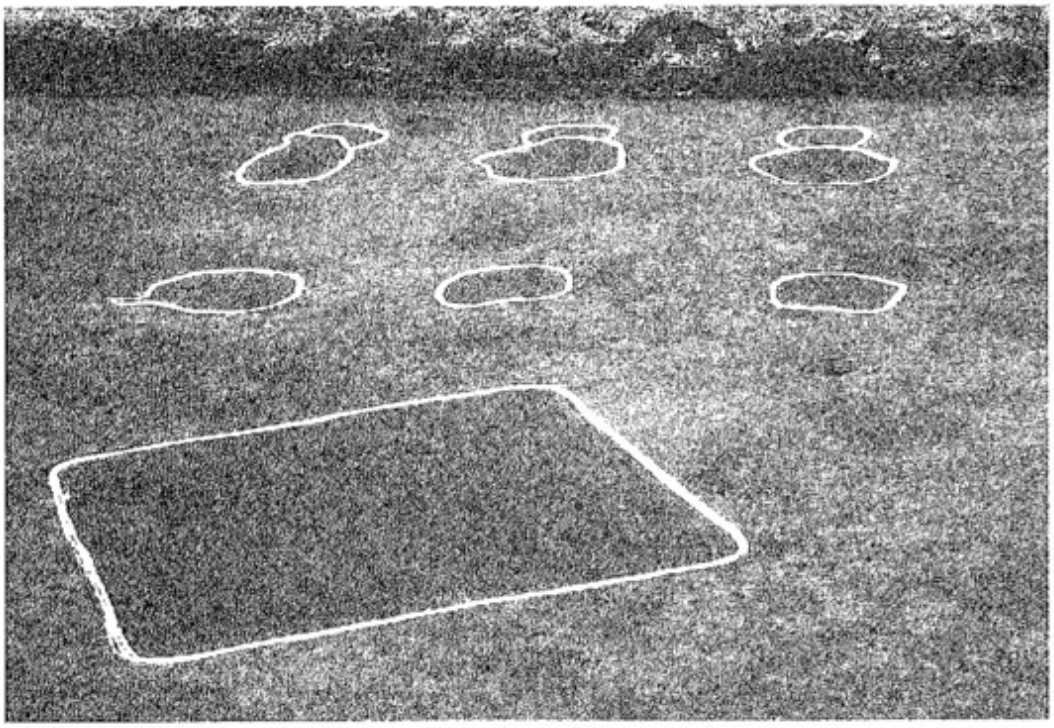
図版 7　23調査区土坑

図版 8　24調査区

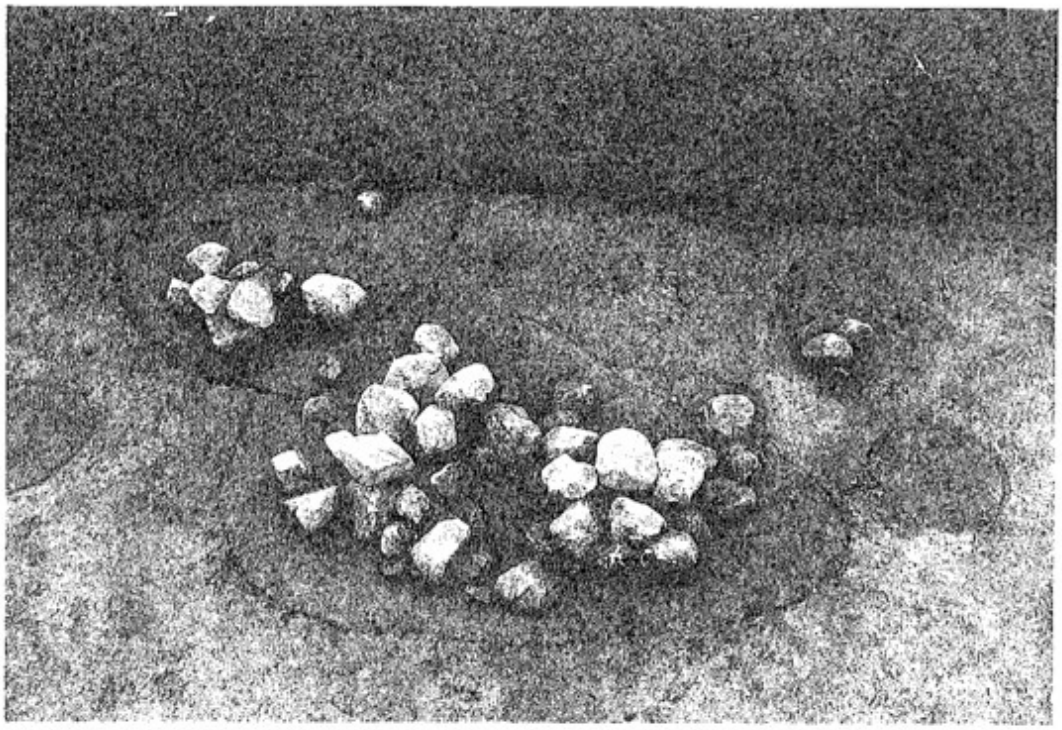
図版 9　24調査区から出土した備前甕



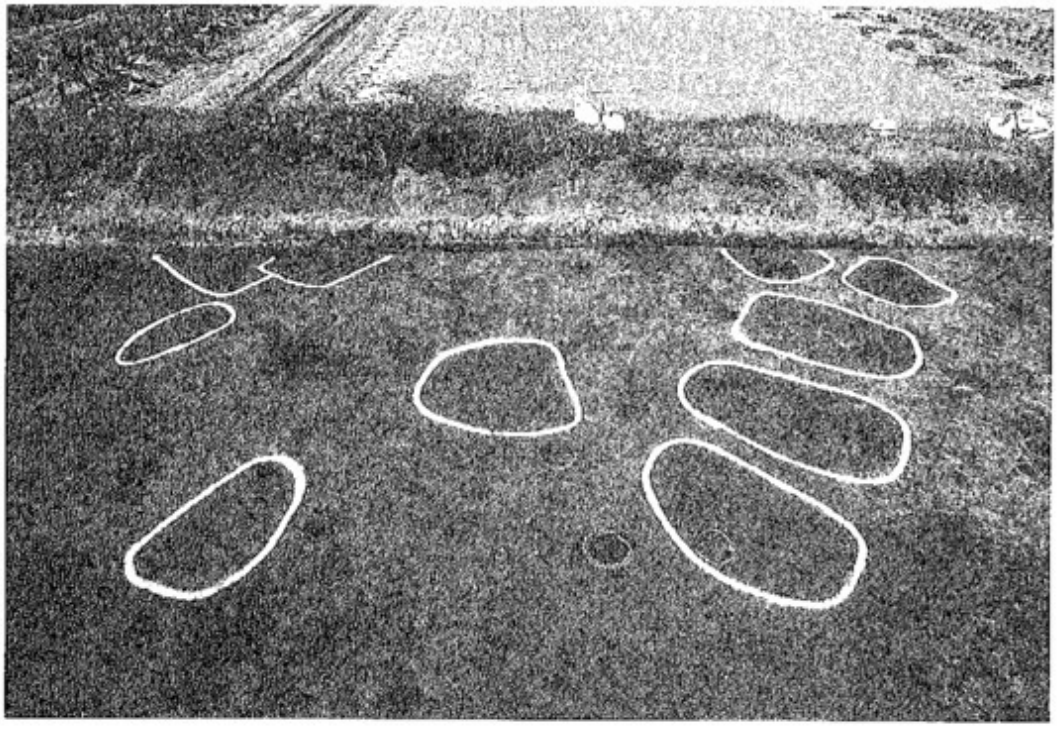
図版10　25調査区



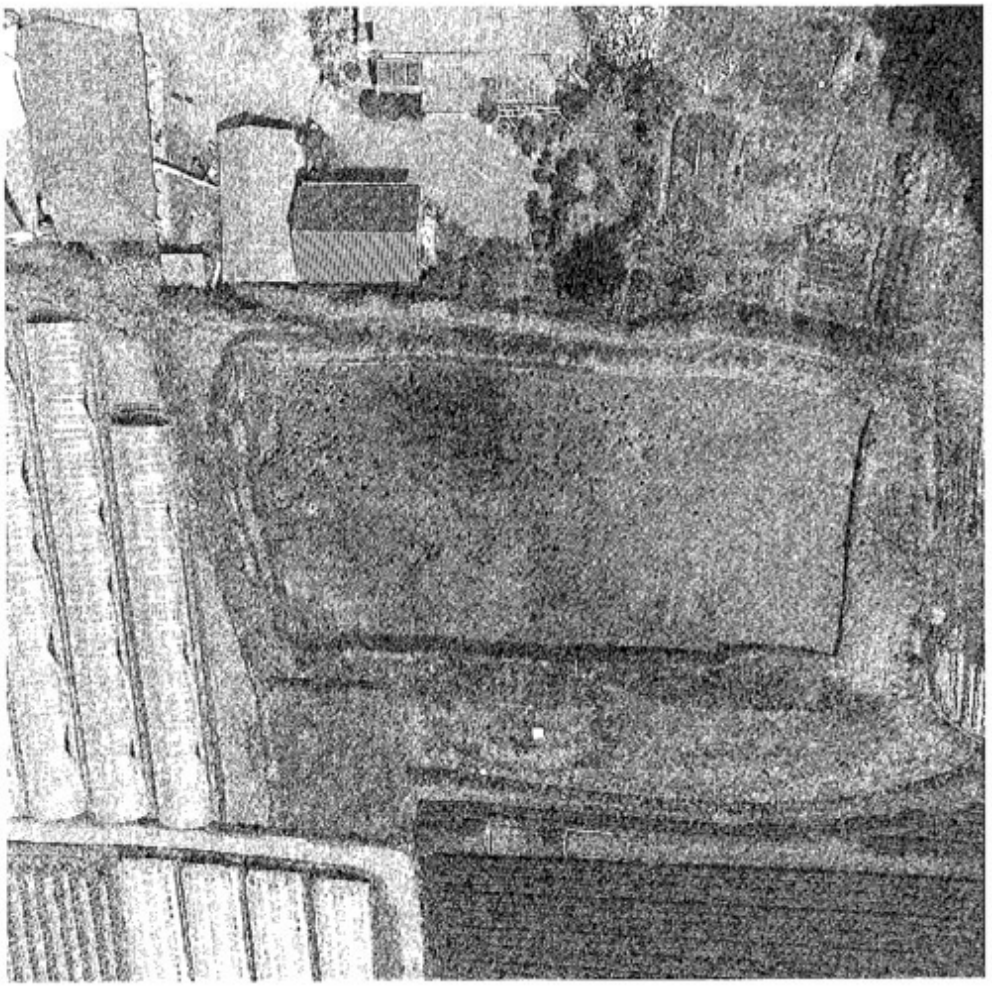
図版11　27調査区53号建物跡と弥生居住址（１号）



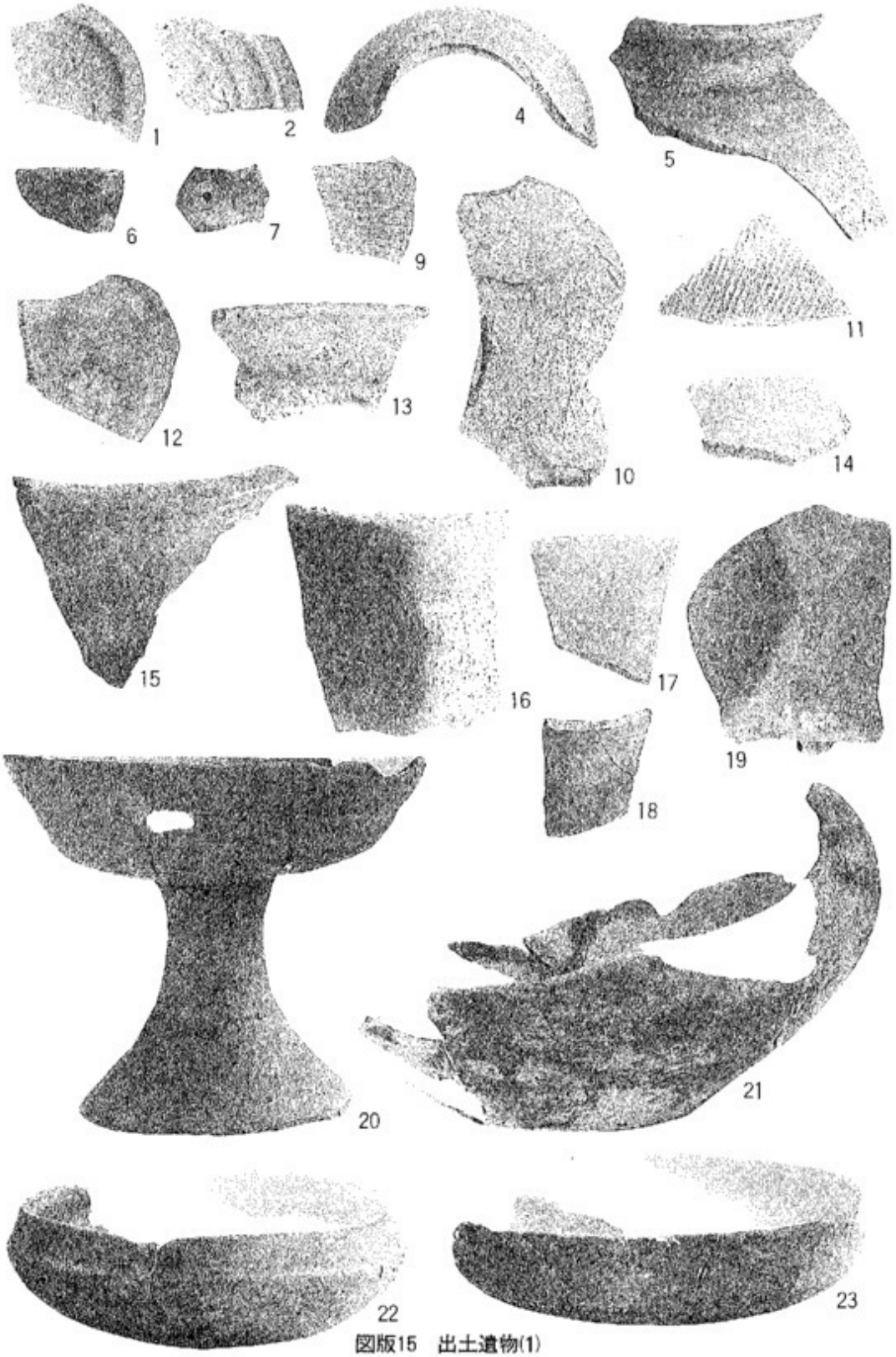
図版12　28調査区集石



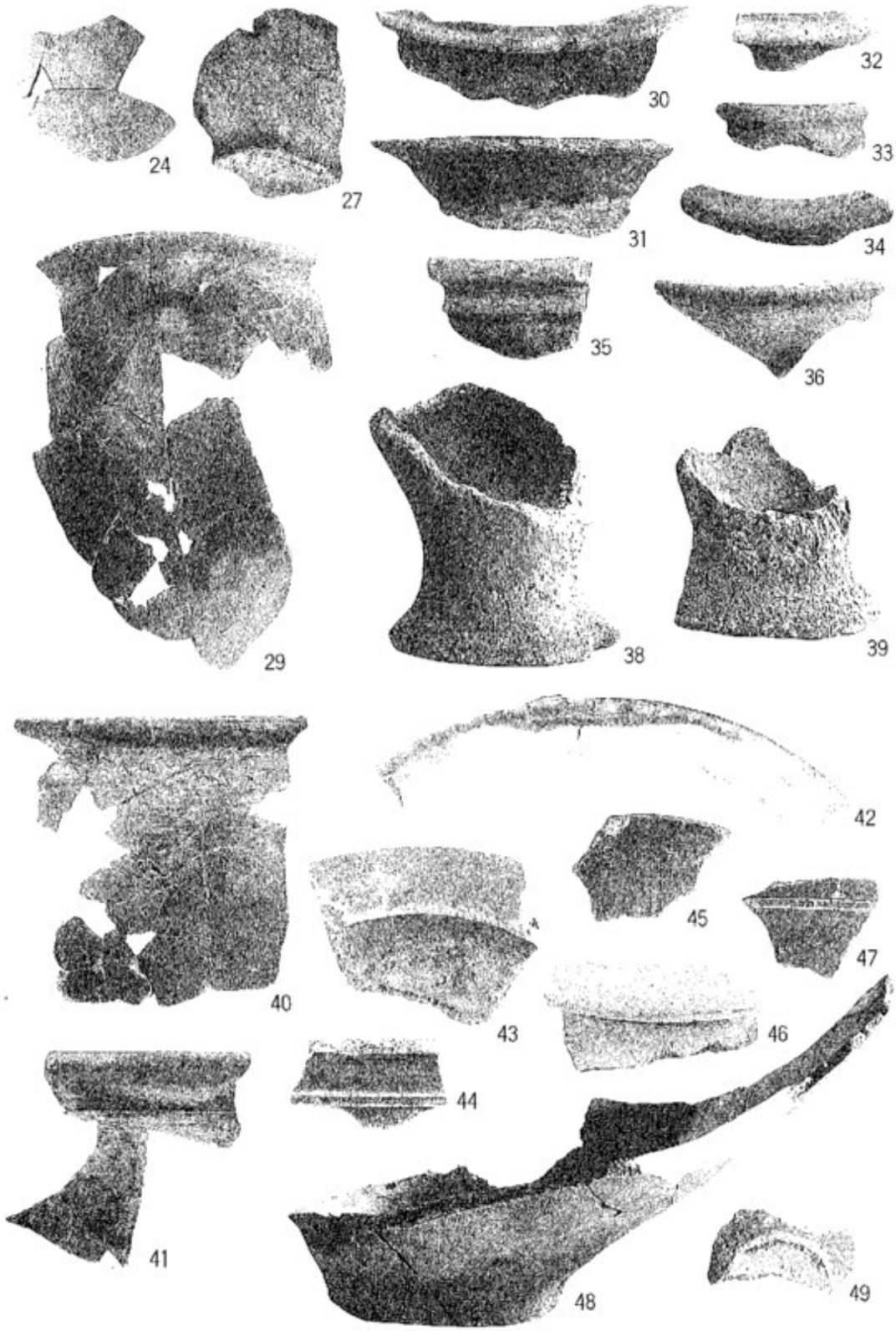
図版13　31調査区（北側土壙）



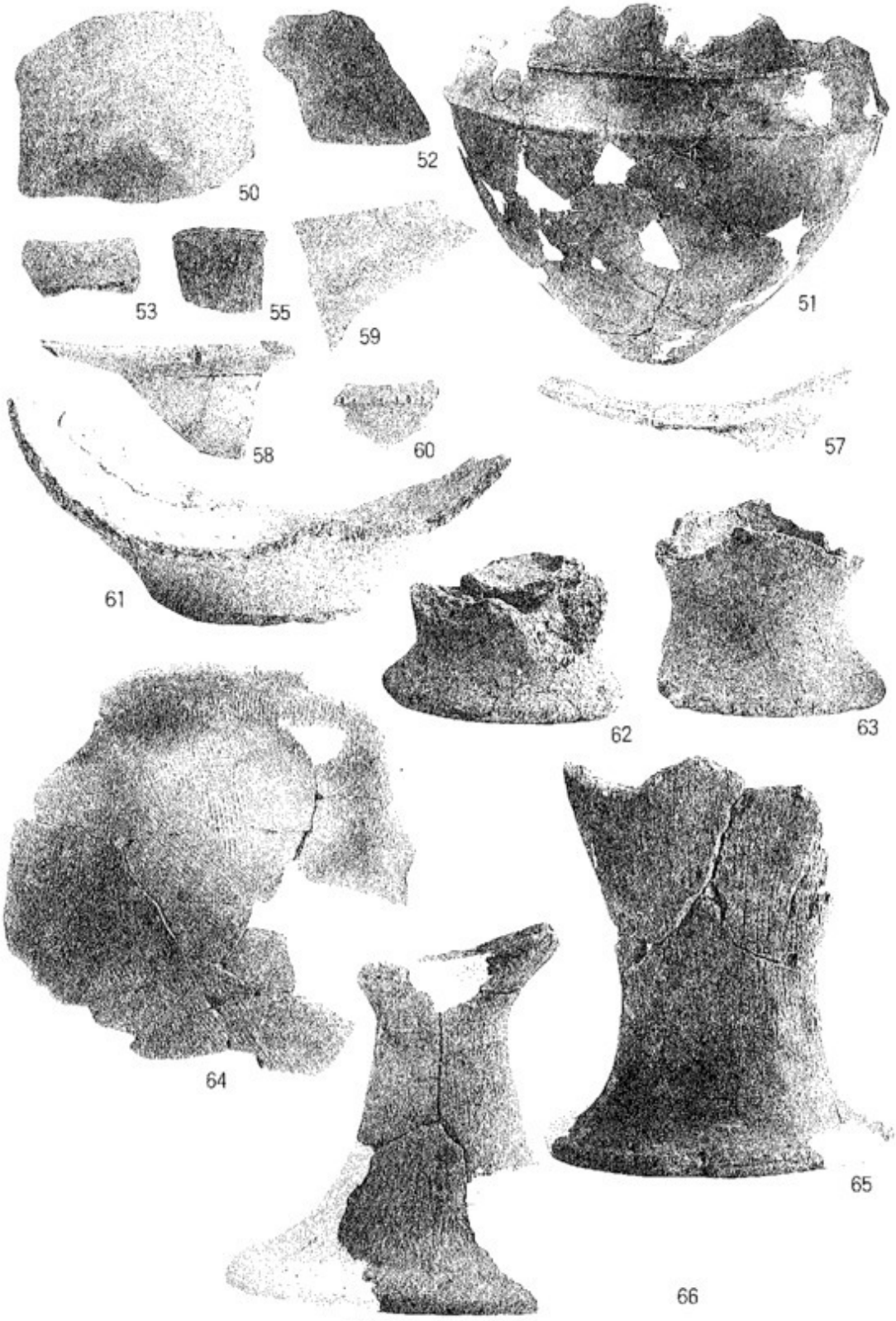
図版14　21調査区航空写真



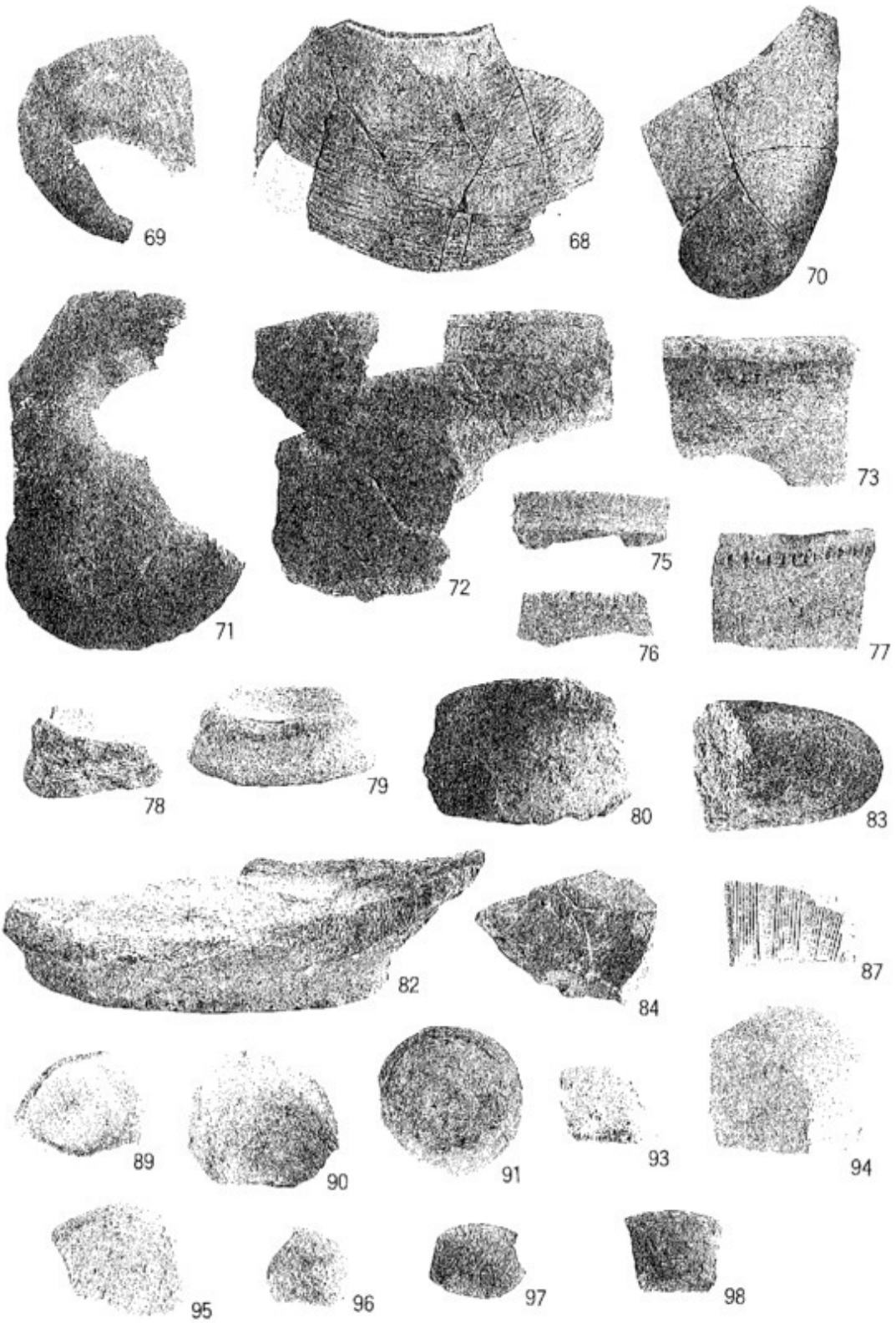
図版15　出土遺物(1)



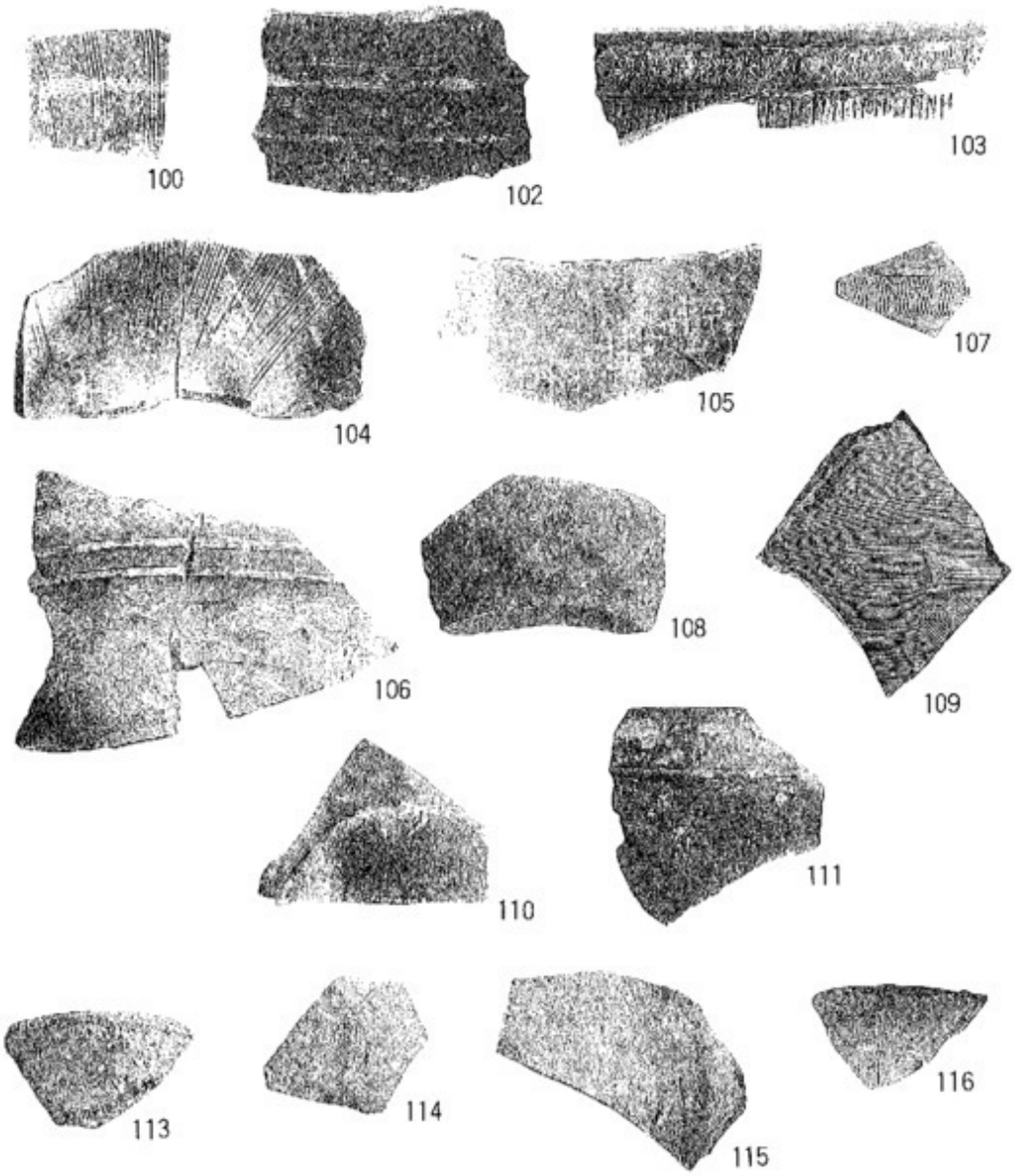
図版16　出土遺物(2)



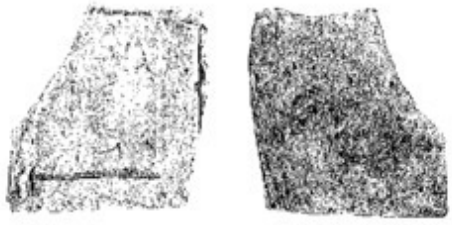
図版17　出土遺物(3)


69
68
70
71
72
73
75
76
77
78
79
80
83
82
84
87
89
90
91
93
94
95
96
97
98

図版18　出土遺物(4)

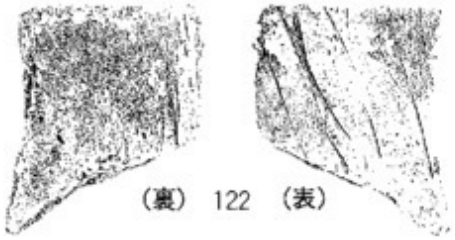


図版19　出土遺物(5)



（裏）　117　（表）

（裏）　119　（表）

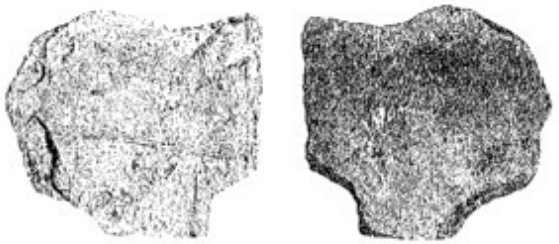


（裏）　122　（表）

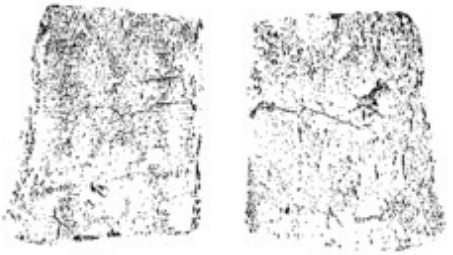
（裏）　123　（表）

（裏）　124　（表）

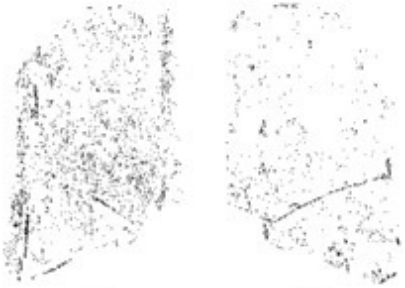
（裏）　125　（表）



（裏）　126　（表）



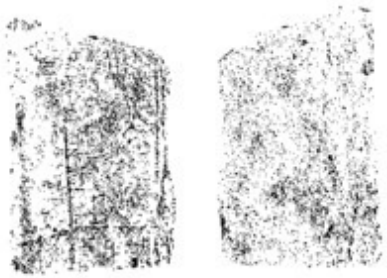
（裏）　127　（表）



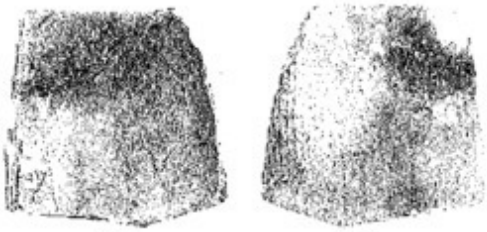
（裏）　128　（表）

（裏）　130　（表）

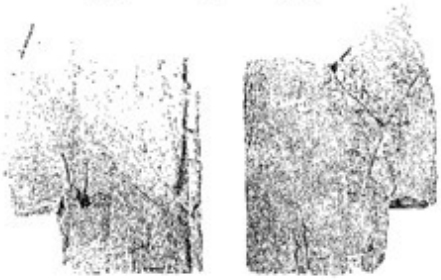
図版20　出土遺物　瓦(1)



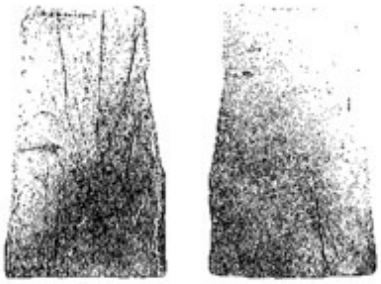
（裏）　135　（表）



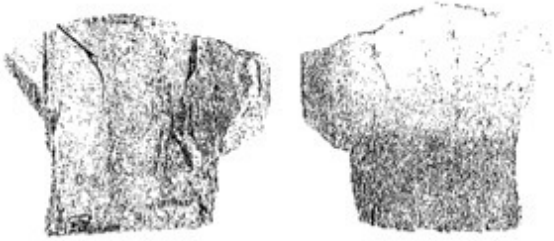
（裏）　136　（表）



（裏）　137　（表）

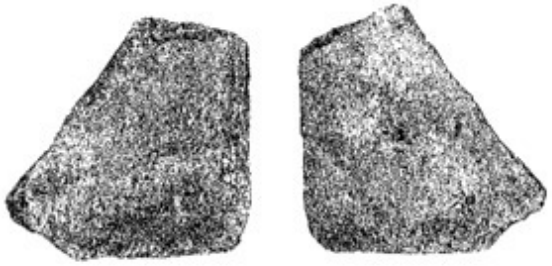


（裏）　138　（表）

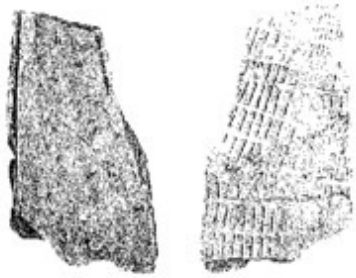


（裏）　139　（表）

（裏）　140　（表）



（裏）　141　（表）

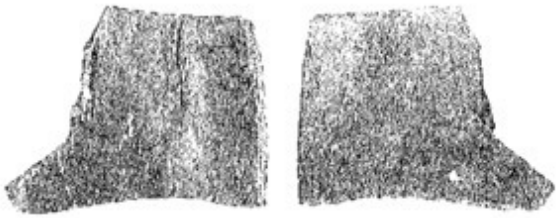


（裏）　142　（表）

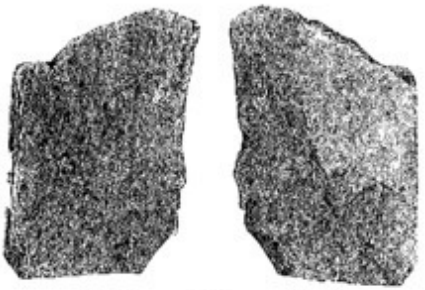
（裏）　145　（表）

（裏）　146　（表）

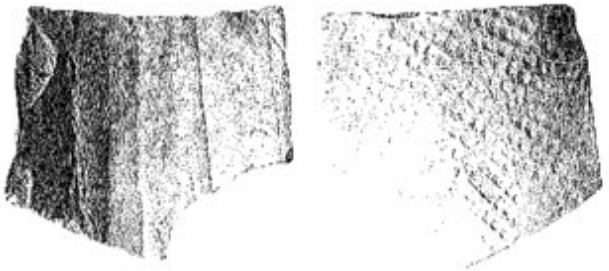
図版21　出土遺物　瓦(2)



（裏）　149　（表）



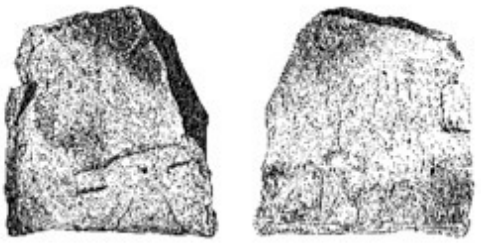
（裏）　150　（表）



（裏）　154　（表）

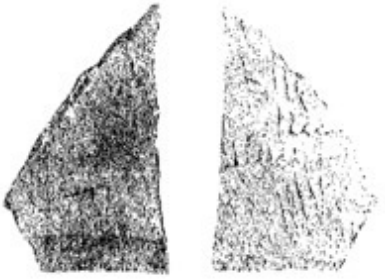
（裏）　155　（表）

（裏）　156　（表）



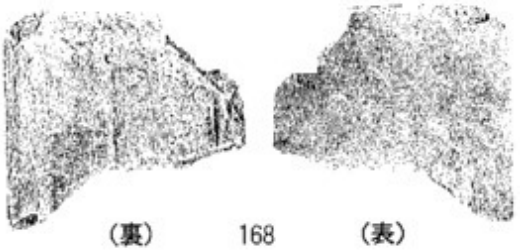
（裏）　158　（表）

（裏）　159　（表）



（裏）　163　（表）

（裏）　166　（表）



（裏）　168　（表）

図版22　出土遺物　瓦(3)

熊本県文化財調査報告書146集

鞠智城跡

── 第15次調査報告 ──

平成6年3月31日

編集発行：熊本県教育委員会
〒860
熊本市水前寺6丁目1－18
TEL　096－383－1111（代）
文化財調査第2係（内6716）

印　　刷：（株）大和印刷所
〒862
熊本市戸島町920－11
TEL　096－380－0303

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 146 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日